

湖畔の夕映え

カルシユ博士と松江

若松秀俊

フリッツ・カルシュ
松江での日々と
日本への想い



中海の向こうに見える雄峰大山

フリッツ自筆のパステル画

フリッツは幼少の頃、まだ見たことの
なかつた大山だいせんを何度も夢に見た。

目次

プロローグ	11
エルベ河のほとり	13
ドレスデンのタス	21
出会い	28
学校	36
野外の授業	38
衝撃	43

一人歩き	45
官舎の夕べ	53
学問	58
先生の旅	63
同盟休校の後で	69
夏休み	79
嵩 <small>たけ</small> のふもと	92
奥谷の洋館	108
家族	112
神社のカラス	118
学園祭の時	120
暗雲	124
別れ・日本への想い	127
帰国	137
新しい生活	141
ベルリンの命令	143

プロローグ

大正時代の終わり、自由の雰囲気はまだ日本全体にみなぎっていた頃、一組のドイツ人夫妻が憧れの日本の地を踏んだ。フリッツとエンメラであった。

フリッツは旧制松江高校のドイツ語教師としての誘いを受けていた。赴任してしばらくした頃、大山の雄姿に接した。そのとき衝撃が彼の身体の中を走った。幼い頃何度も夢見た懐かしの風景であった。

やがて、この地は彼にとって、生涯切り離すことのできない不思議な縁で結ばれていることを悟った。戦争の足音が彼の運命を次第に変えていった。そしてついに愛する日本を離れた。しかし、それも彼の日本への想いと彼を慕う人々との絆を断ち切るものではなかった。やがて彼のその想いとその絆は、彼とは何の縁もなかった一人の名もない科学者に天からやさしく呼びかけた。

みづ
湖水の静けさと

こゝろのせいじ

エルベ河のほとり

—

バロック風の街並みの輝きは、田園の地で鶏の鳴き声とともに牛や馬と暮らしている周囲の人々には、まばゆいばかりであった。

フリッツが希望に胸を膨らませ、今足を踏み入れたこのドレスデンはエルベ河のほとりに広がる美しい芸術の街である。

エルベのフィレンツェとよばれ、街中がまるで美術館と見まごう、河の流れに沿った美しい水の都のたたずまいでもある。

子供の頃、何度か家族がこの地を訪れたことがあった。

河に沿って東に向かると、そこはプリュールシュ・テラッセと呼ばれるエルベの展望プロムナードである。

ゲートがヨーロッパのバルコニーと言ったことを思い出していた。

ゆったりと流れるエルベの、ここからの眺めは素晴らしい。

背後の光輝く堂々たる城は、現在は美術大学として使われている。

テラスのはずれはルネッサンス様式のアルベルティヌムで、現在はザクセン王家の財宝がおさめられている博物館である。

ふとがすかな記憶に残る父を思いだした。フリッツが八歳のときに亡くなった。

とうに人手にわたったブラゼヴィッツの自分の家を想った。家の近くを流れるエルベ河の辺に立つと、はるか彼方に日が昇る。幾度となくそこを訪れては輝く朝日を眺めた。

ドレスデンの繁華街に、家族と買い物に行ったことを思い出した。その記憶は、しかし、ぼんやりとしてみやり定かではない。

フリッツは母の仕事の手伝いをよくしたものだ。父が亡くなると、母の手伝いで夜明

けとともにロシュヴァイツに食肉の仕入れに行くのが常であった。とても力の要るフリッツにはつらい仕事でもあった。あの《青い橋》をわたるとその先には、家畜とともに人々がのんびりと暮らす農家が点在している。

そこは、春には花が咲き乱れ、草木が茂り、秋には梨やリンゴがたわわに実る美しい田園であった。

そこに食肉を求めて通わなければならないつらさがあった。

姉フリーデルと三人の生活は貧しかったが、それなりに楽しく暮らしていた。

しかし、夫が存命であつたらと妻のルイーゼは子供達の顔を見ては、彼らの父の死を嘆いたものであつた。毎日が悲しみと追憶の連続であつた。

父のない一家にとってそれまでの生活を維持することはとても不可能なことだつた。父の死後ほどなく、店と家が人手に渡つてしまつた。

父ヘルマンは、ピルナの近くのエツシユドルフ⁶出身で、ここ、ブラゼヴィッツで食肉を手広く扱つ店舗を営んでいた。

この地からロシユヴィッツ⁶に通じる橋の

工事を行なつ労働者にソーセーシヤサンドイッチを売っていた、よく繁盛した店でもあつた。

工事が始まつた一八九一年から僅か三年の



ブラゼヴィッツ・シラープラッツにあるフリッツの生家
H K (Hermann Karsch)が見られる

間に、借金はしたものの、たちまちエルベの河沿いに大きな家を建て、民宿も含めた

商いを拡げてきた。

両隣もこの時期に一緒に商売をして同じ規模の家を建てた仲間であつた。

できあがつた橋の精巧さの中に、現在に劣らぬ高度な技術を見せてくれる。これが、クリューガー⁶により設計されたエルベ河をまたぐ約一・五キロメートルの鉄橋である。

最初に塗つた緑色が時間とともに青色に変わったので、ブラウエスフンダー（青の不思議）と、驚きと親しみとをもって、このロシユヴィッツ橋を呼んでいる。

橋は一八九三年に完成した。この年にフリ

ッツが生まれたのだつた。

完成後まもない橋に路面電車が走り、ブラゼヴィッツからケルナープラッツ⁶まで開通したのは土地の人々の大きな自慢であつた。

二

母ルイーゼは当時の記憶の定かでない二人の子供に何度も繰り返して昔の暮らしを語つた。

フリッツは故郷のブラゼヴィッツの小学校に通っていたが、在学中に、父が突然風邪をこじらせて肺炎で亡くなつた。

一九〇一年のことだつた。

父の仕事を将来継ぐのが母の彼への期待であったが、その二年後、十三歳のフリッツはノイシュタットの人文系ギムナジウム^本に入学した。ラテン語や英語、それに哲学の基礎を学んだ。しかしどうにも言葉に身が入らなかつた。家では毎日、何となく息苦しさを感じた。

そんな中でさらに二年後に、ブラゼヴィッツの自然科学系のギムナジウムに変わり、何とか方向転換をしようとした。しかし、なかなか自分の方向が定まらなかつた。

一九一〇年の暮に、友人のトーマスと一緒にドレスデンに足を向けた。

街はざわついていた。店はいつもと違って人々の出入りが激しく、それもそのはず、この地で行なわれる国際博覧会の準備で広場はこった返していた。とくに各国の有力者が宿泊する予定のホテル周辺は客を迎える準備でおおわらわであった。

明けて一九一一年はファンファーレとともに国際博覧会が開会された。フリッツにとっては、遠い異国のことはもちろんヨーロッパの国々のこともただ珍しく、見るものすべて胸ときめく驚きであった。

「ところで君は、あの山並を越えて、やがてチエコに行くんだろ。叔父さんが手広く商売をしているんだし。いいな、あてが

「そうか、ここ、ヨーロッパはアーベントラント、夕日の国だ。そして、これがゾネンアウフゲエンデスラントだ」

「ならば、朝日の昇るとても遠い東の国の意味か」

「東の果てだ。そりゃもつ。とても遠いな」

「これは」

とその場の係の者にフリッツが尋ねた。

「ラファディオ・ハーン^本の書です。日本に住んだアイルランド人の書いたものです」

あつてな。トーマス」

「おい、フリッツ、ちょっとこれをみようよ。変わったファーネ(旗)だな。白い生地に赤丸。展示がまた変わっているな。変わった服装だな。なんだらうこりや。変な置物だな。でも調度品とはよく合つな」

「おや、この山は、はてこの湖と」
「かで見
たよな」

「この国では春には梅が咲き、いたるところに桜が咲き乱れるとのこと。水に浮かぶ美しい、日が昇る国、日本という国だぞうだ。フリッツ」

「よかつたら、手にとって見てください。
これが彼の写真です」
壁に掲げたハーンの写真を指さした。

これを見たフリッツの表情が幾分変わった。
用を思い出した彼は、すぐにその場をはな
れ、印象を胸に自分の家にもどった。

しかし、どうにも気になった彼は翌日、再
びその場を訪れ、昨日のドイツ語を話す係
の日本人から詳しく様子を聞き、幾つか日
本に関する資料を手に入れた。

すると異例の関心をもったフリッツに、帰
り際に

「あなたに、これを差し上げましょ」

とその手にカフスポタンを握らせた。

それは美しい光を放つ金製の飾りが施され
たもので、フリッツに彼の運命を暗示する
かのようであった。そして、このボタンは
生涯大事に使つことになった。

帰り道、アルトマルクト（旧市場広場）の
カフェでコーヒーをのみながら、日本に関
する紹介記事をむさぼるように読んだ。鮮
烈な印象であった。

しばらく経つたある日、フリッツは突如何
かに取り憑かれたように、今自分が学校で
学んでいる自然科学の勉強に集中し始めた。
博覧会の展示から刺激を受けたからなのか。

「そつだ。これからは、自然科学の応用が
大事なのだ」

少し後れて大学入学資格のアビテュアに合
格した。

すでに、二十一歳になっていた。自らの飛
躍を求めて、これまでに学んだ田舎のブラ
ゼヴィッツを後にすることにした。

ひとりて暮らす決心をした。これからが自
分の人生だ。

これまで何となくあつた母のもとの拘束
感から抜け出したかった。

フリッツは胸を膨らませ、何とかこの都で
学業に励み、一旗あげたいと思った。

ここドレスデンは、バッハの時代には音楽
の中心地であり、ともに天才といわれた詩
人のクライスト^オやピアニストのホフマン
も活躍した文化の街である。

希望に胸を躍らせてこの地に再びやって来
た彼にとって、街の中で出会つたものの総
てが美しく、目にまぶしく感じられた。

ドレスデンは腕力と胆力に優れたザクセン
侯フリードリヒ・アウグスト一世^世によ
つて真に築かれ整備された都市である。俗
に、アウグスト・シユタルクと呼ばれてい
た国王によつていまの基礎が創られたのだ
つた。

街の様子に、感動の連続だ。
母を助け仕事に勤しんでいたが、忙しい割には生活がどうにも退屈だった。何ともいえない不満と不安な毎日であったからだ。

ドレスデンのタブ

—

彼は今し方、ドレスデン工科大学に入学の手続きを済ませたばかりであった。最新の通信工学を学ぶつもりであった。そのため

に広く自然科学の基礎を学ぼうとした。入学に必要な費用は自ら懸命に貯めたものであった。

「ああ、あのとき助かってよかった。今こうして学ぶ喜びを感じることができ。やはり、生きていてよかった。神様のおかげだ」

彼は、四歳になる頃、危つくエルベ河でおぼれ死にそうになった。そのとき、どこの誰とも分らない旅人が助けてくれたのだ。その情景が今でもはっきりと脳裏に焼き付いている。

母どきの忙しいときのことだった。

「フリーデル、フリッツをみているのよ」
「はい、わかったわ。ムティ」
姉のフリーデルが母ルイゼに向かって返事した。
「フリッツ、こっちへいらっしゃい」

「フリーデル、こんにちは」
「あら、ベアーテが買ったの」

近所の同い年のベアーテだ。
「このまえ、あなたが買ってもらったイタリアのお人形を見せて」

「ええ、いいわよ。こっちよ。」階の部屋よ、ベアーテ。来て。フリッツはここにいますよ」

いつの間にか、二人の女の子は人形遊びに



ブラウエス ブンダーと
呼ばれるロシュビッツ橋

夢中になり、フリッツのことをすっかり忘れてしまった。

フリッツは、道路を挟んで、完成したばかりの緑色の鉄骨の超近代的なロシュビッツ橋をみていた。道路の目の前が下り坂だ。そこを下りていくと石畳の河岸だ。

昨日まで雨が降って、すっかり天気が良くなった今日も、まだ水量が増したままであった。大きな灌木の集合が通常の河岸の境であったが、運の悪いことに、それがはつきりとはわからない。

橋の真下に来ると、その構造がよくわかる。小さい頃から物の仕組みに関心の強かったフリッツは橋の構造とその壮大さに魅せられ、天を仰いで歩き始めた。

突然、灌木の葉で足が滑った。

雨上がりのエルベの流れは速い。どンドン流された。

辺りを何気なくみていた一人の旅人がこの

ことに気がついて着衣のまま飛び込んだ。恐怖で泣いているフリッツの背中をつかんで岸にやっとはい上がった。

「ほつやの家は？」

泣きやんだフリッツに尋ねた。

フリッツが指で示した。

「あっち」

「ありがとうございます。なんとお礼をいってよいやら」

フリッツを抱き上げてルイーゼは涙ながらにお礼をいった。

「本当にありがとうございます」

父ヘルマンも深々と頭を下げた。

「わたしは道を急いでいますので、失礼します」

あまりにも、あわただしかったので、ヘルマンもルイーゼも命の恩人の名を聞くのを忘れてしまった。

後に、周りの人にこのことを話し消息を求めた。しかし、ついに分からずじまいであった。

「あれは、神様だ。きつと私にこれから立派に生きなさい。と教えてくれたのだ」

フリッツはテラスからエルベ河の流れをぼんやり眺めながらそつつぶやいた。

二

この日フリッツは街なかの大字に近いガストシュタットに宿をとった。二階の小さなベッドと洗面の設備があるだけの部屋だった。

外は少し寒かったが、部屋のぬくもりにより心が安まる。階下が食堂になっている。

ドアをあけて窓際の古風なテーブルに腰をおろした。

紅白の鮮やかな民族服をまとったウエイトレスにビールを注文した。それを静かに飲み干した。一緒に注文したポテトサラダとソーセージをもゆっくり口に運んだ。

他に注文を聞いてきたので「コーヒ」を頼ん

だ。
飲み終えて、勘定を済ませるときに、大きな財布を這うように動く。しなやかなウエイトレスの手先をしつと眺めていた。

その日は、早めに床についた。
夢をみた。

子供の頃見た夢が現れた。見たことのないきれいな景色だ。海だろつか、それとも湖だろつか、よく分からない。

そこに、みごとに対称をなしてバランスよい拡がりの中に高く聳える神々しい山が見える。

このような風景を五、六歳の頃、何度も何度も夢みた。でも、この十年ほど夢には現れず、すっかり脳裏から離れていた。

見たことのない景色、美しい山、ふと目を覚ますと月の光が彼の顔に影を映していた。自分が一瞬、誰であるかわからなかった。

彼が過してきてきたこの地には山がなく、ずっと南のチエコとの境に見事な渓谷が広がるだけである。美しいが、その景色とは全く違っている。

「フリッツ、フリッツ、遠い昔、お前は、はるか東の国の湖水の畔^{みづ}で生まれたのだ」
天空から何かがささやいた。ほんの短い時間であった。

翌日から、学校の準備のために城の近くの旧市街にでて、必要最小限の学用品を購入した。

できるだけ出費を抑えなければならなかった。それから十日後に待望の学校が始まった。

学校は楽しかった。講義のすべてが、おもしろく、とくに論理的に学べる技術系の科目は、彼の得意とするところであった。

図書館の書架を眺めた。通信工卒の先駆者のマックススウェル⁶、ヘルムホルツ⁷、ヘルツ⁸、マルコーニー⁹の目を見張る実験やその将来に関する解説記事が雑誌をにぎわして

三

いた。

通信の技術はやがて、大きなビジネスになるにちがいない。
「私の思った通りだ」

しばらくして、フリッツは十八世紀前半にペッペルマンの作になるバロック建築で、回廊の要所に楼閣を配したツヴィンガー宮殿¹⁰に足を向けた。

貧しかった少年の心には、バロックの宮殿の華麗さと重なる自分の華やかな生活の映像が浮かんだ。

中庭には噴水が見られる。宮殿のテラスに

だ。
飲み終えて、勘定を済ませるときに、大きな財布を這うように動く。しなやかなウエイトレスの手先をしつと眺めていた。

その日は、早めに床についた。
夢をみた。

子供の頃見た夢が現れた。見たことのないきれいな景色だ。海だろつか、それとも湖だろつか、よく分からない。

そこに、みごとに対称をなしてバランスよい拡がりの中に高く聳える神々しい山が見える。

このような風景を五、六歳の頃、何度も何度も夢みた。でも、この十年ほど夢には現れず、すっかり脳裏から離れていた。

見たことのない景色、美しい山、ふと目を覚ますと月の光が彼の顔に影を映していた。自分が一瞬、誰であるかわからなかった。

彼が過してきてきたこの地には山がなく、ずっと南のチエコとの境に見事な渓谷が広がるだけである。美しいが、その景色とは全く違っている。

「フリッツ、フリッツ、遠い昔、お前は、はるか東の国の湖水の畔^{みづ}で生まれたのだ」
天空から何かがささやいた。ほんの短い時間であった。

登ってみた。ここから眺めた正面の金色の尖塔と緑青の屋根が調和し、テラスの縁に並んだ彫刻が水の遊びに美しく映えていた。

宮殿を出た。

十二世紀からザクセン王の居城であったドステン城の外壁の壮大な『君主の行列』の壁画を眺めて、自分の今の心意気を反映した理想に燃える力強い姿を想像してみた。

左手後方には製作者の名を冠したゼンパー

オペラ劇場が見える。ここはウンターバー

メンデルスゾーン、ワグナーらが活躍した場所とくにワグナーのタンホイザー

の初演で有名だ。

しかし、美しい街並とエルベの自然を外から親しむだけで、大学では普段はそんなに変化があるわけでもなかった。

そのころ統一されて間もないドイツ帝国はヴィルヘルム二世の治世で学問が隆盛を極め、世界の指導的役割を演じ、とくに自然科学や哲学思想は世界をリードしていた。社会主義思想もドイツを源流としてあふれるように流出していった。

それとともにドイツの国力はさらに充実し、やがて世界は雪崩を打って変革の嵐に突入していった。

出会い

一

一九一四年六月のサライェヴォ事件^①を契機に第一次世界大戦が勃発した。

この年の十月に二十一歳のフリッツは志願兵に応募して、電信通信隊として働いた。彼は前線には立たず、一九一八年十一月にドイツが降伏すると、すぐ社会の混乱のなかで復員した。

二十五歳になっていた彼は戦争のさなか感じるものがいろいろとあって、宗教に大き

な関心を抱き、ドイツ宗教界の随一の聖地とよばれるマールブルク^②に赴いた。

ここは、ライン河の支流のライン川に沿った大学の街でもある。中央駅を降りて駅前通りをまっすぐ歩き、突き当りを左に曲がると、ドイツ最古のゴシック建築のエリザベート教会が見える。

この通りはずっと石畳が続いている。路の両側には古い木組みの家が見られる。坂の多い石畳の路をマールブルク城まで登るのは、ちよつと骨が折れる。今は大学の文化博物館になっている宗教改革に縁の深い古城からの眺めは素晴らしい。

この地方を支配した宰相の住んだ城を右に

見て坂を下る。新しい学期の始まったこの時期は紅葉が美しい。鳶の絡まる垣根と細い石畳の路が続く。

そこからさらに坂を下ると市の中心の広場と市庁舎が目に入る。ビールを楽しむロカール（居酒屋）が途中にある。古い建物だ。下りたところが市庁舎である。仕掛け時計が毎時美しい音色を響かせる。

何気なく市庁舎の傍の本屋に入った。

奥の本棚に彼はラフカディオ・ハーンの本を眼にした。あのときに見た何冊かの同じ本であった。衝動的に手にとりてそれらを買求めた。読んでみると、言い知れぬ戦慄と感動の波が彼の身体を走った。

彼が宿をとったガストハウスの近くの広場はカフェやレストランが広がる典型的なドイツの街の風景でもある。

この傍には学生のたまり場にもなっている「デイ・ゾンネ（現在はツァークローネ）」と呼ばれるガストシュテッテがある。店の名前の意味は《太陽》である。学生のみんなが心に抱いた大きな志を表しているようだ。

この宗教の原点とも言つべき地の人々の敬虔さを教会だけでなく至る所で眼にして、彼はマールブルク大学への入学を決意したドイツ全国に名の轟く、哲学者ニ羽ガラス

の一人と言われるニコライ・ハルトマン博士の講義を目を輝かせて聴いた。自然科学は彼の副専門としてここでも継続して学んだ。

その間、フライブルク[※]大学で夏学期には、かの著名なフッサール[※]とハイデッガー[※]の講義をも聴講した。

そして翌年の春にはフリッツは自分自身の終生の仕事としてハルトマンの許で哲学者を志すことになった。

「カルシユ君、大学を終えたのだとつすぞっ。」
「もつと、先生のもとで勉強したいのです
が」

「それでは、理想主義者のバルディリ[※]の

研究をしてみるか」

「あの理性的リアリズムの代表的人物、クリストフ・ゴットフリート・バルディリですね」

この研究により、彼は哲学博士の学位を一九二三年に授与された。大学に残った彼はハルトマン[※]教授の講義の準備に付き添い、手伝いながら、学生への講義を階段教室で傍聴した。

話はこれより二年ほど前に戻る。教室のセミナーが終わると昼食である。メンザ（学生食堂）で時々出会つ一人の女性がいる。へフライ語の授業で見かけたエンメラである。

「やあ、また会ったね。元気がいい」
 「あなたも、元気そうね」
 「エンメラ、君はどこ生まれ？」
 「ゴッデスベルクよ」
 「そのうちロカールに行かないか。ワイン



フリッツとエンメラが最初に会った建物

を飲みながらの研究会があるんだが」
 「何の？」
 「人智学⁸の研究会だ。このころ盛んに行なわれている哲学だ。いまシュタイナー⁸が中心的な活動家だ」
 「ふーん シュタイナー。フリッツはシュタイナーが専門なの？」
 「いや、これは個人的な興味からの勉強なんだ」
 「ところで、君は、姓がアクセンフェルト⁹……。もしかしてあの有名な眼科学教授の？」
 「いえ、伯父さんの」
 「ああーそう。君は名門の出なんだね」
 「……………」

「僕にはそんな縁の人はだれもないな」
 「エンメラと出会って、僕は何か不思議な気がするんだ」
 「わたしもよ。あした、また詳しくきかせてね。メンザで会えるわね」
 「でも、明日は昼どきに日本人にドイツ語を教える約束があるんだ。ちょっと無理かな。うめ」
 「へえ、日本人に知り合いがいるのー。どんな話をするの？」

「いろいろだ。とつてもめずらしい話だ。おもしろい話を沢山するんだ」
 こんな話をしながら、その日はそれぞれ家

路に向かった。
 一週間後、前から約束していた伝統的なコンサートと一緒にでかける。ゼンパー・オペラハウスで今夕六時半から催されるのだ。胸がときめく。二人ともだ。
 エンメラはアーベントクライト（イヴニングドレス）に身を包み自分の姿がフリッツにどのように映るのかを想像しながら、時間に遅れないように途を急いだ。

二

いつものカフェでフリッツと長屋の会話が続く。長屋は日本の大学を終え、同じ大学の哲学科で研究をしている。

「長屋さん！ずいぶんドイツ語が上達しましたね」
 「カルシユさん、もう僕たち、ドウ ツェン しましよつ」
 二人は右腕を絡ませてビールで乾杯した。ブルダーシャフトトリンケンの儀式である。日本で言えば、兄弟の固めの杯だ。
 「もつ、遠慮はいらないね。フリッツ」
 「うん、キイチ」

「ところで、フリッツ、日本へ行かないか。今、日本で高校生のためのドイツ語の講師を求めているんだ。探しているんだ。あるツテから、僕に探すように内々に云ってきただ。どうだろう。興味があるかい？」
 「もちろん、興味があるぞ。ニッポン、ニ

ホンのどこ？」

「松江か和歌山のどちらかだ」

「どんなところなのかね？」

「そうだな、松江は古い日本の趣を残した湖水の都かな。和歌山は海の美しい鯨の泳ぎ回る明るい南国だね」

「松江はヴェネチア^{ヴェネチア}のような街？そして和歌山は明るい日の光が輝くニース^{ニース}のような街？」

「いや、ことばでは説明できない。日本が、山と湖と河と海の自然が調和した美しい国であるといつても、行ってみなければ、その実は分からないのだよ」

「考えさせてくれ」

「いいぞ、きみの自由だ」

「前に一度、大学の掲示板に、日本の高等学校のドイツ語講師の募集を見たことがあるんだ。でも、関東大震災で立ち消えになったことを記憶している」
 別れ際にフリッツは長屋につぶやいた。

幼い頃、何度も夢見た、見も知らない景色と不思議な感情がいつも心の底にあった。彼の血がまた、騒ぎ出したようだ。

エンメラの笑顔が脳裏をかすめた。すでに結婚していた二人であった。

「フリッツ、私には、遠い日本のことは

とても現実には考えられないの」

「エンメラ、一度、日本のことについてラファディオ・ハーンの本を読んでみないか。ぼくは、なぜか日本に引きつけられる。どうしてかわからないが」

フリッツに定職の無かったことが、最終的に彼等の日本への渡航を決心させた。

「一緒にするわ。私はあなたの妻だもの」

松江高等学校でブラーゲ^{ブラーゲ}先生の後任のドイツ語講師の身分が約束された。その採用通知をいま日本の文部省から受け取った。

友人による送別会が済んで、一月半に及ぶ航海の末に神戸港に着いたカルシユ夫妻は不安と期待で一杯だった。それでも何とか一九二五年九月二十八日に憧れの松江に着いた。

松江の駅では高島教授と多田教授が迎えてくれた。早速、人力車で一年前に造られた奥谷町の官舎に向かい、そのまま入居した。外国人講師のために建てられた小さな洋館である。

その家に多田教授が新任の夫妻の居を定められていた。

「いい家だね。私達の新居ね。ドイツ風ではないけど、とてもすてきな住まいだね」
「隣と一緒に、まるで双子のすまいだね」

「ありがとう、プロフェッサー」

多田が住居を眺めている二人を振り返りながら声をかけた。

「ちょっとこれから湖にでてみませんか」
「その前に食事を一緒にしましょう。多田先生」

高島が遮るように言った。

夕方、松江の六道湖を初めてみた。

二人は湖水に浮かぶ小さな島の背後に見える、光の織りなす芸術に感動し、しばし立つて来た。

ちすくんでいた。

「きれいな夕映えだ。当分の間は、ここで暮らすのだな。良い思い出をつくらう」

「はい」

彼女は異国で頼り合つ愛を確かめるようにフリッツの傍に身をよせた。

のドイツ人だから会話を主とする授業であることの期待があった。

「どんな先生かな。こわい人かな」

教室ではすでに首を長くしてみんなが待っている。するとドイツ語主任の高島教授が、大柄の異人さんを後にして、教室に入ってきた。

「この方がこれから諸君のドイツ語会話担当の、ドクター・カルシユです」

と簡単に紹介した。高島はさっさと教室を出てしまった。

学校

一

十月から二学期がはじまった。何しろ生身

後に残されたフリッツは、やあら大きな身体を教壇へ運んで挨拶らしいことをいつているのだが、とんと生徒にわからない。話す言葉はドイツ語であることしかわからない。

い。

「同ちゃんぶんかんぶんで、とうとう先生は立往生だ。」

生徒の日本語はどつにもわからない。

「これで授業ができるのかなあ！ いったい、どつなるんだらう。」

と隣同士が心配していた。

すると、先生が英語を使いはじめた。聞き馴れないドイツ訛があつて、ちよつとわかり難い。が、それでも英語を教わつていたから、聞き返す。

何ともならないとなると、筆談だ。これなら判る。こつして先生との間に意志疎通の道が開かれたのだ。

ヒゲ文字のドイツ文が黒板に書かれ、発音から会話の訓練になつた。

次の日から、一々、出席を取つては生徒の顔をまじまじと見る。

「アツマツ。イツシハラ。……」

ついで、ニコニコしながらカルシュ先生。

何をやるのかとみんなで見守っていると大股に窓の側に進み出て、

「ヴァスイストダス？」

と言つた。

身振りからいって、《これは何ですか？》の意味だらう。

先生が窓を指しながら

「ダスイストアインフェンスタ」

と自分で答える。そして、

すると先生が

「グート」

というよつなわけであつた。

やがて、授業終わりの鐘が鳴る。そこでカルシュ先生が言つ。

「ダスイストアーレスフィアホイタ」の挨拶をする。

「多分、終わりと言つたんだらう」

授業が終わつた。

こんなことがしばらく繰り返された。

「ピツテ シュプレヘンズイ ミアナーフ」

と言つた。

「おい、今何をいつているんだ」

「おれにわかるかよ。これは何だといつてるんだと思つよ」

「いや、そうじゃないみたいだ」

身振りを入れてもう一度言つた。

わからない。

「フリーズリピートアフター ミー」
でやつと分かつた。

先生のまねして、言えはいいのか。

生徒達が声を揃えて大声を張り上げる。

「ダスイストアインフェンスタ」

野外の授業

教室の中、休み時間だ。片隅に生徒が集まっていた。話題はカルシユ先生のことである。

『ピッテ』と『ダンケ』くらい便利なことばはない。これを使って散歩に誘つて決まった。

そこで、天気の良い日だ。先生、今日の日曜日に表に出て、イー空気を吸いませんか？」と聞いた。

「何ですか？」

「ことばの分からない先生が怪訝な顔をしている。」

「散歩ですよ。先生」
先生は言うことがわからない。
下手な英語で、なんとか説明する。
「わかった。シュパチーレンゲーエンね。いきましよう」

「ダンケ」

「ピッテ」

先生がかかるく答えた。

「アムネヒステンソントーク」

と約束が成立すると、みんなは声をあげて喜んだ。

「次の日曜日だよ！」

「こつやれば、先生は僕たちと親しくできると、僕たちもドイツ語に慣れられるね」

と先頭にたった生徒が言った。

それからは、『あ・うん』の呼吸で合意だ。幾度となく、学校の周囲を散歩した。わいわいさわぎながらであった。

あるときには、放課後に、先生と五、六人のグループで自転車でサイクリングだ。行った先で、何でも拾って来ては、『ヴァスイストダス？』

と言って、先生に会話のチャンスを求める。いちいち、面倒がらずに笑顔で生徒の質問に答える。

ガタゴト自転車を揺らしながら、出雲浦の千酌まで来た。浜で拾った小石を見て、
「おい、ここに何だかめずらしい石があるぞ」

「ちよつと、カルシユ先生に聞いてみよつか。でも、先生は分からないかもね」

今日教わったドイツ語の練習だ。どんな石かと聞くとして、

「ヴァスイストダスフユアアインシユタイン？」

すると

「ダスイストデアビムスシュタイン」

という返事だ。しかし、こんな単語は誰にもわからない。

そこで、

「ヴァスイスト デア ビムシュタイ
ン？」
「という的はずれな質問をおそろおそろ、誰
やらが出した。」

先生が

「デア ビムシュタイン イスト イン
エングリッシュ ザパミストーン」
と言っ。

「パミストーンと聞いてみんな目を白黒
させている。みんなはわからない。」

けれども、

「ヴァスイスト ザパミストーン？」
なんてとても聞くわけにはいかない。
「いつのは、わからなくて英語の単語で説

明して貰って、まだわからないからだ。拾
ってきた生徒はもちろん、みんなもこの石
が『何の石』なのか初めから知らないのだ。
だから、聞いたのだ。」

「小学生の質問じゃあるまいし……」

先生をここぞつかまえておいて、会話をつ
づけたい。何とかしたい。その成り行きを
生徒達が不安げに見ている。

すると、先生は紙と鉛筆をだして、筆談で
説明しようとした。

まず、エルデ（地球）の内部から、溶けた
熱い岩が表に噴き出ると話した。ウルカノ
（火山）のことだ。これは中学校で教わっ
ていてみんな知っていた。

「その時ふき出した溶けた岩に水が触れて

『じゅつ』と……急に冷えて、固まる」
「ああわかった。軽石だ」

「ダズジスストーン フロート オンザウ
オター？」

と水に浮くかどつが熱い込んで英語で聞い
た者がいた。これが、後に《長崎の鐘》で
知られる、あの永井隆博士の若き日の姿で
ある。

「ヤー！ダズシュタイムト（そのとおり）。
フェルシュタンデン（分かりましたね）」
先生は嬉しそうに顔をほころばせた。とに
かくこの英語、ドイツ語それに日本語をこ
ちやませの会話で、一件落着ききた。

「しかし、面倒がらずにはべらからず、
答えて下さるのう。今までは、えらい違
いだ」

カルシュ先生の前後を生徒が取り囲み歩く
先生がつまずく。みんながなついた。自然
にすり寄っていった。

その帰り道にみんなで食べる駄菓子先生
が買った。ここで、カルシュ先生の口から
『いくらするか』とつっかりドイツ語で

「ヴァス コステット ダス？」

とでた。続いて

「ヴィーフィール ペニツト」

何ペニツトなのかとドイツ通貨の名が出た。
すると機転の利いた生徒が

「フロンフ 銭！」

と言つ。
先生が五錢玉を盆に置いて、にこやかに店のお婆さんに会釈する。
そんな形のシユパチレーンゲーエンであった。
こんなことが繰り返され、先生と生徒との距離が一層近くなつた。

衝撃

日本の生活に少し慣れた頃、近辺を汽車で高阜と旅行した。米子を経て溝口から杵水

高原に向かおうとした。いい天気だ。青空がきれいだ。すこし雲がたなびいている。

高阜はフリッツと二人きりで自分の得意なドイツ語が使える。心が何となくうきうきする。

フリッツもゆつたりとした気持ちでいろいろ日本のことをたずねることができた。

途中、歩きながら何の気なしにふと東の空を振り返つた。このときにくつきりと浮か

ぶ大山だいせんの西の側面の美しい姿が目に入った。

この景色にフリッツの眼は釘つけになった。同時に彼の身体中に電撃のようなものが走つた。しばらく、身動きができなかつた。

「静かですね」

「何となく落ち着き」

「何となくやすらぎ」

宿が立ち並ぶ坂道の奥に大山寺がある。奈良時代に開かれた山岳宗教の中心地である。現在の本堂は昭和初期のもので、火災後に再建されたものである。

この近くには大山寺とともに修験の霊場となつた老杉に囲まれた大神山神社がある。澄んだ空気が心身を浄めてくれる。

北からみた大山の姿は険しい地肌を見せる。いわば男性的な姿である。

東に廻ると茅の穂なみが広がるさわやかな

西から見た雄姿は伯耆高阜ほくけこうぶと言われるように美しく、まさに彼が五、六歳頃夢にみた姿そのものであつた。
「遠い昔見たことのある景色だ。これこそ、私のふるさとだ」
彼は思わず叫んだ。
一緒の高阜はその意味が理解できなかつた。

清水が絶えず湧き出るこの杵水高原から見える優美な姿こそ、彼の記憶にある。何度も夢に見た自分のふるさとであつた。

足下に目を移すと素晴らしい景色が拡がっていた。

我に返つたフリッツは大山を仰ぎながら高阜と連れだつてその中腹に向かつた。

高原である。
 「わたしは、遠い昔、ここに住んでいたことがあるのです」
 「いや、住んでいたような記憶があるのです」

一人歩き

—

「何を考えているのですか。カルシユ先生」
 「いや、ちよつと……。むかしのことです。それも、自分の生まれる前のことです」

毎日三回の受け持ちの授業が何となく、骨が折れる。ことばがわからない。見慣れないしぐさ。仕事への取り組み。その日々は、外国人の彼には想像以上に神経が疲れる。

「なにやら、宗教的ですか」と高鼠がいぶかしげに言った。

職員室の窓からの明るい日射しを受けて「どうですか。カルシユ先生、慣れましたか」ドイツ語で高鼠が尋ねた。フリッツは日本語が話せない。

「いや、なかなか大変です。それより、妻が家で一人で寂しがっています」
 「買ひ物は？」
 心配する。
 「お手伝いさんが良くしてくれます。でも料理は妻です」
 フリッツがにこやかに答えた。
 同僚の丸刈りの小林教授もたばこの煙をくゆらせながら
 「先生、早く帰ってあげなさい」
 と言っ。
 さりげない思いやりだ。

とフリッツはすこしずつ動きだした。日曜日はちよつと散歩にでかける。奥谷の官舎の近くは静かなところだ。ここに来ると不思議なくらい不安が消える。気持ちが落ち着くのだ。どうやら、心の静けさを感じさせる何かがあるようだ。

神々の住む出雲地方のことはハーンの書からよく知っていたつもりであった。
 「自分の心が神々とともに、そして生徒達とともにありたいものだ」
 そうフリッツがつぶやいた。

こんな日が続いた。

—

それから一ヶ月ぐらい経って、周りのことが少しずつわかってくる。落ちていくくる

通勤用に買求めた自転車でフリッツは家

の周囲を乗り廻しては、農作業のみんなに挨拶していた。

「ありや、今度の異人の先生だげな。こげなとこで何しているのかいな？」

「わしら、よくわからんが、何でもこの辺の写真をとっているとのことだ」

最近ドイツからひとづてに購入したカメラを持ち出しては松江周辺の田園の写真を撮っていた。

「いや、この間、太くて短い色つき鉛筆を使って、絵を描いていたようだった」

「あれは、クレヨンと言っげな」

「いや、ちがう。チョークに似た棒状の絵の具でパステルといっげな。粉末の顔料を固めた

ものだ。近所の高校生がいったな」

「こんにちば」

ちよつとからかい半分に絵を覗き込んで

「へーうまいもんだな。本物と同じだ」



宍道湖 嫁が島風景 フリッツ自筆のパステル画

草木が風にそよぐ。松江の周辺の田園の春

はフリッツに若い血潮をたぎらしてくれる。自然のなかの命、一体となった自分の姿と心。フリッツは余暇にはそこで感じた美しさを一心に描写した。

宍道湖に出てみた。風に吹き寄せられる水の立てるかすかな波音、水の底の神秘が自分の心呼びかける、その響きに耳をそばだてる。

そこに深い静けさを感じる。嫁ヶ島のひとり湖上にたたずむ静かな美しさ、袖師が浦の伝説を想い浮かべる。

そして、山陰の農村の風景に感動しながら、画用紙に向かって描写するとき、より深い心の平安と満足感を味わった。ここは古くから采えた出雲の国

宍道湖に臨む水の都松江は、東洋のヴェネチア、あのドレストンにも雰囲気を通じる風光明媚な落着いた城下町である。そして、現実に眼前でゆらぐ景色の抽象が自分の心のなかで心象風景として美しく夢と融合し調和する。



袖師が浦地蔵 現在は玉造道路開通りに移設
フリッツ自筆パステル画

それを見て驚いた。土地のひとにとつても難所で、子供の頃は親から嚴重に注意されていた加賀の詰坂である。

「そこは難所だから行けません、先生。まして自転車では……」と

とめたが、先生は案外強情であった。

「地図には道が描かれているから、きつと行けるはず。」

あまり強く言うので、説得をあきらめて、先生を見送り松江に向かって自転車を走らせた。

しかしどうも気がなる。心配だった。

先生がいつか言っていたことを思い出した。《ドイツの森は平坦でしかも疎林で、その間を自在に行ける。でも、日本の森は木が密生して道も急峻で、なかなか通り抜けができない。》

しかし、まあ、その森へ無謀にも自転車で行ったのだ。

《まず予定通りには帰れまい。下手すると、捜索隊でも出ることになりやせんか。》
と思つたら、居ても立ってもいられなくなつた。

《とにかく後を追いかけて追いついて、一緒に行くなり、帰るなりせんとえらいことになる。》

松江の用事をそこそこに済ませて、大急ぎで引き返し、後を追つた。本庄から手角中山峠を越えて、日本海沿いの出雲浦部落を通つて西へ行くのだ。この辺は集落を通過するごとに、上りと下りの坂道があるのだ。

「とても自転車では速くいけないのだが、」
酒井は、ぶつぶつ言いながら、北浦、千酌笠浦に渡る。日本海の荒波に浸食されて、できあがつた海岸線は、いたるところ岬湾そして絶壁や岩礁で形造られている。漁港で賑わつた野井、瀬崎と難路を急ぎ、走り抜けて野波の部落へはいったが、先に行つた先生の姿はもつとどこにもなかつた。

ここから先はもうあの噂に聞く難所の詰坂である。どうにもしようがなく、通りがかりの土地の人に聞いてみた。

「異人さんを見なかつたか？」

「見ましたよ。かれこれ三十分も前だったな。大柄の異人さんが自転車で山の方へ行かれるのをね。いま頃は、もう詰坂でしょう。」

これを聞いて、

「こりゃ、だめだ。無理だ。」

もう、これ以上追う気力を酒井はなくしてしまつた。

翌日、先生が受け持ちのドイツ語会話の授業があつた。きつと何か話があると思つて

いた酒井の目の前を通って、先生は教壇へ
進み出てきた。

いつもと少しも変わらず、先生は

「おはよう、みなさん」

と挨拶だ。狐か狸につままれたようにもあ
った。拍子抜けがした。

授業が終わると酒井がすぐ教壇に近よって、

「先生、詰坂はどうでした」

聞いたら、

「いやはや、けわしかった」

という返事だった。

「自転車は？」

と聞いて聞いたら、手を肩まであげて、担
いで行った恰好をした。

さすが、この先生、大戦中に従軍して、盛
んに山野をかけまわった歴戦の人だ。道理

で強い人だ。

官舎の夕べ

—

「日本へきてよかった。みんな親切だ」

フリッツは手を休めてエンメラに向き直っ
た。

「それに日本人はとても礼儀がたたくく…

…」

エンメラが編み物の手を休めてそう付け加
えた。

この言葉はフリッツから何度も聞いている。

彼の心は日本を深く愛し、日本の人々を慈
しむことで一杯なのだ。彼は自分の持てる
知識を惜しみなく生徒に伝えようとしてい
る。それが彼女にはよく分かる。

「コーヒードでも入れるわ」

今年になって待望の女の子のメヒテルトが
生まれた。星の輝きを願って日本名を『星
子』と命名した。

エンメラにとって静かな幸せであった。

でも、この子を連れて、ドイツに帰りたい。

両親にもこの子を抱かせてあげたい。

何度もそう思った。日本に住んで、もう三
年になる。メヒテルトが母親をみて無心に
微笑んだ。

昨年は日本では大蔵大臣の国会での失言を
契機に金融恐慌が起こり、社会不安が走る
世の中になった。ドイツも同じ状況にあっ
た。

「安らぎが欲しい」

先の見えぬ不安があるから、そう思っのか。
フリッツがつばやいた。

エンメラが美しい声で静かに子守歌を歌っ
それがメヒテルトだけでなく、フリッツに
も静けさと安らぎをもたらしてくれる。

—

ドイツから学生が日本に尋ねてきた。大学生だ。ドイツ学術交流会から派遣されたと聞く。

「今、ドイツから交換学生が東京に来ていて、その中の一人が松江に来るから、話に来ないか」

毎日ドイツ語を学んでいる理科乙類の遠藤らへのお誘いがカルシウ先生からあった。

「いつか聞いたぞ」

「何を？」

「「いついづときは、奥さんに花束をもって行くんだ。本でもよんだことがある」

やし馬根性もあつたが、習ったドイツ語を使うよい機会とばかり、いつもの連中が先生のお宅に集まった。

「はじめまして」

日本の習慣だ。手みやげに近所で買ったお菓子をカルシウ夫人に手わたす。

花束のことは、すっかり忘れていた。

「ハンスです。ミュンヘンからきました」

「よろしく」

一応、和気藹々である。

まずは、シチューのような、ソーセージとポテトスープ。それにポテトフリッター。これは先生が自ら料理したのだ。

次に、テーブルにはザウアー・クラウト、それにポテトを添えたところから手に入れたのかアイスハインが出てきた。冷えて脂肪が白く固まって氷のように見える肉料理だ。さらにサラダが運ばれた。

すごいごちそうだ。

先生の首頭で

「ツーム ヴォール！」

乾杯だ。ドイツから届いたモーゼルワインを飲み干した。

料理を口に運び舌鼓。ついにハンスの故郷のバイエルン料理の話になった。

「ヴァイス・ウルスト（白ソーセージ）はすごいんだぞ。見たことあるか？」

と遠藤らにわざわざいった。

「うん、うん」

ちよっと「気の毒に思いながら、傍らでフリッツが頷きながら聞いている。

「とてもおいしいんだ。でも、すぐに食べないとだめなんだ」

「作ってから二十四時間を越えると、本来の味は保たれないんだ」

と遠藤らに向かって得意気に滔々としゃべる。

そつ言われても知らないし、何のことか分からない。「こちらは高校生。歳から言えば、こちらの方が上の者もいるのに」とにかくそのドイツの学生は威張って、シヤクにさわる。

「くそっ」

ついに、

「グライダーって知ってるか？」

ときた。

自慢顔に、彼は、グライダーで遊ぶ話を始めた。

「発進の時はどつするか知ってるか?」
 「オートバイの後輪に、ドラムを着けて、それに綱を引っ張りせるんだ」
 と言っ。

「おまえら、人力で引っ張ると思っていたぞ」

こんな田舎の松江では、グライダーを見たことはない。が《月刊の航空雑誌には、グライダーで遊んでいる記事や写真が載っている》。そう思った遠藤。

「日本では、自動車の一方の後輪にドラムを着けて、地面から浮かせて、それで発進させている。その方が安定感もあり、工作もし易いはずだ」
 不十分なドイツ語で、それを言っのだが、先方にはそれが理解できない。

「どろろ、やつめは自動車の車軸に差動装置のあることすら知らないらしいぞ」
 「俺は、中学一年の時に、模型を見たことがある。そんなことは雑誌にも出ていた」と傍の友達も言っ。

「この論争?を見かねて、といつか、聞きかねてというか、カルシユ先生が中に入って遠藤らの言っこと、もつともだ」

と言っ、ドイツの学生に説明した。

「>エー 先生は科学にも詳しいんだ」

「でも、専門の倫理や哲学の知識はなかなか触れる機会はないな」

休み時間に誰かが、

「カルシユ先生と呼ぶよりも、ヘルドクター、と呼んだ方が喜ばれるぞ」

と言っていた。

でも、誰かが言ってるのを聞いたことばないし、言っったこともない。

学問

一

「カルシユさん。貴方はハルトマンの弟子だと聞いていますが」
 ドイツ語での会話である。

「そうです」

「でも私の興味は哲学史と人の意識の進化に関することです」
 「どうして?」

哲学者で同僚の高橋教授が聞き返した。
 「古代のインド、中国、ギリシャの哲学から始まる有史以来の人の思考が、すなわち哲学がどのように変化してきたのかを示すことです」

「もちろん、ハルトマンの世界とその一体化の方法論を意図しています」

「私もハルトマンに大きな興味をいだって原書を取り寄せました」

「ひとつセミナーでもして、お教え下さいませんか?」

「いや、とんでもない、稀代の哲学者といわれ、日本政府の期待から外国にまで行って研究した高橋先生のお言葉とは思われません」

「それはそうと先生は禅と西田哲学に興味をもたれてましたな」

「何とか入り口を見つけよと模索しております」

「いや、西田哲学は私にとっては哲学というより、宗教ですね」

フリッツはいまカントとハルトマンの比較論述をしようとしている。それに、彼は

シュタイナーの哲学が如何にカント哲学の認識論と概念に深く関わっているかを示そうとしている。

「で、あなたは、これからどうしようとしているのですか？」

「私は行動的睿智者であり、自分をシュタイナーの『精神科学』を世に広める教師と考えています」

「どうして？」

高橋が再び質す。

「わたしは、学問や内的修練を通して、シュタイナーが唱えた新しい思考に我々が如何にして到達できるかに関心があるので

す」と説明した。

やがて、二人の話は文明論に進展する。その中であって、

「ヨーロッパは物質文明の発達により、その精神が物質的成果のみの社会に閉じこめられてしまった」と

とフリッツが批判的に論を進めた。

高橋がうなずく。

「根本の精神の欠落している性急な歩みに対する批判をしているのです」

そこで、息をついで

「その中で、人間を肯定する可能性として、飯家の世界を描き、飯家の社会を表現し、

そこで生きることを目指すことが重要だと思います」

と彼は熱っぽく語りついだ。

「つまり、ものの社会から脱却し、想像力により構築した世界である飯家の社会に自らを没入することですな」

顎をなでながらの高橋の言であった。

二

翌日になって、フリッツは高橋から日本画家の「海の幸」で有名な青木繁について紹介された。

これを機会に若くして世を去った天才画家

の青木について学んでみた。

そこから、フリッツが知ったのは
《物質文明が流れ込んだ日本では、自らを支える精神的根拠が見られず不安定な状況にあること、そしてこれを直観した青木は自分の想像力を培うことで自らの支柱を求めたこと》だった。

まさに、師ハルトマンと同様の鋭い感性を備えていたことを知った。

その彼がどこに自らの表現の動機を求め、かを模索するなかで、日本の古代のなかに自分の仮象をみつけたといっている。そしてそれを自分の中に具現するために、青木は古代の姿と生命観を合体し、仮象の力を彼の現実の生活のなかに実現し、絵画にそ

れを表現したといっ。

身震いするほどの驚きであった。このことはフリッツの根底の思想と感覚を大きく揺り動かした。

「やっぱり、私の存在基盤が日本に、しかも古代神話や天平文化に、そしてそれが脈々と息づく出雲の国にあったのだった」

彼は大山を見たときと同じ衝撃と感動に身を震わせた。そして自らの今の存在と行動が単なる偶然的所作ではなく、天の準備した整合性に即した帰結であるとの思いに到達した。日本こそ、いや出雲地方こそ自分の存在の総ての原点であり、生涯かかって追求すべきものを見い出すすがである

の確信を得た。

三

しかし、フリッツはヨーロッパ批判だけではなく、これとは別にヨーロッパの精神に根ざす文化のすばらしさを生徒に伝えるという大きな観点と使命感をもっていた。

そして、もちろんのこと、学問や内的修練を通して、シュタイナーの思考の実践と仮象との一体化を通じて自らの精神生活を磨きあげたいとも思っていた。

そんなとき

「高野山に行きませんか？」

と誘われ、その寺院にしばらく籠る決意

をした。

「何か、わかるかも知れない」

こうして、フリッツは日本の宗教との緊密な関係をもった。高野山での修行の経験を経て、宗教関係者との交流があった。

そのなかで、鈴木大拙と親しくつきあった。金沢出身で仏教哲学者だ。戦後もマールブルクに住むカルシュ夫妻を訪ね、その旧交を暖める程親しくなっていた。鈴木と同郷の哲学者西田幾多郎も紹介され親交をもった。

同僚の高橋はハルトマンを研究し、『倫理学』、『存在論の基礎付け』、『歴史哲学基礎論』、『可能性と現実性』、『実在的世界の構

造』など、ハルトマンの著書の翻訳を相次いで成し遂げた。これらハルトマンの著書の翻訳はフリッツの紹介と協力によるものであった。

そしてまた、フリッツ自身は親友の長屋と共に『ハルトマンの哲学』を書き著した。

先生の旅

—

こうした中でフリッツは徐々に、日独文化協会にも招かれ、ときにはドイツに関する講演を依頼されるようになった。

娘のメヒテルトは散歩に誘われたときにはフリッツと行動をとりにした。この折に、平易な言葉で人智学の基本に関する手ほどきを受けた。これは後の彼女の生き方に重要な影響を与えた。

一九二二年春 九期生第二学年の年度末のことである。

フリッツは航路と陸路の旅を合わせて三月後半から八月前半にかけて、一時帰国する決心をした。三歳になったメヒテルトにまだ見ぬ故郷を見せたかった。

旅行日程もほぼ確定した。教室で先生自ら話してくれた。

三月二十日に神戸港出帆予定の船はハンブ

ルク・アメリカラインのドイツ国籍のヘルクーゼン号で、五月初めジェノヴァに着であった。シブラルタル^も經由でハンブルク^{まで}までの行程だ。先生はジェノヴァ上陸、陸路ミミノ^も經由アルプス越えで故国に入る。

「おい、先生が帰るんだとよ」

誰かがそう言った。クラス一同の相談の結果、先生の歡送会の開催を決めた。

「さて、準備はどうするかだ」

「朝日と白石、おまえら二人高等小使の役だろっ」

高等小使とはクラスと学校事務局や教授との連絡役の愛称で、今で言えばクラス総代だ。

「校内の集会所でやるっ」

「開会はクラス担任の山下先生にお願いしよう」

「ところで、最後の閉会の辞はだれがやるっ」

「白石だ」

すぐに決まった。

「ドイツ語でやるのか」

「そりゃそっだ」

その原稿はすぐ書いたが、ドイツ語はどんなにもつまく書けない。

「だめだ」

すると

「俺が助けたる」

と言った。鹿野だ。

教室の椅子席はアイウエオ順のため鹿野白石と、シで二年間つづいて並んでいた。

早くから鹿野とは下宿も同じ、仲良しであった。

鹿野が原稿を読みながら、一心にドイツ語の辞書をひき、一年生の時苦しんだ文法の教科書を引き出して、白石の意見を聞きながら苦労して書き上げた。

会はとても賑やかで、和やかであった。でも、日本語とドイツ語が入り交じって、わけがわからないことが多い。とにかく、早い夕食だ。みんな小遣いを出し合っただけで、馳走だ。誰かがアルコールを持ち込んだ。カルシウ先生はにこにこ笑っている。先生と膝をつき合わせての会食はこれまでに経験のない最初のことであった。

先生は本当に喜んでいる。いつも微笑をたたえて日本語なしの会話をこつこつける。

最後に、用意していたドイツ語での閉会の挨拶を白石がよどみなく行っただけを閉めた。

拍手を受けて会は終わった。

その時カルシウ先生が白石に近寄り、微笑みかけ、握手をしながら、短いドイツ語で何か言った。

「?????」

しかしこの言葉が聞きとれない。

またこれを先生に聞き返すとささのドイツ語『グイー ビッチ』が出てこなかった。いつもなら言えるのに。これがその後の彼の

長い後悔になった。

「もつと勉強しておけばなあ！」

わからなかったことが残念で仕方がない。

「ところで、おまえら判ったか？」

「いや、何も。大体、先生の言うことが聞こえなかったしな」

とにかく学級主任も同席してのカルシウ先生の送別会は、先生を囲んでの心楽しい集いであった。

この送別会は生徒にも先生にも大切な思い出となった。

学年末休暇に入り、学校は入試の最中で、宮田は大阪の自宅に帰省していた。

船は貨物船と聞いていた。今では空路でまる一日もかければ行けるところだが。

「ジエノヴァまで一ヶ月半近くもかけての船旅で御苦労だな」

ドイツの先生から一度絵葉書の使いがクラス宛に届いた。白石が教室の掲示板上に押しピンで止めた。

《皆さん、歓迎会ありがとう。私達は無事

にドイツにつきました。》
 しかし、どつしたことが、いつの間になくなっていた。
 珍しい風景を描いたとつてもきれいな絵葉書だったのに。

二

実をいうと、このときにはいろいろとカルシユ先生にも事情があった。ドイツでの政情の変化に関心があったが、それよりもメヒテルとの教育と健康に懸念をもっていた。

「あなたはドイツ人なのよ」
 「ドイツの教育が必要なの」

「お父さんもその意見よ」
 矢継ぎ早にメヒテルトにエンメラが言う。

「それに」
 言葉を詰まらせた。

持続的に三十八度に発熱することがあるメヒテルトのことが心配であった。日本の医師は何かバクテリアのせいであるうかと言う。でも、実のところ、医師もよく分からない。

両親は一度ドイツの医師にメヒテルトを診せなければと思っていた。彼女の伯父は著名なフライブルク大学医学部の教授でもあった。

高層を通じて一時帰国を申し出た。その間の穴をあけられないので、ツテに頼んで、近くに住む牧師のハーマツヘル^も氏を世話してもらった。

こんな事情はもちろん生徒は知らない。実は、生徒たちの歓送会の背景はここにあったのだった。

五月初めジェノヴァに到着。ここから陸路ミラノ經由アルプス越えて故国に入った。初めてみるヨーロッパに感激した。

ドイツの親類の家を次々と訪問した。どこに行っても歓迎された。エンメラの両親と

も会った。大きな家だ。

「ドイツの家はみんな大きいな」
 メヒテルトが感心している。

眼の覚めるような美しい、まるで美術館のような、ドレスデンを訪れた。
 お父さんの言っていた通りの街並みだった。だ。

ドレスデンの中央駅に迎えに出ていた。手を振っている女の人が見えた。
 ここで、メヒテルトはフリッツの母のルイーゼに初めて会った。

ブラゼヴィッツの小さなアパートで一人で暮らしていたおばあちゃんだ。ここまで迎

えに出てくれた。抱きしめてくれた。なんとやさしいおばあちゃんだろう。

「お母さんとはちがつな」

はじめて会った孫のメヒテルトに

「ハイハイ」

「うんうん」

といいながら、何でも聞いてくれるし、丁寧に教えてくれる。

同盟休校の後で

—

ニングがあつた。いわば毎週が実地訓練の連続で、終始マイペースで先生に向い合つていればよかったので、先生の一言一句を聞きもらずまいとノートを採る必要が全くなかった。

二年生の講義が一九三〇年四月早々の木曜日から始まった。

「皆さんは二年生になりましたね。何から始めましょうか。はるか北の国ドイツのことなどお話ししましょう」

ギリシャの神々の話があつた。ドイツ古代の農耕社会の話が続いた。また、丁寧な挨拶の仕方と女性の挙措などから都市生活の話が、板書とチョークの図解とともに進行

高等学校を卒業して七十年以上になろうとする。ある日の夕方、宮田はふと自宅の古い納屋を整理してみた。大阪の旧家に育った彼は、中学も大学も自宅から通つたので、古いものが残っていた。ノートが出てきたのだ。それをめくっているうちに、次第に時が七十年前にスリッパしていった。

自分の高校生の姿が目に浮かんだ。学帽姿だ。宮田はドイツ語を第一外国語に選んだ文科乙類生であつた。ドイツ語の授業は先生四人がかりであつた。うちカルシユ先生以外の先生は几帳面に定期的に学期試験をした。カルシユ先生の分は別枠で、特に時間を定めての試験はなかつた。が、随時にまたは毎週持続的にテストに類するトレーニング

した。ありし日の先生の板書の後ろ姿が眼に浮かぶ。今風に手紙の書き方も教わつた。珍しいものを見つけたとの宮田からの知らせに、神戸の岡崎と芦屋の白石が大阪にやつてきた。

「やあ、しばらく。相変わらず勉強か？」昔から勉強家の文学博士の宮田に声をかける。

「まあ、そんなところだ」
宮田がにこやかに応答する。

とにかく、気分転換で肩の凝りをほぐすべを知る。やさしい心遣いに満ちた先生だった。
みんなの一致する見方だ。

授業の話が続く。

「メルヘンをいろいろ語ってくれたな。本当に、気の休まる良い授業だったなあ。」
宮田が眼鏡のレンズをふきながら言う。
「それに、何よりもいろいろ歌を教えてくれた。」

白石が感慨深げに目を閉じた。

「そう、ハイネのローレライ¹⁵、ヤリンデン
バウム（菩提樹）¹⁶、ゲーテのハイデンレ
ースライン（野ばら）¹⁷ だった。」

岡崎も思い出を言っ。

一行一節ずつ黒板に向かってチョークを走
らせつつ、あのやわらかい低音のハミング
で確かめるように書き進む後ろ姿が目につ
かぶ。その後、みんなで節まわしをたどり

つつ歌い覚えるのだった。

すべてが懐かしい思い出。少々肩の凝る
真面目な話題が続いたあとの、それはまこ
とにくつろいだ楽しいひと時であった。

しかし、これには一寸した訳があったのだ。
一九三二年は十一月初めから約一ヶ月間同
盟休校という異常事態が起っていた。

この時期は若者の間でも左翼運動やそれに
関する論議が盛んになった頃であった。し
かし、このストライキそのものは、学校側
の理不尽な生徒の扱いと、それに対する怒
りと若者特有の純粋性から出たもので、政
治色はかなり薄かったようだ。

実際に官憲の介入もなかったし、収拾がつかず先生も生徒も疲労困憊していたし、父兄や町の方々にもいろいろと心配をかけたようだ。

その騒動が曲りなりにとも結末を迎えた十二月の初め、あと三週足らずで正月休暇の直前の時期のノートに記されている。手許に眠っていたこのノートのお陰で、これらに再会した。

今この三曲の歌を書き留めた時期を背景において、これらの歌曲を眺めていると、今まで気づかずにいたことに、今更ながら心打たれる。

「これら三曲の背後からは先生の深く温か

い無言の教育愛ともいっべきやさしさがにじみ出てくるようだなあ！」

「うーん、そうだな。」

「そうか。クフスの誰もが、そんなことに気づかずに過ぎ去ったのだな。」

「そういえば、その時は、ほぼ一ヶ月振りに教室に戻って来たところだったなあ！」

「生徒達は、自分でそんなことに気づくほど大人じゃなかったらうしいな。」

「でも、カルシュ先生の目からは、一カ月前の生徒とはやはりどこがちがって見えたのであるうな。」

生徒の顔つきからだけでも、どことなく以

前とはちがつて荒れずさんで見えたのである。先生はそれを目ざとく読み取ったのだろう。三人は、改めてそう思った。

「先生の温かい思いやりの心から出た、咄嗟の処置だったのだらうな」

「そうか。そんなこととは、ちっとも気がつかなかった」

「そういえば、この三曲連続の歌の時間を間に置いたおかげで、卒業までの残り少ない授業が始まった正月明けからは平常心で大学進学への準備に専念できたんだな」

「そうかも知れんな」

「ローレイや菩提樹、野ばらは和訳の歌詞で、すでに耳に馴染みだったけどな」

「ローレイの物語もいい話だった」

「そう、金髪のローレイの歌が舟人を惑わす話が何とも艶やかだ」

「しかし、生のドイツ語で歌う感動はまた新鮮だったな」

「ところで、俺が今でも好きなのはゾルター・テンリート（軍歌）だ」

と白石が言う。

「うん、明治以来の聞き馴れ、歌い馴れて来た日本の軍歌とは違つなと思つただけど

な」

「軍歌の雰囲気にはちよつと当てはまらない歌で、その刺激は強烈だったよ」

「あれが軍歌か、と深く心揺さぶられる思いがした」

かつての級友が、少年のようにはしゃいで替わる替わる想いを述べている。

当時、広く読まれていたレマルクの『西部戦線異常なし』の悲惨のひとかけらもなく、ただ第四節に

《手榴弾が野原で炸裂する。兵隊さんを悼み涙を流す娘たち》

とサラツと唱い流した所があった。それもあとにつづく楽隊の囃し詞の繰返して消し去つてしまつような、アツケラカン振りだ。これは恐らく電信兵として第一次大戦に従軍された際の先生の戦場からの土産だったのかもしれないと皆が感じた。

卒業後も折にふれては口ずさんだ愛唱歌の一曲となった。話題になる懐しい歌だ。

二

正月明けから三月初めにかけては和文独訳の連続だった。これは教頭でもある高島教授の要望でカルシユ先生が授業を行なつたよつだ。近づく帝大受験に備えての特訓が

あった。何かの問題集によったもので第二問は一九二七年の東大法科の入試問題だった。

カルシユ先生がドイツからの帰任早々の九月から始まっていた。それが年末にかけて約一ヶ月の空白をつけて、年明けと共に急にきびしくなった。

「しかし、まあよくもこんな問題 一寸首をかしげる様な^{きくく}屈辱たる文章だ。今にして思つ」

と岡崎が言った。

「さぞ先生も御苦労だったろうに」

宮田が付け加える。

「でも、同僚の先生方の支えもあつたと思つよ」

白石がコメントする。

授業は先ず問題文を生徒の誰かに板書させて、それを先生が翻訳する。その手順で進出した。

「しかしこれが実際の大学入試にどれほど役立つたのかは何ともいえないなあ」

「それはそうと、これより一年前から生徒達めいめいに、毎週短い自由作文をドイツ語に翻訳して来る宿題を課したな」

「それを次週の時間の初めに試験用紙を配布して清書して提出という訳だ」

「苦労したな」

と白石が頭を掻きながら苦笑いだ。

「提出した分について、先生が丁寧に添削する。めいめいに返却 必要に応じて個人的批評をもつ」

「そつだった」

「型にはまった問題の翻訳よりは、この方がどれだけ楽しく身についたか分らない」と岡崎がしみじみ言つ。

ノートに挟んで残ったものを手にした宮田が先生の手蹟の昔を今に伝えてくれるのを懐かしむ。これをノートの紋切型の入試問題集の独訳と比べて見て、

「入試問題集の方は目先の功利一点張りです。無味乾燥で今とあまり変わらんなあ」とつぶやく。

「先生もあまり気が進まねなかつたので

は

「それはともかく、これらの問題文集による翻訳の授業よりは、各々勝手な自作の文章を翻訳して差出した稚拙な自訳の方が、どんなにか先生には楽しんで頂けたのではないか」

「たまにグートなどの評価を頂戴すると嬉しかったなあ」

「南ドイツのバイエルンの言葉やシュヴァーベンの方言についての話など、他では聞けない話題もあつたぞ」

古ぼけたノートを閉じる。卒業以来約七十年の空白だ。すっかり忘れてしまったが、ノートの断片記録からみて、平常の講義の話題はまことに多彩だったことが思い出す。

れた。

三

「そういえば、ドイツ語は高田がよくできたな」

白石がしみじみと言った。

「あいつの勉強ときたら全く驚きだったな」

「俺たちが一年生の時の学内弁論大会は、まったくたまげたものだった」

岡崎がつられてそう言った。

「ドイツ語で演説したよな」

宮田が眼鏡の縁を押さえながらゆっくりと

語る。

「そういえば、あいつときたら、新聞の社説に出た《階級闘争の弊害》を翻訳してたな」

「そして、一応できたものを小林先生に見せたんだ」

「そしたら《無茶な奴だな。おまえ。しかし、やるじゃないか》といわれたと、奴がちよっと自慢げに言ってたよ」

「真つ赤つか、だったな。全面的に訂正されていた」

「でも、嬉しそうだったぜ」

とにかく全部暗記して、高田は秋恒例の大会で

《ファルシュ、フォン、クラッセンカンフ》

と翻訳の題名で演壇に立った。クラス全員、彼の度胸に驚き、同時にその実力に感心した。

「大した心臓だったな」

いまさらの如く二人は、今は下き彼を想った。

彼が学校中の聴衆を相手に声高らかに語るのを、カルシユ先生が微笑みながら聴いていた。ときどき

「ウン、ウン」と二度頷く。

演説が終わった。満場が拍手喝采だ。

すると、カルシユ先生壇上に進み出て

「シェーネレーデゲマハト」

言いながら、喜色満面に浮かべて高田と握手をした。

「いま彼が元氣ならなあー」

「やっぱり、あいつは政治家に向いていたのだなあー」

彼は戦後に衆議院議員として活躍した。

「一年生のくせにドイツ語で演説するんだから、驚いた奴だよ」

「そんなこともあったな」

しみじみと人生の源を想つ二人であった。

どれもこれも、みんな大事な宝だ。

「でも、あいつはもつこの世にいないんだな」

同盟休校のあとのカルシユ先生の授業の想い出す中で、友のありし日の姿を思い浮かべた。

夏休み

一

夏休みになると、遠藤はカメラをぶら下げ
ては友人と一緒に隠岐観光や大山登山など
をした。方々一緒に歩きまわっては写真を
撮る。

隠岐では、漁業と商業が盛んな港町西郷さいこうの
近くを訪れた。この地方には資源として有
名な珪藻土が産出する。この山肌に無数の
穴居とその一つに、壁画のあるのを見た。

高等学校の進学祝いに十一歳違いの兄が買

ってくれたカメラだ。舶来品だ。露出を測
って、これでシャッター速度と絞りを合わ
せて撮るのは一寸した芸術だ。その後が、
また楽しい。現像液と定着液をつくり暗室
で画像を浮かび上がらせる。これを見るの
が学校の授業よりも面白い。

カルシユ先生は、夏休の間ずっと大山に家
を借りて過ごしていた。

松江の街に縦横にはしる堀割の濼んだ水面
に、時ときとして蚊柱が立つ。

そんな蒸し暑い夏の夜を避けて、家族とこ
こで暮らしていた。

大山登山をした時、カルシユ先生の所に立

ち寄った。すると団扇をもった先生が浴衣
に下駄はきで庭に出て来て、

「ようこそ、
と言った。

浴衣は寸足らずで、ちょっと恰好が悪い。

メヒテルトと一緒に裏庭で花火をしていた。
花火を中断して、椅子にかけて話が始ま
った。長々と話が続いた。

エンメラも話に加わる。

カルシユ先生は、納得すると

「そう、そう」

と必ず二回繰返して相槌をついた。

二

メヒテルトの保母さんは錦織きみえである。
「ママ、ママ」

と乳児のころから懐いてそう呼んでいた。

彼女が慕つ『日本の母』である。近所に赤
川姉妹と幼馴染みの三歳下のふみちゃんか
いる。メヒテルトが奥谷で成長する。その

教育担当は家庭教師の山根夫人で、日本語
の家庭教師は中村夫人であった。学齢にな
っても、学校には行かなかった。

ドイツ語はエンメラ自身が教えた。必要な
ことは父母が教えた。

家族で話すときにはドイツ語以外の言葉は
許されなかった。

彼女は初めて父フリッツと松江城に登る。

堀尾吉晴が亀田山に築いた屋根が千鳥破風

の典型的な平山城^{ひらやまじょう}で、千鳥城ともよぶ。

一六三八年から家康の孫、直政を藩祖とする松平家の居城であつた。

母も一緒だ。今日は高島も一緒だ。

「いつきても、すばらしい眺めだな」

フリッツがつぶやいた。

「ほら、あそこに大山が見えるわ」

「あれが六道湖ね」

とメヒテルトが指さした。

「ハーンが幾度となくここから夕日を眺めたということですよ。中学生と一緒にね」

「高校生じゃないのですか?」

「いや、中学生です。松江中学の生徒です。」

ところで、ラフカディオ・ハーン^{ラフカディオ・ハーン}の住居をみたことがありますか?」

「近所なので、たびたび行きますよ。」

とつても、情緒豊かな庭がありますね。

素晴らしい家ですね」

フリッツがそれに答えて言った。

「根岸さんのお宅を借りて、短い間ですが住んでいたのです。カルシュさんは、もつとずいぶん永いこと松江に住んでいますね」



ラフカディオ・ハーン旧宅にて高島教授、メヒテルトとともに

高島が付け加えた。

「そつ、まる七年になります」

「そんなになりますか」

三

人力車に乗ると目の高さが変わる。落ち着いた松江の街の雰囲気が好きだ。

「次の休みはいつ?」

家族みんなで近隣を旅行した。玉造温泉^{たまぞうおんせん}にはよく出かけた。

神代の昔に発見されたと伝えられる。名づけて神湯、万病を除くという。

日本の気候に合わず健康の優れないエンメラを氣遣って時々ここをやってくる。

温泉街のはずれに玉作湯神社^{たましくりゆ湯神社}がある。温泉を発見した少彦名命^{すくなひなのみこと}を祀っていると聞いた。宿の老婆が語ってくれた。

もくもくと煙を吐く汽車の力強さが好きだった。家族二人でそんな列車の腰掛けに座ると、どこかのおばさんが話しかけて、お菓子をくれた。

「ありがとう。おばさん」

和歌山へ遠距離旅行した。この駅のパンラアイスクリームは特別おいしい。

かつて喜一が言っていた鯨の話の思い出していた。駅に着いたフリッツは早速、周りの何人かに

「鯨はここで見られるのですか？」

聞く。

「たいじ 太地のことだな」

「でもそんなに見られるもんじゃないぞ」

「沖で、時には見られるがね」
「時々やって来るが、やっぱりこちらから出せないとな」

「お父さんはもしかしたら、この高等商業学校に赴任したかも知れなかったのだよ、メヒテルト」

「ここも、すてきね」

紀伊徳川家の栄華を誇る和歌山城を仰ぎ見ながらエンメフが感嘆の声をあげる。

この城の屋根には千鳥破風が松江城と同じく取り入れられている。

「でも、わたしは松江がいいわ」

メヒテルトは松江の静かなたたずまいを思った。

「ここは、松江とは違つが、出雲によく似た土地がらだよ」

フリッツも自分の人生観に根ざした評価をする。

出雲の風土記を学びながら、得られた知識が脳裏に浮かんだ。

「でも、本当は何も知らない」
と苦笑いしながら娘に語りかけた。

「ここ紀伊の国では古代から信仰を集めた神社がある。神武天皇の御代に起源があると日本書紀が云っている。代々紀伊の家系が祭祀を務めている。」

ついで 鬱倉とした木立の中に日御神宮、国懸神宮が並んで鎮座する。千木のある屋根は出雲大社と同じだ。何となく、出雲の雰囲気だ。

四

人力車で海岸をゆっくり走る。和歌山のはずれになると波穏やかな和歌の浦にてた。不老橋をわたる。中国の西湖の橋を模したつくりといふ。

この地は、万葉の歌枕の地だ。

万葉歌人がここで和歌を詠んでいる。

現在は、万葉集にちなんだ万葉館があつて昔の様子を語ってくれる。

和歌の神様の玉津島神社が近くにある。

この地、片男波海岸からは、その昔、玉のよつに連なる島々が海中に浮かぶ美しい景色が見られたとのことである。古来、天皇も何度か行幸したことのある景勝地である。

聖武天皇に随行した山部赤人が長歌と二つの反歌を詠んでいる。その二つが

わかの浦に潮みちくれば瀉をなみ

葦辺をよつて鶴をみる

である。

当時の風景が目に浮かぶようだ。

「ここから、雑賀崎への道すがら海岸線の美しい、フリッツは見とれた。」
途中、蓬菜と呼ばれる岩にメヒテルトと一緒にのぼった。

「気をつけて、フリッツ。」

「メヒテルト、もっとゆっく。」

「大丈夫よ。ムティ。蓬菜には仙人が居るんだから。」

「ここは、不老不死だからな。」

この地から、ちよつと北寄りの徳川家の造営になる養翠園に足を向けた。

見事なつくりだ。

緑の豊富な広い庭園のなかに歴代の藩主が愛した茶室がそのまま保存されている。

借景の山々が融け合つ。庭園の極致だ。海水を取り入れる珍しいつくりの汐入の池。その縁の風にそよぐ松の木と水面に生じるさざ波が美しく映える。

日本は、いや日本人は何とすぐれた美的感覚をもっているのだらう。

池の縁から突き出た黒松の陰影の中で池の魚が飛び跳ねた。水晶の玉のしぶきが飛び散り日の光を弾き返した。

華やかさを極限まで付け加えよつとすのこーロッパの美の構成と本質を異にする日本の美をフリッツは理解しているのだ。

華道も茶道も、書道も絵画も、舞踊も能も

そして寺院の造りも何もかも、古来芸術と云われるものが、人工的な美の世界で、ひとつとしてむだがなく、自然の中で清楚な相互の配置の極致を実現しているのだ。

ひとつでも存在をはずすと調和の美のすべてが倒壊してしまう、むだのない美しさだ。抽象の美しさが、具象の美しさの中にかくも見事に実現されている。

鯛の一本釣りで知られる、石段と坂の漁村の雑賀崎に出た。青い波の中の黒く輝くうねりと白しぶきが眼に入る。独特の潮の香りの港は、波の様子が異なるが、鳥根の漁村とよく似た風情だ。

ここから骨の折れる路を登って見晴らしのよい場所にてた。

エンメラもメヒテルトも黙って、岬の突端から海峡をみる。江戸末期の黒船の監視に使われた『番所の鼻』から見た、自然が配した小島の様子がとても美しい。ここは海を借景とした庭園で、潮騒と松風の音が絶えず聞こえる。

夕刻になった。近くの鷹ノ巣の高台から海を眺める。

小舟が通る。海に日が落ちるところだ。

夕日が紫青の混じる縞をなして静かに水面に映える。

この国はなんと美しい国なのか。

フリッツは、何年か前に訪れた隠岐西ノ島の夕映えを思い出した。

確か、島外れの国賀海岸であった。荒波に浸食された奇岩断崖からなるこの上もない美しい海岸線は、時の流れを忘れさせる程の眺めであった。

絶壁の上はのどかな草地の放牧地であった。夕方、そこにメヒテルトとともに立った。

そこから縞模様様の海に映える赤と金色の入り混じった夕焼けを見た。

ドレスデンで見も知らない人から授かったボタンの放つあの光を思った。

眼前の光景は、あの宍道湖の夕日とは異なる神秘的な夕映えであった。感動に二人は胸を震わせた。

「なんといつ、高貴な美しさか」

この地は出雲の地方とよく似ている。そこに自分に与えられた運命をひしと感じた。

郊外に岩橋干塚古墳群を見た。ここは大和地方や大陸との関わりのある土地柄で五、七世紀につくられたという。いまは紀伊風土記の丘と名付けられた史跡公園だ。

ふと、フリッツは松江近郊の伊邪那美命を祀る神魂神社と八雲立つ風土記の丘の古墳

群のたたずまいを思い出した。

五

一九三三年から夏には、六週間近くの休みを利用して、たいてい軽井沢で、家族一緒にゆったりと過ごした。

松江から大阪まで寝台車で行く。さらに東京、上野をへて高崎から軽井沢へ行く。二十四時間かかった。途中の駅でフリッツが列車の窓を開けているいる駅弁を買ったものだ。

「えー、弁当ー、弁当ー。おせんに、あんパン」

「弁当ください。お箸もつけてください」

箸を使って器用に食べた。

フリッツは好んで鰻^{うなぎ}丼を食べた。しかし、メヒテルトはどついつわけか鰻^{うなぎ}丼が嫌いであつた。

高崎では、フリッツはだるま弁当を決ま^つて注文した。

一九三九年までは通称ハンダヤマの別荘で過した。この別荘には番^{ばん}ががぶつてあつた。一四六三だつた。現在は道路になつてゐる。半田氏は資産家で、多くの森と土地を所有してゐた。

フリッツはここで人智学的見地から東洋哲学史の研究を行なつた。

夏の間そこに住んでいたドイツ人は軽井沢のこのあたりを《フン族の小さな森》と呼んでゐた。おそらく文明から取り残されたという意味で古い民俗名の匈奴(フン)という言葉を使ったのであろう。

というのは、そこは第一次世界大戦の間、多くのドイツ人があたかも虜囚市民のよつにして住んでゐたからだ。

ともかく三笠ホテルのすぐ近くの小さな森であつた。昭和四十五年まで営業されたこのホテルは今では文化財に指定されている。

当時外国人を交えた舞踏会や野外園遊会がよく開かれた。社交場は庶民には高嶺の華だつた。純西洋式のアカマツを用いた木造

の建築はアメリカ・イギリス・ドイツの混合様式である。

一九四〇年の夏は、後に皇太子殿下が美智子さまと出会つたテニス場のすぐ近くに住むことになつた。旧テニス通りにある別荘の庭のシダやコケが美しい。石畳の道が続く《幸福の谷》は外国人が集まるところだ。そしてこの居住区の別荘一九二四番に住むことになつた。

近くに、半身が赤いアカゲラが訪ねてくる。「つわー可愛い」

野鳥の観察で時を忘れる。メヒテルトは森が大好きだ。

ブルーベリーやクランベリーやラズベリー

があちこちに見られる。木立の中の散歩道に珍しい草花を摘む。そこで戯れる昆虫の動きをみるのは子供には何よりの楽しみだ。

赤ずきんちゃんの話を出す。ここは少女にとつてメルヘンの世界だ。

フリッツとエンメラの出会つたマールブルクの東は赤ずきんちゃんのおふるさとだ。そこには赤い帽子をかぶつた女の子がたくざんいるとフリッツから何度も聞かれされてゐる。

三笠通りから大通りを進むとカラマツ林の外人墓地が見える。そこから少し歩くと雲場池が見えてくる。白鳥が羽を休める。チャイコフスキーの白鳥の湖を連想させる。

事実、みんながスワン・レイクとよんで
いた。この周囲は水が澄んでいる。

メヒテルトはジークフリートとオデットを
思い浮かべる。一度も見たことのないバレ
エだが、エンメラの膝に抱かれて、何度も
物語を聞き、その曲も何度も聴いたことが
ある。いつのまにか、オデットと自分を重
ねている。

三人で北にときどき足を延ばす。鬱蒼とし
た緑の繁る森だ。木の間より漏れる光の中
をハイキングする。ドイツ人が好きな山歩
きのヴァンデルングだ。水筒持参で途中の
吊り橋をわたる。そこに、一羽の白鳥が飛
んでくる。

冷たい湧き水が見える。ここでフリッツは
一休みする。冷気で気持ちさが静まる。ここ
は一番落ち着くところだ。

「静かだ。風の音が聞こえる」

旧碓氷峠の見晴らし台に登った。この日
没は美しい。六道湖の夕日と異なる別の美
しさを想つ。

「美しい。何という美しい夕映えか」

メヒテルトの顔が夕日に染まる。

フリッツは遠く故郷の友を想った。

嵩だけのふもとに

—

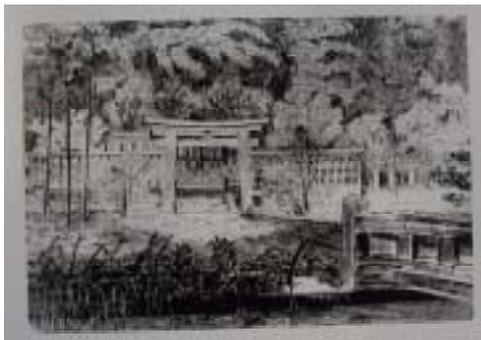
松江の東 中海の近くに聳える標高三三〇
メートルの嵩だけ山がある。嵩山は高い山を意
味する山だ。今は、当時の松江高校のキャ
ンパスに高層建築が立ち並んで視界を遮っ
ているが、昔は周囲一面が田圃で民家が少
しある程度であった。

したがって、学生寮である自習寮の丘から
の見晴らしはよく、和久羅山わくろと樂山らくととも
に、乙女が仰向けに寝た姿に見立てて、昔

から寝佛ねぶつと呼ばれていた。松江高校生は口
マンを託してメツチェン山と呼んでいた。
その麓でみんな思い思いの学園生活をして
いた。

因みに同じ漢字を当てる嵩山すげん（
と呼ばれる中国河南省洛陽の東にある中国
五嶽の一つの名山がある。同名で鎌倉末期
〜南北朝時代の臨濟宗の僧がいる。二度中
国（元）に渡り、南禅寺、円覚寺に住した。

フリッツにとっても彼の日本での生徒との交わりの象徴であった。この地を愛した彼は周辺の景色や建物を描くために、画紙集とパステルをもってよく散歩に出かけた。



月照寺(藩主松平家の菩提寺) フリッツ自筆のパステル画

「カルシユ先生はとにかく人なつこく親切だったな」と生徒が口を揃える。三年の間、ドイツ語の授業を毎日のように受けた。黒板に書かれたドイツ文学の断片が目につかぶ。レクラム文庫の哲学書が教科書だったこともある。ときに《現象学派に属するハルトマンの哲学》の話があった。実利主義に走らない先生の教壇に立つ姿はいつも絵になっていた。

二

穴道湖と中海を結ぶ大橋川の袂や近くの神社では何時間もそこで我を忘れて描画に没頭したものだっただ。

五山文学の代表的人物で著書に『高山集』二巻がある。



校舎から 松江高校六期生

このように崇高なシンボルでもあった。生徒たちにとっては運動に勉強に励んだところ、青春のすべてを包んでくれた高校生活の象徴であった。



大橋川に浮かぶ帆かけ船 フリッツ自筆のパステル画

そのときの先生の言動の数々が、高校生の人間形成に識らず識らず、影響を及ぼしたものだ。

一九三三年、早春、九期生の卒業前に二階の教室において、問題文を先生に言われて、生徒の一人が黒板の右に書いた。それを先生が生徒に確かめながら一緒に翻訳する。味もソツ気もないただの翻訳の作業で、つい時のはずみで先生もあらぬ方向へ話がそれた。

当時日本では高校生、大学生たちが大きな関心をもっていたカール・マルクス²についての話に脱線した。生徒の質問にカルシユ先生が答える。

ハルトマンの門下生としてドイツ理想主義時代の理性的リアリズムを修め、シユタイ

ナーに傾倒する行動派の人智学者であったフリッツは、マルクスの唯物論に反対する立場にあつた。話の聞き手は十八、九歳の



第九期生 マルクスの講義風景

若者 だが、当時の世界を席卷したマルク

ス主義についての情報をきちんと伝えようと、一心に打ち込んだ。

この先生のマルクスの授業はクラス一同の心に深い印象を残した。

左翼運動が学内でも盛んなときであった。

三

昭和と同じ年齢の尋常小学校四年生の前田少年はいつものように元気に学校から帰って来た。彼の両親は松江高校生相手の下宿をしている。毎日育ち盛りの若者相手に食事の用意で忙しい。自分の子供を余りかまってやれない。両親は用事があって外出していた。

留守中、カルシユ先生が家にやってきた。

学校の帰りに愛用の自転車で乗りつけた。先生が生徒の下宿を訪ねることなど考えられないのだが、カルシユ先生はそのあり得ない訪問をやつてのける変わったひとだ。

「こんにちは、お邪魔します。」

と、二階に上がっていった。

異人さんといえば子供にとっては怖い存在で

「何をしてんのかな？」と

耳をそばだてていた。

生徒をたずねてきたのはよかつたのだが、二階でドスドスンと音がした。天井の方を見ると座板を支える梁が折れてしまっていた。とにかく大柄な先生の体重のせいだった。その後、修理したこの梁にはもちろ

ん補強をいれた。

四

雨の日の夕方、何やら外で大声がする。松江高等学校の生徒が官舎の窓に向かって叫んでいる。

「先生！ カルシユ先生！」

「俺は、カルシユ先生が好きだ」

この雨の中アスファルトの上におすわりして、ずぶぬれた。

「ファティ、なーに？」

メヒテルトが何のことが訳がわからず、お父さんに尋ねた。

「うん、学校の生徒だよ」

「どつして？」

どつやら、生徒は泥酔に近い。

「そんなことしていると風邪引くぞ」

家に戻ろうや」

とフリッツお気に入りの蛇の目傘をさしかけてやさしく説得した。

「何かつらいことがあったのかい？」

すると生徒が

「俺は大好きな先生のために歌を歌うんだ」

何か友達とあったらしい。

「わかった。わかった。ありがとう」

「でも、もう帰ろうや」

「ドイツ万歳！」

突如ドイツ国歌の《皇帝》を歌い出した。

「ありがとう。吉田君」

生徒の肩を抱いて家に招き入れた。

エンメラの入れたコーヒを飲んで体が温まったようだ。

「さあ、帰ろつな」

君が見えなくなつて皆も心配しているよ」

そう、説得して彼の下宿につれ帰った。

そんな、カルシユ先生だった。

五

高校生になつた千代賢治は嬉しくてしょうがない。少年から青年になって、誰からも一人前として扱われる。入学式でも校長

が、祝辞の中でそう言った。

「おれも、おとなだ」

饅頭屋に入って饅頭をたべるのも、映画館に入って映画を見るのも、停学覚悟だった今までの中学生にとつて、高校の生活はめくるめく変化であった。

その一つが経験したことのない外国人のカルシユ先生から講義を受けることだった。

「ダスイスト、アインフェンスター」

と窓を指しながら繰り返し返す。どつも窓のことらしい。先輩に聞くと

「おまえ、それがカルシユ先生の第一声で、決まり文句なんだぞ」

後で聞いた。

「何だ！ そつだったのか」

正に驚きと安堵であった。
先生は授業中は一切日本語を使わない。
我々にはすべてドイツ語で話す建前を自分で守っていた。

三年生になって、ある日の終業後に、千代からクラス仲間へ

『カラーン コローン』と高下駄の齒を鳴らしながら下宿へと向かっていた。

ふつと後ろに人の気配がした。気づくと「やあー」

今度は日本語だ。

先生が通勤用の自転車を押しながら追いついて来た。ニコニコしながら我々の列に入った。

直ぐ近くにいたのが千代だ。しかし、傍ら

の渡辺が

「おまえ、何か言えよ」

「しかしな」

何か話さないと間が悪いと思い、

「ニーチエの《ツアラウトウストラかく語りき》⁹⁸のいい解説書はありませんか？」

と思いつきを千代は言った。

「えっ、何ですか？」

先生は一瞬、驚いた感じだ。

しかし我が意を得たりという調子で、

「日本では翻訳されているかどつか分からないが、こんな本がある」

「いや、こんな著者の本もあるよ」

別れ道まで先生はドイツ語混じりの日本語で情熱的に話をしてくれた。

先生の話は全部は分からなかったが、一生

懸命なので

《奴さん、困っているな》という友人の心配顔がそこにあった。

後になって

「しかし、こりゃ、エライ事になったと思っただよ」

と渡辺が言っていたっけ。

「ところで、おまえ、カルシユ先生の哲学の立場を聞いたことがあるか？」

渡辺が真顔で聞く。

「うん、ちょっとだけ」

「しかし、おまえ、ニーチエとは難しく出たもんだな」

千代は

《ただ靴の踵の音高く大股で正しい姿勢で歩くその印象がカルシユ先生の全存在を示唆している》⁹⁹ よつにも思った。

夕方、久しぶりに早めに帰宅し、食後にほんやり昔のことを想い出していた。

高校生の頃、よくわけの分からないことに対して、本格的な学問とは思えないよつな、単純なことを繰り返したエネルギー

は一体何だっただろうと社会人になってから、よく考えたものだ。

毎日忙しくて、普段は決して思い出したことがなかったことが脳裏をかすめた。

平成に世が変わった頃、久しぶりに岡崎森山、白石先輩と会ったことだ。

そのときに、ドイツ語担当の胡麻塩頭の小
林教授をみんなで話題にした。
もしかしたら、その辺にそのヒントがある
のかも知れない。

「その訳ではだめだ」

順番に進められる我々のドイツ語の解釈が
主な授業内容だ。

しかし、時には先生も適当な日本語が見つ
からない。

「うーん」

身が教壇にあることを忘れ、長考すること
がよくある。

「あとで念のため、カルシユさんに聞こう。
カルシユさんがいて、我々は本当に助かる」
というわけだ。

「とにかく、小林先生はユニークな教授だ
ったな」

「ドイツ語の音読は快適だったが、訳すと
きの日本語がうるさかった」

「《的とか、性》は一切使わない」

「そういえば、《彼、彼女》もだめで、頑固
に《その人》と言いつけたな」

「いわば、信念のひとだったな」

「《山をよじ下る》、《荷物を積み下ろす》な
どが考えた末に出てくる訳語であったな」

「そんな、訳語はな、君、愚にもつかない

《悪訳》だ」

と嫌なものには吐き棄てるように、そう生
徒にぶつけた。

何せ迫力があつた。

「それにしても、副保証人でよく面倒見て
貰ったな」

と森山が言った。

生徒の生活や学習の指導をしてくれる親父
のような存在が副保証人だ。

いつものまとめ役の白石が補った。

「そついえば、森山、高田、岡崎らと先生
のお宅に押しかけたな」

すると、愛想良く《よくきたな。さあやり
ましよつ、酒を飲んだ人間に悪人はいない
よ。》と小林が酒をすすめてくれた。これが
普通だったから、驚きだった。

「しかし、あの姿はまさに、大人たじろであつた
な」
とアリストテレス哲学の好きな岡崎が最後
に言った。

六

ドイツ語会話で先生がどついつ質問をすれ
ば、喜んで話に応じられるかの情報が伝わ
つて来る。

「先生、ドイツの話をして……」

すると、心得たとばかりに今までの会話の
練習をうち切つて絵を描きながら、鼻歌ま
じりにドイツの生活を解説する。生徒の雰
囲気から、臨機応変に授業のやり方を変え

る。
 「どつて日本へ来られたのですか？」
 と問えば、黒板に書いたばかりのドイツ文をさつさと消す。
 そして、論文名を書いた。
 何を話すのかと思つたら、
 《デヤウンターガングデスアーベントランデス》の話だ。
 「これはオスヴァルトシュペンゲラー⁸の『ヨーロッパ文明の没落』の話です」と解説した。

「この論文は唯物主義に走り過ぎたヨーロッパの文明の病態について論じているのです。結論として、そのよつな文明に支えられているヨーロッパ諸国に文化の崩壊の

時が来るといつのだ」

「とはいつても、それはいつ頃なのですか？」

生徒が聞きただす。

「西暦二千年頃といつている。この時期に全世界の人々の間に混乱が起り、大きな危機に当面するといつ」

「ふーん」

「といつのは、ヨーロッパは物質文明の発達により、その精神が物質的成果のみの社会に閉じこめられてしまつている。そして、社会も個人も自らを支える精神的根拠が見られなくなり、不安定な状況にさらされているからだ」

先生が自らの言葉を補つた。

「そこへ一条の文化的光を投げかけるもの

が考えられる。それはオリエント（東洋）のゼーリッシュ（精神的）なクルトウール（文化）に違いないだろう」

「私はこのオリエントの光を見たいと熱意をもつてここへ来た」

「この日本には、東洋の国の中で、とくに目を見張る大きな特徴がある。それは他の地域から来た思想や文物を巧みに吸収してこれを融合する力をもつていることだ」

そついながら話を続けた。
 「ここで見つゝ、他の国では見られないのは、ウルシュプリュングリッヒ（オリジナル）な古いものが、新しい今のものと共存して残されていることだ」

「例えば、どつてのことですか？」

「日本の宗教について言つならば、古代の神々の信仰があつた。それが今の神道に続いている。その後、中国から朝鮮半島を経て仏教が伝来し、一緒に儒教や道教の思想が伝わり、それからキリスト教もヨーロッパから伝わつた」

「それらがこの国の人々の間では、一つのものか他のものを滅くさせるよつなにならず、共存している。このことは世界中の識者の注目するところだ」

先生はここであらに、次のよつに言葉を引き継いだ。

「私はそのよつな環境で教育を受けて育つ、

日本の若い人々の姿を見て、東方の光を探つてみようと考えている」
 スケールが大きくて、しかも身近にひしひし感じる熱弁であった。

『同質と異質』の『混在と調和』で特徴づけられる日本の文化の一面を他の文化と比較しながら語ったカルシユ先生の確かな眼に、みんなは胸をゆり動かされて聴き入っていた。ハルトマンや仏教の影響を受けた彼の世界の認識からいって当然のことではあるのだが。

話が済んだら、授業時間の終わりの鐘が鳴った。

七

「西洋人と東洋人の思考、理論の進め方の間に、大変な違いがある」

と先生が教室で突然話を切りだした。生徒たちが意表をつかれてびっくりする。

「何を話すのか。難しい話か」

隣席と私語だ。

すると、先生は微笑みながらやさしい声でこつ話を進める。

「西洋人の場合は、ある目標を立てて、理論を進める時、用意周到に誤りなく一歩一歩と積み重ねて進み、長い時間をかけてある結論に到達する」

「これをシュトウーフエンヴァイゼ（段階的）とよぶ」

「ふーん。何だかよくわからんが」

「ところが東洋人の場合、仏説などによく見られるのだが、途中の理論段階は素通りして、いきなり結論に到達する」

先生は黒板に二つの単語を書きながら説明する。

「これはシュプルングスヴァイゼ（飛躍的）といえる」

「そんなもんかのつー!」

「西洋人のそれとこれとを比較すると東洋人が瞑想的で直観的に勝れているからかもしれないが、瞳目に働かせることで、西洋人の驚嘆するところだ」

先生は自分に言い聞かせるように語る。

ある日我々の方から先生に、『哲学について話して下さい』とお願ひした。

「ビットェ シュプレッヘンズィ ウンスフ オンデア フィロソフィー」

生徒の一人がノートに書いて、それを大声で読みあげた。

カルシユ先生が哲学専攻の偉い人だと誰か

が聞いていた。そこでこのお願いだったのだが、これがクラスの総意だと思った先生の顔には、喜びの色が見えた。

早速、黒板の文が書きかえられ、まず、「フィロゾフィー イスト ツー デンゲン、ヴァスダスレーベン イスト。」

(哲学は人生とは何ぞやと考えることである。)

「こう書いて、これを読んでそれから説明した。これが哲学の入門のようだ。次に、「ヴァス イスト ダス レーベン？」

(人生とは何ぞや?)
と一歩進んだ。それこそシュトゥーフエン ヴァイゼである。

この説明文も一語ずつ発音して読みながら、

具体的な例を添えるので、みんなは了解した。そこで次に移った。

「ヴァス イスト ダス ダーザイン？」

(存在とは何ぞや?)

「いつになったら誰にも答えられない。」

「哲学とは？」

「だ。」「という我々の質問に対してはこれで十二分だ。」

先生は自分の専門を生徒に少しでも伝えることができた実感にとても満足げな顔をする。ここで、「ダス イスト アーレス! (これですべてだ!)」
と言ってチョークを置いた。

奥谷の洋館

—

松本少年は小学校のかえりには、しょっちゅう遠回りして道草をくついていたものだが、その際、三角屋根の洋館は、必ず覗いてみる重要なチェックポイントであった。
「はて、さてどこか?」

お正月の挨拶を学校で済ませた帰り道のこと。お昼前、栗色の長い髪を一本に編んだ女の子のメヒテルトが着物を着て戸口に出

ていた。乳母車に小さな子を乗せている。フリーデルンだ。

それだけでも目を見張る驚きだった。

「フリーちゃん。バアー」

と赤ん坊をあやしている。

「おい、あのおさげのかわいい子はだれじゃ」
や

「メヒテルちゃんだ」

「おまえ、知らんのかよ。あれはドイツ人だな」

「もつとも、うちの学校の生徒じゃないけどな」

「ところで、おまえ、ドイツの赤ちゃんはどつ泣くのかな。聞いたことあるか?」

「いやーまだだ」

それより一寸前一九三五年の春メヒテルトより二歳年上のエレーナが北堀小学校の三年生に入ってきた。

「よろしくね」

お母さんがみんなの前で挨拶した。ウッドマン家のエレーナだ。男女別のクラスなので残念だ。でも、廊下の帽子かけの名札にあるエレーナ・ウッドマンのかな文字は、よく目についた。何かそこから知らないおとぎの世界が覗ける小さな窓のようにみえた。

エレーナのいる奥菜谷の官舎にいくと、玄関からすべに、茶色の木ですりの付いた階段が上に続いているのがドアの隙間から見

える。これだけで、やっぱりちがうなと感じた。

ままごと遊びにエレーナは本物の皿やカップそれにしちりんまで持ち出してきた。学校では、慣れないので最初のうちはいるまごついていたが、じきに良くてできる子になって、クラスの番員をするようになった。

人気があった。かわいかった。

毎日おいしそうなお弁当をメイドさんが届けてきた。

なかでもチキンライスの赤いごはんが珍しくて、それに黄色の卵焼きがふんわりつて、いい匂いがしてきてね……。

周りの女の子達は思わず、「ゴクリ……………」

カルチャー ショックだった。

二

一九三七年三月末のこと、ウッドマン家が留守中の昼火事で全焼した。おふるの火が煙突から流れ出た。暖炉の煙道も出来が悪かったらしい。つくりなれない異人館は、外観はよくできていても、不備があったらしい。あの頃、春先のフェーン現象による大火災は毎度のこと、火事には松江の人々はなれていた。

「火事だ！」

メヒテルトが焦げ臭い匂いに最初に気がついた。

近所の人に、通りがかりの人も加わって、

となりのカルシュ家の荷物を片っぱしから運び出した。

「荷物はそこに」

と近くの玄関の広い家のあたりに置いた。

「わーっ、たいへん」

メヒテルトは眼をまわしそう。エンメラ夫人は妊娠九ヶ月で人力車で駆けつけた感光医師が彼女をよんだ。

「奥さん、だいじょうぶか？」

知人宅に避難させた。

「わたしはどうすればいいの？」

メヒテルトは用意してあった産着をバスケットにつめしっかり抱えていた。

フリッツもどつして良いかわからない。

「どいた。どいた」

「邪魔だ。邪魔だ」
ふと我に返った。

「どつせ異人さんに言ってもわかりやせん
だろっ」

断りもせず、家財道具をだまつて持ち出した。

昭はやじ馬で、焼け跡見物に行った。

「何だ！どつしたー」

大人も一緒にやじ馬だ。

「どつした！何だ！」

今度は、カルシュ先生が見舞客の対応にいそがしい。

「お世話になります」

カルシュ家のひとたちは、半分くらいはど

るほつにあつていふと思つたらつ。昭が覗いた時は家の中はすっかり空っぽの状態だった。

「やれやれ、やっと火が消えた」

その後たちまち荷物が戻ってきて、ささいなものまで一つとして紛失していなかった。

「あら、鉛筆まで、もどおりだわ」

これにはメヒテルトがびつくりした。幸い、奥谷町住民のプライドが保てたわけで良かったが、日本語には『火事場どろほつ』という単語がちゃんと存在している。

フリーデルンが生まれたのはこの年の四月である。

世の平和と心の安寧を願つて、この子にや

すらぎの証の意味の名前を両親が付けた。
家族

—

家の左側にはフリッツの書齋に面して
藤棚があつた。

「天気も良いし、表で食事しようか」

「わー、きれいだわ。藤の花」

「これが藤色といふのだよ」

「これを髪に挿すときれいだよ」

「藤娘かな」

藤の精が宿つて生命の一体化した娘のはなしは古来の歌舞伎の伝統を映したものだ。いつか東京で藤野教授と観覧した舞台を思

い出していた。

《津の国の 浪速の春は夢なれや 早や

二十年の月花を 眺め筆の色どりも 書き尽

くされぬ数々に 山も錦の折りを得て 故郷

へ飾る袖袂》

と眼を閉しながら藤野が帰り道に吟じた。

「ハッセ」を愛する、あの厳格で律儀な藤野の思いがけない姿をフリッツは初めて観た。

ここに両親が砂場を造つてくれた。メヒテルトもフリーデルンも砂まみれが大好きだ。見たことのないお城をつくる。絵本でみたお城だ。

ときどき、焼け出されて引越したモニカとエレナ姉妹が遊びに来る。二人も自分のお父さんに訊ねて想像しながら《自由の女神》をつくる。どちらにも負けずに崩れないように注意深く作っている。

新興ドイツの勢いとアメリカの自由はどちらからも、もろもろを内蔵している。

砂場につくった《砂の城》と《砂の像》の姿形がともすれば崩れそつな南国とその間の将来を暗示しているようであった。

フリッツは、砂場の右隣に、ブランコをつくった。休みには、フリーデルンを膝に抱いてブランコを揺らす。左隣には小さな池

をセメントで造った。小さな命の金魚、鮎を飼った。

「ほら、金魚だ。鮎だ」

「これが、きんぎよなの？」

とフリーデルンが訊く。

「かわいいわね」

「ほれ、蛙だ」

「ぴんぴん跳ぶね」

メヒテルトがはしゃいでいる。

フリッツがどこからか形の良い岩を見つけてきた。

「これが鳥だよ」

時々二匹の蛙が池の縁で休んでいる。

つかのまの静けさだが、落ち着いた午後のひとつときだ。

ときどき、静寂を破るように、鮎がはねる。「おさかなさん。ここにちはじつと鮎や金魚の動きをみていると飽きがない。」

二

家に戻る。中では、エンメラがメイドのきみえさんにドイツ風料理を教える。



奥谷町官舎 カルシュー家の写真 1938年頃

「わたしもしたいわ」

「邪魔になるから、本でも読んでうらっしやい」

母はあまり教えてくれない。

「つまらないの」

ときどき、焼け出されて引越したモニカとエレナ姉妹が遊びに来る。二人も自分のお父さんに訊ねて想像しながら《自由の女神》をつくる。どちらにも負けずに崩れないように注意深く作っている。

新興ドイツの勢いとアメリカの自由はどちらからも、もろもろを内蔵している。

砂場につくった《砂の城》と《砂の像》の姿形がともすれば崩れそつな南国とその間の将来を暗示しているようであった。

フリッツは、砂場の右隣に、ブランコをつくった。休みには、フリーデルンを膝に抱いてブランコを揺らす。左隣には小さな池

をセメントで造った。小さな命の金魚、鮎を飼った。

「ほら、金魚だ。鮎だ」

「これが、きんぎよなの？」

とフリーデルンが訊く。

「かわいいわね」

「ほれ、蛙だ」

「ぴんぴん跳ぶね」

メヒテルトがはしゃいでいる。

フリッツがどこからか形の良い岩を見つけてきた。

「これが鳥だよ」

時々二匹の蛙が池の縁で休んでいる。

つかのまの静けさだが、落ち着いた午後のひとつときだ。

「きみえさん、材料をむだにしないで」
 エンメラが注意をうながす。
 石橋の豆腐屋に、メヒテルトはときどきお
 使いに行く。
 「いい匂い」
 豆腐の匂いのすばらしさ。
 「いつしよに豆乳も店で買っわ」
 大好きな香りだ。ヨーロッパにはないと画
 親から聞いている。

三

エンメラが庭仕事をしている。
 「ムテイ、何しているの？」
 「バラの手入れよ」
 「赤いバラね、きれいだわ」
 「赤いバラは愛の証なのよ。いつかお前
 もそれを……」
 エンメラは娘の将来と自分たちの将来を不
 安に思っ、言葉をつまらせた。

「ムテイ、寒天フツディング、ミルク卵砂
 糖入りカスタードを食べたいわ」
 「お昼は稲荷ずし、卵巻き、海苔巻きを食
 べるのよ」
 きみえさんが代わって答えた。

「白バラもいいわね」
 「黄色も好きよ」

「これは前に植えた銀杏よ。これはドウ
 イチジク。そのうち大きくなるわよ」
 「それにヤシの木とマツよ」
 「お前たちが大きくなる頃にはヒワモイチ
 ジクも大きくなるわね」

夕方はピアノを弾く。小さなオルガンも弾
 く。ピアノは子どもころエンメラが自分
 の父親から習った。
 バッハ、ベートーベン、モーツアルトが好
 きだ。

メヒテルトが、
 「これは、あのとぎのクリスマスツリーに
 した樅の木よね」
 エンメラの方を向いて言った。
 「そのよ」
 フリーデルンの知らないことをちよっと得
 意に思った。
 「日本は、湿気が多くて、つらいわね」
 「でも、こつこつ草木が涼しくしてくれる
 のよ」

「ねえ、ムテイ、楽譜は、いらないの？」
 「子供の頃から弾いてるから、大丈夫」
 傍らの、フリッツはドレスデンのオペラハ
 ウスを思い出す。
 「お父さんは、ワグナーが好きだ。
 でも、ピアノでベートーベンのソナタ《月
 光》を弾こう。これはやはり、お母さんの
 前で弾かないとね」
 でも、お母さんほどではないけどね

「わー、すてきな」

「シューベルトの歌曲をみんなで歌おう」

「このまえ、教えてくれたお歌ね」

「そっ、冬の旅ね」

「菩提樹がいいわ」

「アムブルネン フォルテム トーレダ
シュテート アインリンデンバウム……」

(泉に沿って 繁る菩提樹……………)

「きみえさんもうっしょいね」

「ママもうっしょい」

ねんねこ半纏はんてんで、背中におんぶしてくれた

あの《日本のママ》。

きみえさんのぬくもりを終生忘れない。

「いい、ハーモニィだわ」

家では音楽と本が主たる楽しみだった。



お気に入りの絵本全集の一部

唇くちびるときはおとぎ話の中のきれいな絵を見て
いろいろ想像する。フリッツが揃えてくれ
た絵本全集だ。

赤い表紙のきれいな全集。メヒテルトのお
気に入りにだ。

寝る前はいつもグリム童話とお祈りだ。

「ムティ、お休みなさい」

神社のカラス

奥谷の官舎から北に少し歩くと豊かな森や
竹やぶがある。千手院や春日神社をかこん
で、明るい木立の静かなところである。メ
ヒテルト、エレーナの二人と近所の年下の
ふみちゃんと連れだつて子供の足で一回り
してぐるにも手ごろな距離である。毎日
学校が済むと午後に現れるお客さんを待つ
のである。

「ソノソノ、行こつよ。エナちゃん、ふみ

ちゃん」

みんな、カラスが三時ごろに現れることを
知っている。カラスもこの友達と会つのを
楽しみにしている。カラスが飛んで来ては、
虫をついばむのだ。落ち着いた生活の中で、
この娘たちは、時々一緒にここに来ては、
ハーンが発見した神々の国の残像を感じな
がら、静けさを満喫していた。子供達は周
辺の雰囲気と自然を的確にとらえていた。

「帰ろつか」

「うん、帰ろつか」

「お日様が沈むね」

「みんなで、おてつないで帰ろつよ」

夕焼けロゼットが暮れて

やまの手の鐘が鳴る

おとろけが帰る

カラスと一緒に帰りまじや

アメリカとドイツと日本が子どもたちの小さな手でしっかりと結ばれていた。子どもが帰った後にはもつ家々の明かりがついて、夕食だ。

子どもが帰った後からは

丸いおきなのお月様。

小鳥が夢を見る頃には

空にはおきなのお月様。

子ども達もベッドで母親の話を聞きながら間近に誘われる夢路に静かに入るのであった。

八雲一家が去って約三十年後、このころはやつと松江に西洋人家族が住み始めたころ

で、それがこの奥谷の二家族と母衣町カトリック教会の神父さんだった。そのせいか、奥谷入り口の桑原商店にだけ、四角い大きな食パンがあった。

「あれは、異人さんの食べ物らしい」

一般市民にとって、パンはあんパン、張り込んでやつとジャムパン、クリームパンであった。

京店のまつ屋に行くとシュークリームが売られていた。

「ああ、一度食べたいな」

すくすくおきなに見えた。

桑原商店には高級なアイスクリームもあった。

友達が自慢げに言った。

「おれ、昨日アイスクリームを食べたで」「ほんとかいな。どんな味がした？いいな！」

たいていの子供は自転車を旗を立ててくるアイスクリンしか知らなかった。

松江の街で高等学校が都会の文物の窓口になったころ、奥谷の異人さん二家族の存在は、意外に重要な国際文化交流の効果をもたらしていたのだった。

学園祭の時

ここは大阪大学。晴れた秋のある日のこと。

全学あげての大学祭だ。構内は学生や近所の人々で賑わっている。

微生物病研究所でマフリア研究を手掛け、麻疹ウィルスの分離、生ウィルスワクチンの業績をあげた奥野教授は大学祭を眺めながら、ぼんやりと、自分の高校時代を思い出していた。カルシュ先生の顔が浮かんだ。

カルシュ先生の口癖は何かして貰つと

《有難つさん》

であった。

年に一度の松江高校の学園祭。

生徒は勉強よりもこちらに全力を傾倒する。近所の女学校の生徒を意識して張り切るも

のである。

クラスの三十名が言つ

「模擬店やるつ」

出し物の一つとして、テントで一軒急造する。

飲食店を提供して『まち』のメッチェンや人々を歓待するのだ。

「店名をどうするっ」

「うーん」

「メッチェン亭はどつか？」

「ぴったり来ないな」

「おい、《有難つさん》にしようや」

「ほら、カルシュ先生の口癖だよ」

これで、文句なく、まとまった。

模擬店で店の名前を《有難つさん》とした。

麗々れいれいしく大きな店名として張り出した。古い昔のことではあるが、奥野は鮮明に覚えていた。

ついで高校の教室での彼の姿を思い出した。ドイツ語を教わったことはもちろんであるが、重要な人生哲学の一端を教えられた。「私のその後の仕事に重大な影響を与えた大恩人だ」

奥野は先日たまたま同窓会に持ち寄った古ぼけた写真を家には持ち帰らず、教授室の机の引き出しの中に保管していたことを思い出した。これを引っ張り出した。そして、部屋を出た。

そこに、自分の研究室の学生が大学祭を冷やかに帰ってきた。

「今年の大学祭。なかなか、おもしろいじゃないか」

と笑いながら、批評していた。

奥野は自慢げに写真をみんなに示し、顔を紅潮させながら、熱っぽく語った。

「わたしの高校時代だ」

「ああ、先生、大学祭ですね」

「いや、高校生の学園祭だ。旧制高等学校だ」

「もつとも、昔は記念祭といっていたが」

嬉しそうに言った。



テントの模擬店の様子
(有難うさん)が見える

「しかし、キリンビールのテントの模擬店はなかなかモダンでしたね」

「先生、ところで、あの頃は今で云つて未成年の飲酒はどつでした？」

「飲んだわ。とにかく羽目をはずしてないやはや！とにかく騒いだな」

「先生は、何をなさつたのですか？」
「仲間がみんなで街中騒ぎながら飲み歩いたんだ。
いや、あまり聞かなくてくれ！私の立場もあるんだ」

「先生、この写真を見ると、すし、ライスカレー、煮物、うどん、しるこ、紅茶、ミルク、ケーキ、コーヒーなど十銭か二十銭で売っていたようですね。今の大学祭の模擬店とそっくりですね」

「そうだな。あんまり変わらん。しかし、これこそカルシウ先生の人気が高かつた一つのエピソードだ」

と奥野は自分に対してことはを結んで写真

を手に、席を立つた。そして、天国にいる先生に、模擬店名《有難うさん》のこの写真に、大きな熨斗をつけて、お贈りしたいものだなと思いを馳せた。

子供の教育が心配であつたのと彼のもとにドイツ本国から予備役のフリッツに帰国を促す手紙が届いたからだ。ドイツがチエコスロヴァキアの侵攻を概ね終わって、ポーランド侵略の準備を始めたころであつた。政府の意向があつてシユヴァルベ氏に交代の命があつた。
友人のオットが駐日大使に任せられた。

「今度のドイツ人さん、えらく若いで」と聞いた数日後、シユヴァルベ夫妻が、長いブーツをはいて、腕を組んで、赤山のころた道を轟進して来るのに出つくわした中

学生の昭は、ただぼつぜんと見送つた。
「なんだありや？ 松江にやあわん！」

暗雲

一

一九二九年カルシウ一家がドイツに帰ることになった。この年雇用の契約は過ぎた。

若きドクター・シュヴァルベ、ちと気負いすぎて来日したように見えた。

二

火事の後 ウッドマン家は、北堀町前丁の学校の近くに移り、以後異人館は一軒だけになった。

初夏の頃、午後おそくまで校庭には近所の生徒が遊んでいた。ときどきは卒業生も交じっていた。昭は当番で理科室の片付けを遊び半分にやっていた。篤で友達とチャンバラごっこをしていたのだ。のどが渴いて水を飲もうとしていた。

そのとき、窓枠に腰掛けていたウッドマン家の長女モ二カが、

「わすもー……」
 といって乗り出して来たのにはびっくりした。

こいつ、外国人のくせにまず「弁使ってけしからんと、めっちゃくちゃな理屈が昭の頭をかけめぐった。

しかし、ここは謹んで水道の『水』を汲んでさしあげた。

「はい、どうぞ」

「あーあ、おいしい！ありがとうございます」

何せ、迫力があってたくましい姉ちゃんであった。

エレーナの自慢は、軽井沢や野尻湖の話だった。

「きれいな湖で遊ぶの。涼しいところでアメリカ人が沢山いるの」

波静かな芙蓉の葉に似た高原の湖、その西に位置する黒姫山の斜面には七月頃はラベンダーが咲き揃い、やがて風にそよぐ色とりどりのコスモスが見られる。

ウッドマン夫妻は子供達を師範付属校ではなく、北堀の普通校に入れて、出雲弁を話すその辺の子供と一緒に育てながら、時には、外人の多いリゾートにでかけていた。このあたり、バランスをとる工夫をした姿勢が感じられる。

軽井沢のことなど離れ過ぎていて、同級生達には珍しくはあっても、ねたみをもつようなことではなかったが、エレーナが六年

生になった一九四〇年クラスの女の子が、
 「『いじめ』やっちゃたのよ。みんなスパイだとさわいでね」
 といっていた。

「アメリカ人は平和が好きな国民だよ」とエレーナは一生懸命言った。

でも、それがもとで学校を休むということではなかった。どうやらいじめはしつこいものではなかったらしい。

逆に、帰国後は日本のスパイ扱いで苦労したとのこと。気の毒に。ともかく、火事と戦争はウッドマン一家にとって大きな挫折であったに違いない。アメリカとの戦争がはじまった翌年の一九四一年に一家は強制送還のため離日した。

別れ・日本への想い

—

今日は、カルシュ先生が全校生にお別れを言っただ。

校庭にしつらえた台のうえに上がったフリッツは少し緊張していた。

「私が一九二五年の秋日本に来てから十四年になる。ずっとこの学校で教鞭を執ってきた」

と話を始めた。

それから、

「学校の歴史の一部分を共に生き、学校の繁栄と発展を心から願ってきた。みなさんの将来の幸福とその生活についても同様である。想起こすのは今は本校に居られない先生や卒業生のことである。彼らより時に便りを頂き、近況を聞くのが私には大きな喜びになっている。きっと将来もドイツで同僚の先生や卒業生のことを何か聞く時は嬉しく思うに違いない」

とやや堅苦しく緊張しながら述べた。

しかし、その後は、少し調子を和らげて、

「卒業生で職場に出たり祖国の将来のために若い前途ある生命を捧げられた人達をも謹んで想起こします」

「私はかつての世界大戦の参加者として、

自分の命を犠牲にすることがどんなに深い意味をもっているかを知っているつもりです」

—

と締めくくった。

「《人其の友のためにコロガ命を捨つる、これより大いなる愛は無し》とヨハネ伝福音書十五章十三にもあるのです」

その二週間ほど前のことであった。三年間教わった十六期生から一年間教わった十八期生までの有志がカルシュ先生の周りに集まった。

そして

「松江に対して特別な感情が起ころるのは永年の同僚の先生や生徒の親切や援助によるものであり、私だけでなく家族にとつても生活がこの上もなく快適であり暮らしやすいからであります」

主な荷造りも済んで、部屋は幾分散乱していたが、この日はメヒテルトも手伝って整頓した。フリーデルンは二歳になろうとしていた。かわいい盛りであった。みんなで思い出を語り合った。

「ほんとついに皆さんに心より感謝したいと思っております」

「松江で過ごした歳月と同僚の先生方や生

徒達とのふれあいはず、何にも替えがたい、素晴らしいものでした」

「今何よりも、それを回想して嬉しく心より満足に思っています」

「一九一九年には、すでにラフカディオ・ハーンの本でこの町や美しい島根半島、大社、美保関のことなどを詳しく読んでいたのです」

「国際博覧会のあるころ、一度この綺麗な国土と人々に接することができないかなという憧憬が心に起っていました」

「とても興味が引かれたことを覚えていますが、

でも、遠い日本行きはとても実現し思うにもなかつたのです」

「でも、先生はどうして松江に？」

「実は、ドイツで松江に来ないか、との勧誘があつたのです」

「そのころ、東京から全く別の形で、ドイツ語講師の募集があることを聞いていました」

「この時には、この松江という名前は私には初耳ではありませんでした」

「でも、関東大震災がありましたね、それで、その話は立ち消えになつたのです」

「で、どうして松江に？」

「そうとは思っていませんでした」

「ところが親友の長屋から誘いがありました。そこで、一九二五年にどうしても日本に行きたいと思い、途端にこの憧憬が強くなつたのです」

エンメラがそばから口を添える。「この国が、そしてこの美しい松江近辺がこれ程好きになつて、ここが第一の故郷になるとは思いもありませんでした。二、三年で帰るつもりで思っていたのです」

「そのころ、ドイツは国内が混乱していました。なかなか定職もなかつたのです。そう、この憧憬があつたからこそ承諾したのです」

「しかし十四年もいて、しかもできるだけ人々や景色に胸襟を開いて接するようになっていると、わたしの気持ちはこの国に癒着して離れられなくなりまして」

「ずっと、憧れの日本で過すつもりでしたか」

「でも、それよりも先生の故国であるドイツは繁栄を手にした、世界の強国です。学

「いや、当時はまだ松江でこんなに永く過

問も芸術も世界をリードするすばらしい国
じゃありませんか」

生徒が口を揃えてそう言った。

そしてそのうちの一人が

「だから、ドイツ語、ドイツ文学、ドイツ
哲学を誇りに思って私達も勉強してるので
す」

とちよっと気負いながら言った。

「ありがとう、私はもちろんドイツを誇り
に思っています」

「したがって、新輿のドイツでこれから働
ける歓びは大きいのです。でも、松江を去
るのは残念でたまりません」

生徒との間の距離感が薄れる。先生は、続
ける。

「さて私がみなさんと共に体験したのは学
校の歴史だけでなく松江の街や近辺の歴史
にも及びます」

「ふーん」

「みんながまた小さな子供だった頃ですね
ここで育ったひと以外にはそれも想像でき
ないでしょうがね」
と先生が補足する。

「松江はずいぶん変貌を遂げました。ここ
で新しくできたきれいな橋を渡ったり、美
しい街路を見たりすると、十四年前の松江
の面影はもう認められないくらいです」

「そっかなあ……」

「そんな素晴らしいところに住めたことは
いつもとてもうれしく思っていたし、感謝
もしていたのです」

「新しい物を喜び受け入れながらも、伝統
的な物に対していつも敬意であり、祖先か
ら伝わった歴史的な遺産をも重んずるとい
うのは、国民の品格が深遠である証拠なの
です」

フリッツは瞳を今更るように生徒の顔を
見ながらゆっくりと説明した。

「この出雲地方には仮象の世界、それに近
づく一体化の精神の高まりと静かな調和の
世界がある」

「ヨーロッパから見たら、日本はずいぶん
遅れているのでしょね」

「いや、そっぴゃないんだ。松江のよう
に往古の記念を失わず、今に昔を伝えている
ことを言っているのですよ」

話が続く。

「日本には、今も風致を特徴つける昔なが
らの名所やお城、それに街の昔の姿がその
まま保存されているんだ」

「うーん」

「だってもすてきで好ましい街が各地にた
くさんあるんだよ」

「へえー」

「そっぴいよなあれ」

「高橋先生もそんなことをいつていたっけ」

「ヨーロッパで欠けているのは、この点だとわたしは思っています」

「カルシユ先生の先生であるハルトマン先生の影響ですか？」

「いや、ハルトマンだけでなくシュタイナーも同様の考えだと思えますよ」

「へえー」

みんなはふだん聞けないことに熱心に耳を傾けた。

「それにもまして、日本の自然の美しさです」

「そうだろうか」

「みんなと行動をともした遠足の途上、あるいはひとりで散策したり自転車に乗った時、私は繰返し繰返しその確信を深めたのです」

「日本は何と風景美の豊かな国だろう。山と海とのかくもみごとに融合している自然を見るのは、ドイツからきた私にはとくに意外な体験だったので」

「それは松島、天ノ橋又、宮島のよつな日本の名所奇勝のことをいっているのですか？」

「いや、そつではないのです」

「どこかおかし」

「私の眼前に彷彿するのは、特にこの大山

と三瓶山さんへきさんとの間の景色のあまりにも《知ら

れなや過あやかぬ》美しいのです」

「ドイツには、美しいところがないのですか？」



枕木山から望んだ大山 フリッツ自筆のパステル

「いやとんでもない。それは、それはとても美しい国です。でも、日本の美しいとは違ひのです」

「そう言えば、授業中にも何度かお話ししてくださいましたね!」

「この美しさは実際もつと有名になるだけの値打ちがあるのです。世界に誇るべき美しいのです。」

幾度となく枕木山の頂上に立つて夕日に映える陸と海とを瞰望し、あの印象深い平和な風景に見入ったことだろうか。

出雲国風土記の中で神名火山と呼ばれてた朝日山の山頂にでる。すると、眼下には宍道湖、東には中海から大山の、北東には隠岐島の眺望が広がる。

何にも替えがたい美しさを、今ここで思い浮かべながら、あふれる感慨をフリッツは生徒達に語った。

「この出雲の国の老木鬱蒼たる神社仏閣の美しさ……海 入江 島嶼……さては遙かに淡くかがやく隠岐の国の山々を配して青く透き通った日本海の美しさ。それはもう、何にも例えようもない美しいものなのです。」

といいながら、涙と共に感動に酔った。

「ドイツの友達に一度でよいかからこの絶景を見せてやりたい。そう思ったことが何度

となくありました」

話題が変わった。

「ところで、皆さんは秋に田圃道を歩いて農夫達が精出して働くさまを注意深く見たことがありますか?」

「いいえ、そんなには」

「こんなによく働く勤勉な人々を私は自分の国で見たことがないのです。見てるうちに、彼等の姿に尊敬の念が起るよつこになったのです。」

「そんなわけで、新興ドイツが農夫の労働

を重視しようとしている理由がわかったよう気がします。」

いつしか、先生の一人舞台になっていた。そして

「私がこのよつこに日本と人々をよく知ることができたのは、ひとえにおつき合いできたすべての友達のお蔭だと思っています。」と結んだ。

生徒も自分のふるさとを想いながら家路を急いだ。

内輪のプライベートな歓送会であった。

帰国

—

一九三九年の春になった。カルシュ一家がドイツへ帰国する。本当に日本とのお別れだ。思い出がいっぱいだ。

夕日に映える宍道湖をもう一度見た。もうこの夕映えも見ることがないかもしれない。そう思うと無性に悲しくなる。

桜の咲いた千鳥城の周囲を散策した。松江高等学校の先生方から、裏側に寄せ書きを入れた千鳥城の掛け物を贈られた。



松江駅での見送り(1939年春)

「みんなさん。ありがとつ。お元気でさようなら」

「カルシュ先生ありがとつ。達者でね」

「奥様、メヒテちゃん。それにフリーちゃん」

んもね」

松江駅で皆が見送ってくれた。

涙が止まらない。でも、お別れだ。

プレジデント・クリーブランド号で神戸からサンフランシスコへ向けて出航した。

「船って素敵ね」

「映画や音楽会。楽しいわ」

オークランドからシカゴまでは急行列車でいく。

「軌道が日本より広いのね」

メヒテルトが列車の窓から隣の線路を見てフリッツに向かって言った。

「だから、列車の安定がよく速く走れるのだよ」

フリッツが答えた。

窓外に美しいロッキーマウンテンが見えた。

ハンナ・フィン夫人の家に一週間滞在した。

フリッツの姉で結婚して姓がフツシエルベルガーとなったフリーデル伯母の親友だ。

その紹介で、ここで厄介になった。ここで見るものはメヒテルトには珍しいものばかりだ。

そこからニューヨークに行く。

何となくドイツに対するいろいろの険悪な雰囲気を感じられる。

ニューヨークからは船でブレイメン港に向かった。そこで列車に乗り換えてベルリンに住む親類へ会いに行く。

「ベルリンってどんな街かな？」

日の出の勢いの祖国の首都を見て、メヒテルトは感激した。フリーデルンはただ、はしゃいでいるだけであった。ベルリンの動物園につれて行ってもらった。

でも、両親の外出が多く、メヒテルトは取り残されて、フリーデルンの面倒をみる役目を負わされて、不満だった。

それから、ドナウ河の端緒に位置し、有名なドームを擁する古都ウルム^ウ、さらに森の美しいチューリンゲンのドロイスツヒ^スで母の妹のルーゼに会った。

一、二日滞在した後にかッセル^スで母の伯

母と、そしてまたライン河の近くのメモリンゲン^スでも親戚の人々と初めて顔を会わせた。とにかく、めまぐるしく場面を変えながら人と会った。

母は五人兄弟姉妹の長子である。ここから現在はポーランド領のプレスラウに行った。ここに、メヒテルトの父と名前が同じ叔父のフリッツ・アクセンフェルトが住んでいた。

プロテスタント教会のオルガニストで、母エンメラの直く下の弟である。

ユダヤ教会を焼き払つ光景をナチの兵士が街中の者に見せつけたとのことだ。

この旅行に彼は抗議をしないでいられたなかった。すると今度は

「つべこべ言つな。そんなに言つたら、次はおまえの教会の番だぞ。全部を焼いてやる」と

恐ろしい形相をした兵士からひどく脅かされたとのことだ。

ナチの行状を噂でなく事実として初めて知った。

しかし、カルシユ夫妻はまだこのころは上層部の考えや様子はよくわからなかった。

メヒテルトはエンメラの母ベルタと面会した。そしてポーデン湖畔のリンダウにある保養地の傍にある彼女のアパートに身を寄

せた。波静かなこの地で水泳を覚えた。場所はパートシャツヘン^スであった。

母と離れてメヒテルトはしばらくの間女学校に通った。キリスト教会運動の一環として建てられた学校である。シュウアルツヴァルトにある美しい小さな村のケーニクスフェルト^スのインターナート（寄宿舎）でちよつと寂しい、初めての生活体験であった。

この年も暮れて、クリスマスイブを迎えた。帝国陸軍から呼び出しを受けて、ベルリンに出かけていた父が祖母ベルタの家に戻ってきた。父母が居間で何やら小声で話していた。

「この日は聖なる夜を迎える。

「シュテイーレナハト、ハイリゲナハト（きよしこの夜、星は光り）……」

と歌つ。

皆で、お祈りを済ませ、静かに夕餉を済ました。

突然母から

「私たち、また日本へ行くことになったの

よ」

と告げられた。

事情を知らないメヒテルトがこれを顔面でおりに聞いた。

「わーい！バンザイ！」
あんまり喜んで、小さな人形柵に頭をぶつけた。

こぶができて、ちよつと涙がでた。でも嬉しかった。

傍らのフリッツは浮かめ顔をしていた。

新しい生活

—

朝六時になると、エンメラがやおらベットから起きだし、朝食の用意だ。ちよつと

越え、シベリア経由で満州に入った。

ここ交通の要所であるハルピンや新京（長春）、それに奉天のにぎやかな街中には日本人が溢れ、日本風の建物が建ち並んでいた。

日本人と会って、喜び勇んでわざわざ日本語を話す《外人》のメヒテルトに、みんなはびつくりしている。

それを見て、メヒテルトがにやにや笑っている。フリーデルンの手を引いた両親も傍らで微笑んでいる。

また日本での生活が始まったが、今度は前と全く違う様相だ。

勤務先は国会議事堂近くにあるドイツ大使館である。家族は横浜山手町の米国人のフ

体の節々が痛む。慣れないことが多い。いや、それより、不安からなのか。

一年ぶりに日本に戻ってきた。《ふるさと》の日本に戻ってメヒテルトは大喜びであった。

ドイツ帰国当時には、身分が一応予備役将校であったフリッツは戦場を避けたかった。彼と親交があったドイツ大使オット氏の仲介があつて、大使館付副武官として着任したのは一九四〇年になって間もないころであった。

カルシュ一家はフリッツの外交官特権を用いて、ベルリンから列車に乗ってウラルを

レイジャーの家に住むことになった。
 「ここ、横浜に居を決めてから、もうすっかりドイツ風の生活になってしまった。といふより、ドイツの生活の延長だ。
 松江ではどちらかというところ和風に傾いた生活であったのを思い出した。」

でも、こつした安寧な暮らしは永く続かなかった。といつのは、この年の暮れには日本はイギリス、アメリカと戦闘状態に入っていたからだ。
 翌年までは、何とか幸福の谷の別荘でゆくりと過すことができたのだが。

「メヒテルト、学校に遅れないようにね
 大森まで一時間ほどである。」

「行ってきます」

「行ってらっしゃい」

ベルリンの命令

—

「わたしも学校へいきたいわ」
 「フリーデルンは来年は幼稚園ね」

「フリッツ、今日の予定は？」

「ドイツの様子はどう？何かわかった？」
 「ウン」

返事に詰まることしばしばであった。

あの時の静けさが懐かしい。やすらぎがほしい。

「会いたい。生徒たちにも」

背広をきて電車に乗って出勤だ。国会議事堂周辺の大使館には電車を乗り継いで二時間ほどで辿り着く。そこで、毎日、自分の

「ドクター・カルシュ、オット大使がお呼びです」

「何か？」

長年の友人であり上司でもある大使に尋ねた。

「しかし、私は軍人なのだから……」
 彼は大使館付き副武官であった。

「今日は東条首相も訪ねてくる。軍司令官と参謀との機密会議があるのだ」

「あの生徒達はどつしたかな」
 「戦場に行ってるんだろつな」

「本国からの暗号電報の解読は済んだのか？」

あの頃の授業風景が臉のうらに浮かぶ。夢であったのか。幻であったか。

かつての生徒の噂が先生の噂を聞いて大

使館を訪ねてきた。暉峻は長くベルリンに住んでいた。以前から何かと付き合いがあった。彼の世話で鮎澤氏と親交を得ることができた。

やがて、敗色が濃くなった一九四四年には危険を避け、東京の成城にある鮎澤巖氏所有の和洋折衷の家に居住した。

「どうせ、使わない家ですから、お使いください」

平和主義者の鮎澤は、親米家でジュネーブの国際連盟派遣代表であった。戦後GHQと協力して日本の労働者の権利の法制化に功績のあった人である。

家は和洋折衷の大きな家で、その後部にはテニス場があった。洋式の部分は一九六八

年まで存在していたが、和式部分とテニス場の土地は高額な相続税のために売却されたという。

仕事が済むと精神的疲労でぐったりだ。毎日遅く家族の許に帰る。

「どうも、このごろ寝不足らしい」

「体に気を付けて。フリッツ」

二

一九四五年の春、あの時の松本昭少年が今では松江高校の二年生になっていた。戦局は日を追う毎に悪化していた。高等学校も閉校だ。

最後にただ手をふって別れた。あの普段の元気で快活な彼の振る舞いはもつ見られない。

この時期は既に、ドイツ戦線は総崩れになっていた。

寂しそうなドクター・シユヴァルベの後ろ姿が彼の思い出しすつと残った。

三

「昨日は東京爆撃だった。大使館はすべて破壊された」

「どうやら、ドイツも時間の問題らしい」

「ソ連が侵攻してくる」

生徒は砂鉄を原料とした出雲銅いずもどうの伝統を受け継いだ日立安来工場に移動することになり、もはや授業どころではなかった。皆の荷物は荷馬車に積んで運ぶ。生徒たちはその尻に乗って船着き場に向かいながら不安な気持ちでいた。

北田町の渡し橋のそばにさしかかると、ドクター・シユヴァルベの姿がたまたま目に入った。挨拶すると気がついてこちらに向き直った。

自転車にのっけてしばらく荷馬車と一緒に道を辿り同行したが、何の話もしない。重い空気が漂った。

「本国との連絡がとれない」
 「大使館の人々と連絡がとれない。わたしたちも疎開しなければ。エンメラ、支度をたのむ。もうおしまいだ」

そして四月、軽井沢の古い三階建ての家に住むことになった。これはもはや別荘としてではなく、疎開のためだ。やっと見つけたものだった。

その家は戦局を暗示するかのよつに倒壊の危機にあった老朽化したものであった。

ここが、日本での最後の住居になった。

五月になって、ドイツの降伏が報道された。

ドイツ人とのつき合いを避けるべく記事も載った。日本との連絡が破れたからだ。

「ドイツも信用できない」

「何だ、イタリアと同じだ」

「ドイツ人などと付き合つものか」

そんなとき、暉峻の母が訪ねてきた。

「こんにちば、カルシユさん」

「ようこそ、暉峻さん」

エンメラが答えた。

「ベルリンはいまごろ、ライラックがとてがきれいでしたわね」

何とも思いやりのある短い美しい言葉であった。

ドイツの敗戦を期に、日本人との交際が急速に薄れたこの時期の暉峻夫人の優しい言葉であった。

後年、メヒテルトが涙とともに語ってくれた。

い真つ盛り、アメリカの船で出発しナホトカに着いた。そこからはシベリア鉄道であった。

一九三七年に生まれたフリーデルンは十歳になっていた。学校で教育を受けることなく。まさに戦争の犠牲者であった。

「これから、ドイツへ帰るんだよ」

「ムテイ、お姉ちゃんよ」

「おじいちゃんがあるの」

マールブルクへ

—

日本もドイツも敗れた。何もかも失つての帰国であった。軽井沢から横浜港へあの暑

昨日知人を交えてお別れの会をささやかに催した。あらためて戦争が何もかも奪つたことを思った。

「でも、みんなが元気なら」

「わたしはシムと結婚するわ」
 「……………」
 「いまの仕事をやめてアメリカに渡りま
 す」

「わたしは連合国のために働いたわ。そして
 シティバンクでもいわば、アメリカの兵
 隊のためにはたらいてきたわ。きつと、わ
 たしの未来はアメリカにあるの。そんな気
 がするわ」

「アメリカにはいつ？」
 「ヒザが下りたらよ」

「メヒテルト、お父さんが日本にきたのは
 間違っていたのかな。こんなになるとは」

「わたしには、松江がふるさとよ。ハイム

マートよ。誰が何と言おうと、あの奥谷の
 官舎がわたしの家だったわ。思い出の一杯
 詰まった土地、何度もお城に登ったわね」

「いろいろなところに行ったね」

「エナちゃんはどうしたかな」

「戦時中アメリカに強制送還されたそ
 う」

「近所のふみちゃんほ？」
 話は尽きない。

フリッツはまた夢をみた。あの大山の姿で
 あった。夏に過こした大山であった。生徒
 の顔が浮かんでは消えた。遠い昔の出来事
 が夢のなかに現れては消えた。

「私は、何も失ってはいないんだ」
 突然口を開いた。

「今はすべてを失ったよつだ。そう見えな
 くもない。でも、こんなに美しい体験を胸
 につけて帰国するのだ」

「そつよ。お父さん」

「松江は戦災に遭わずにすんだらうか」

「そつね。どつしたかしら」
 エンメラが心配そうに言った。

「二人の子ども授かって、いま故国に凱旋
 するのだ」

フリッツはそつ自分に言い聞かせた。

一家は強制送還時になっても、ソ連の影響
 下に置かれたドレスデンを最終的な居住先
 としては選ばずとなかった。

彼は、エンメラとの思い出の地、そして自
 分の生涯を決定する第一との運命の出会い
 の地、自分の学問を育んだハルトマンとの
 出会いの地、マールブルクを選んだ。

ここでは、カルシュ夫妻が戦前から信奉し
 ていた自由ヴァルドルフ学校の復興も予定
 されている。シュタイナーの思想を基にし
 た、戦時中には禁止されていた学校であっ

た。

ブレイメン²⁸に着いた。ハンザ同盟²⁹の伝統を今に引き継ぐ千二百年の歴史をもつ古都である。

十九世紀はじめに整備された港湾に船が着いた。長い旅であった。

屈曲した堀とヴェーゼル川に挟まれたその辺りが市街地である。

広場には剣と楯をもつ街の守護神の中世の騎士ローラン像が立っている。

聖ペトリ大寺院が十五世紀のゴシック様式の市庁舎の隣にそびえている。その西門にはグリム童話の『ブレイメンの音楽隊』の像が立っている。

フリーデルンが一番下のロバの足に触れた。

「わー、つめたい」
四頭の動物を順に眺めて、ひとり無邪気によくこんでいる。

かつては煉瓦造りの美しい建物で満ちていたこの地は引揚者で溢れていた。難民キャンプだ。

もはやかつてのドイツ人の誇りはなかった。着の身着のままの惨めな生活であった。しばらくは、ここで暮らすことになった。

やがて、連合軍の指示とフリッツらの希望に沿って、カルシュ家一行はこの古都を離れ、ドイツ四大学街のひとつのマルブルクに向かった。

戦災にあつて荒廃した街並みではあつた。

が、もともとドイツメルヘンのゆりかごとよばれるほどの美しい街である。

小高い丘にはお城が聳え、遠くからの眺めはしばし時の流れを忘れさせてくれる。

そんな落ち着きのある街である。

「ここが私達が出会った街だよ、フリーデルン」

「きれいな街ね。グリム童話のふるさとね」
このヘッセン州は昔話や伝説の豊富な民話のふるさとである。

彼等は戦災を免れたアパートに入居した。アメリカのフォード財団の援助で戦争で中断された若者の教育が始まっていた。その教育に携わることはすでに決まっていた。

これで家族の生計を維持することができる。

やがてこの地で生活基盤を整えたフリッツはボンの日本大使館と接触したり、学生時代からの友人で、大学教授であったハイラー博士を通じて、戦後宗教学者としての三笠宮崇仁殿下との親交をもった。

一九六〇年の日本週間中、九月十三日に催されたマルブルクの同殿下のパーティにフリッツが招待された。招待状はハイラー博士を通じて彼の手許に届いている。

三

フリーデルンはこの街で、成長することになった。シュタイナー学校として、後に日

本でも設立された自由ワアルドルフ学校。
に通った。

「この学校はヒトラーの時代には禁止されていた学校だったのだよ」

フリッツが言った。

「私達はどんなにかメヒテルトにもこうした教育を受けさせたかったか。でも、それはむりだったわね」

とエンメラが言った。

そして、時はながれた。

一九四九年結婚してアメリカに渡ったメヒテルトはその生活に馴染めず、やがて離婚した。一九五四年であった。

失意にあつた彼女が巡り会つたのはヘルベルト・セイント・ゴアであった。それから

半年後の九月に結婚した。結婚生活は幸せであつた。

彼はハンプルク出身のユダヤ系ドイツ人で一九三八年当時、ナチの迫害から逃れてアメリカの親戚を頼つてきたが、不幸にも皆冷たかつた。

親切なひとに店の手伝いをさせて貰つての生活であつた。やがて彼がこの店を大きくし後継者となるのであるが、とにかく無一文から始めたすぐれた実業家であつた。

四

フリッツは自分が日本で書き綴つた書類を眺めては思い出しながら、また、思いつくままに何かを書き入れた。もつ書き入れる

余裕の無いほどぎつしりとあのヒゲ文字で埋まつている。

週末に顔を見せた娘のフリーデルンがそれを覗いてちよつと茶化して言った。

「お父さんったら、またそれなのね。どうしてそんなに」

彼女は全寮制の自由ワアルドルフ学校からマールブルク大学のシュテュデントエンハイム（学生寮）に入り、ずっと別に暮らしていた。

「わたしはフリッツの気持ちがよく分かるの」
母が父を庇つよつに言った。

「それにこんなに古いもの。これなー」
「メヒテルトがここにいれば、だれよりもお父さんの気持ちがわかるのに」

「わたしは、もつ日本のことはおぼえていないの。でも、ほんとは、想い出したいのよ。だから、わたしはお姉さんの分まで、勉強したいの。どつやら地理学を専門にできる見込みだわ。ネーベンファッフ（副専門）も大事にするわ。国際政治学は関心事よ」

「おまえもやはり、生まれた土地と時代に無関係じゃないんだね」

「メヒテルト姉さんがいろいろ教えてくれ

たのお母さんからよく聞いてるのよ」

五

そのメヒテルト姉さんからは何度か手紙が来た。その頃はもつアメリカですっかり生活基盤もできて、長男エドワードがすくすくと成長していた。愛するひとの子供を抱きながら、自分の父と母の愛を思った。子供が二歳になった。

二人めの子供が生まれる。

「是非、ヘルベルトとエドワードに会いたい」

そういつてフリッツがアメリカに来ることになった。一九五七年だった。

ニューヨークまでの船旅の後、鉄道でテネ

シー州チャタヌーガに着いた。すぐエリザベートが誕生した。

「かわいいな。メヒテルトにそっくりだ」

二ヶ月間滞在した。その間にスモークーマウンテンやインディアンの墓を訪ねてみた。ヘルベルトが案内した。二歳のエドワードも一緒だ。

祖父フリッツの名を聞いて、

「ポム・フリッツ」といつて小さなエドワードが面白かった。

当時、フレンチ・フライを発音の似ている原語の「ポム・フリット」(pommes frites)と同じものと勘違いしてのことだった。

きずな

一

これより二年ほゞ前のこと。

フリッツが日本から戻って八年後の夏、ペーリング・ヴェルケ社を訪れるためにマールブルク中央駅に下車した国立予防研究所の多ヶ谷青年がいた。

列車の時刻表を見ては、腕時計を眺めて、駅でうろつろしていたら、

「日本の方ですね」

と上品な初老の人から日本語で声をかけら

れた。

抱えていた風呂敷包みがそう判断させた。

偶然であった。フリッツが夫人と一緒に、

休暇で旅行する娘のフリーデルンを駅まで見送りに来たところだった。

「是非、お立ち寄りください」

そう誘ってくれた。

会社の見字を終わって、カルシュ夫妻の住まいを訪れた。

「ご飯を炊きましょうね」

わざわざ炊いてくれたご飯を馳走になった。いろいろ日本のことを語りあった。

夫妻は大変日本を愛している。

「是非もつ一度行ってみたいが、この年令ではもう雇って貰えないからな」

「上の娘は既に結婚しました。私達夫婦だけで静かに暮らしていますよ。この頃はマールブルクにも日本人が何人が滞在していて、時々私達のとこに來てくれますのよ」

帰国後若きこの医学者を待っていたのは、日本国中で猛威を振るうポリオの対策であった。

二

戦後の復興も一段落した一九五七年五月に、

かつての教え子の梶川が日本から訪ねてくることになった。明日がその日である。

本棚からアルバムを取り出し、ページをめくった。アグファ社のカメラで撮った昔の松江の風景だ。生徒の顔が見える。戦争で亡くなった生徒のことを風の便りで聞いた。

外貨への交換が法的に自由にならないので、窮屈な旅行であったとのことだ。

「先生、二十七年ぶりの再会ですね」

「そう、神のお恵みです。感謝しますよ」

「何とも素晴らしい石畳。何と美しい古城

の縁。それにテラスからの眺め」

「先生、三十年の昔が偲ばれますね」

「日本は素晴らしいところだった」

「それにも増して、想い出深い松江の生活だった」

「一晩、ここで過ごした彼が翌朝、暇を請うた。」

「先生、御世話になりました。先生のご健康をお祈りします。さよなら。また、お邪魔します」

翌年十月にはかつての陸上名選手で、今は小倉市立病院副院長の田村忠雄が訪された。

「先生、お久しぶり」
涙ながらに再会を喜び合った。三十年振りにカルシウム妻に会って

「先生、あの菅田ヶ丘を想い出します」
感涙にむせび目頭を押さえた。

想えば、高等学校の近くにある、松平不昧公が創らせた茅葺きの山荘茶室の菅田庵を訪ねたものだ。

先生と一緒に前庭のつつじを眺め、大橋川を遠く見た。そして、あの見事な借景の奥深い風雅を賞でたものだった。

「級友三人からあずかった心からのお土産があります。どうぞお受け取りください」

「いや、どうもありがとう。田村さん、ほら、ここに梶川さんの署名もありますよ。」
ゲストブックをエンメラから受け取って指し示した。

「田村さんも書いてくださいな。」

筆を持った田村は友人からの伝言と昔の思い出を綴った。

三

二人の孫に会った満足感に浸ったフリッツがアメリカから帰国して数年たった秋のある日の夕方、食事の後のこと。

「どうもこの頃、からだの具合が良くない。」

「医者は何と？」

「……わしも年令だな。」

病気のために一時床にふせっていたフリッツを見舞いに、週末を利用して家にフリーデルンが立ち寄った。

「どうだい、勉強は？」

「順調よ。来年は卒業も大丈夫よ。いそがしくて、家のこと十分にできずごめんなさい。」

「いや、わたしがいるから大丈夫。でもこのごろ、年齢を感じるわ。」

とエンメラがため息をついた。

「どうとつ、わしらも年金を貰える年令に

なっていました。」

とフリッツがさびしそうに付け加えた。

「そろそろ、私達は養老院にでも」と、苦笑しながら言った。

「お父さん達、この近くのカッセルが良いのでは。カッセルはキリスト共同体の古巣だし。」

グリム兄弟が三十年暮らした、かのカッセルの地はメルヘン街道のほぼ中央にあたる芸術を愛するカルシユ夫妻にとってふさわしい土地である。と娘は思った。

「でも、もうしばらくへ。」の地に「とフリッツが言った。」

「そう。もうしばらくね。ここは、私達の出合いの街なの。」

「うん、大切な出発の街なんだ。フリーデルン。」

と言い添える。

「わしも今日は調子が良いな。だいぶ元気になった。」

「フリッツ、きょうはパーティにしましょう。」

エンメラが娘の方に顔を向けながら、

「おまえの将来も見えてきたしね」と続けた。

「生活もまあまあだしね。」

「そつだな。フリーデルン。」

「じゃ、わたしは台所を手伝うわね」
 「さて、材料は？」と、「っ」
 声が弾んでいる。
 「ほら、そこに」
 「二人はとりとめのない会話を楽しみながら、夕餉の支度に取り組む。

「さあ、できたわ。食べましょう」
 父に椅子を引いてあげた。フリッツが微笑んだ。

「それでは、乾杯！」
 祝杯を挙げた。

その翌日、フリッツは自分がかつて日本で撮った写真を取り出して見て、また静かに

思い出に耽っていた。

フリッツは、現役を退くことを決心した。戦前からの日本での公的な教師としての職業、外交官としての勤務、それに戦後の成人教育への貢献が年数とともに認められて、年金の受給が決まったのだ。

えにしのわ
 縁の環

—

加納は大阪大学の奥野研究室で研究していた。研究のためにフンボルト給費生として

留学することになった。

奥野は彼をマールブルク大学のジイーゲルト教授に紹介した。

「加納さん、そのまちはカルシユ先生が住んで居られる」

幾度となく奥野から聞いていた。

一九六一年三月の初旬、初めてマールブルクの地を踏んだ。

その前に美しい中世のお伽噺にでてくるような街ローテンブルグのゲーティンステイトゥート^⑧で二ヶ月の語学研修を終えていた。マールブルク大学に到着して間もなく、日射しの柔らかいこの日にこの街を訪れた。

衛生学教室で早速研究をはじめた彼は恩師奥野の言葉を思い出した。

「カルシユ先生を是非お訪ねするように」
 そう出発前に云われていたので早速に手紙を書いた。奥野の旧制松江高校時代のドイツ語の先生であったことを聞いていた。

カルシユ夫妻の家はマールブルクの城に近く木立の多い閑静な住宅地の中にあつた。どっしりとした煉瓦造りの家で隠者の住まいを思わせる雰囲気であつた。

先生は堂々たる偉丈夫だが、見るからに柔和な温厚篤実な印象であつた。また、夫人は穏和なやさしいひとで彼の緊張した気持ちにはたちどころに氷解した。

「ドイツ語はゲーティンズタイトワートで勉強したそうですね」

「あの、ロマンティック街道の、それは美しい街、ローテンブルク⁶⁰にいました」

「ほつ、ローテンブルクですか」

「たまたましいドイツ語に合わせ、分かり易くゆっくり間をおいて色々なこと話してくれた。」

「お住いは？」

「ドイツの気候は？慣れました？」

と心配する。遠い異郷から遙々勉強にきた学徒を慰める言葉。自ら異郷にいて、とく

に松江高等学校講師の時代にフリッツは格別の懐旧の情をもっている。言葉にそれが感じられる。

「そうですね。そうですね」

かつてと同じ二度の相槌であった。フリッツもエンメラも松江の静かなたすまいや人々の純朴な心をこよなく愛していたのであった。

ドイツの街を巡ってみると、聞いていたとは違って、大戦時に荒廃した街は殆ど戦前と同じよつに復元されていた。

マルブルクもハイデルベルク⁶¹と共にドイツの美しい大学街として殆ど戦前のたすまいを取り戻していた。この地は、古く

から多くの神学者や哲学者を輩出しており、グリム兄弟もこの大学で学んだ由緒あるところである。

古い家具に囲まれた客間の書架から何冊かのスケッチブックを持ってきた。現在の日本では見ることでできない美しい日本の風景画の数々や、また、松江の人々の日常的な暮らしの様子が数多くスケッチされていた。

「先生、いつ描かれました？これはどこですか？」

残念ながら、加納には松江の地理はあまり馴染みがない。

この時に交わした会話のなかで、フリッツ

の心の純粹さ、やさしさは例えようのない感銘を彼に与えた。

美しい松江でカルシュ先生とともに多感な年代を過ごした松江高の卒業生に思いを馳せながら、

「先生に教えをいただいた生徒は幸せです」

とエンメラにささやいた。

さて、カルシュ夫妻といろいろと楽しい話をした後の夕食は市内のレストランでのご馳走だ。食後の散歩は商店街をウインドウショッピングしながらだった。先生の話が続いた。

「このカメラは日本製、このテレビも日本

製ですよ。」
日本製の電化製品がたくさん並べられている。
戦前、珍しい最新機器を日本にもっていったことを思い出しながら、シヨウウィンドウの前で何度か立ち止まった。フリッツが指し示しながら、日本の発展を褒め、わがことのように喜んでくれた。

二

ここは再び大阪大学の奥野教授室。助手に学術発表の指導を終えたところである。「先生、指導ありがとうございました」そういつて一時間半にわたる指導を終えて

教授室をでていった。

そのことは聞いて、また、『有難うさん』を言っているカルシュ先生を思い出した。高校に入ると、すぐ教わったカルシュ先生のことだ。ドイツ語の難しさと先生の巨体に圧倒されて、どつにも不安だった。でも先生の温顔と愛情が伝わり、間もなく楽しい授業に変わったことを走馬燈のように思い出した。

もう、五十年以上前のことである。

「イッヒヴァイスニヒトヴァスゾル
エスベドイテンダスイッヒソウトラ
ウリッヒビン。アインメルヘン
アウスアルテンツァイテン……。
(なじかは知らねど、こころわびて昔のつ

たえぞ、そぞろ身にしむ……)」
口を継いでドイツ語の歌が出てきた。教わったドイツ民謡のローレライとともに、蘇る高校生活を思った。

高校を卒業してすでに二十四年たった。その年の末のこと。ジーゲルト衛生学教授と研究打ち合わせのために、マルブルクに行ったことを思い出した。

カルシュ先生が駅までまっすべ会いに来てくれた。

「奥野です。お懐かしい」

昔の先生と少しも変わっていない。

翌日、気やすく市内各所を案内してくれた。

大学の教師や学生もよく来るといふドイツの雰囲気も最もよく味わえるレストランで御馳走になった。
そしていろいろ昔話や、松江のことが話題となった。

「高雷さんは……小林さんは……どうしていますか」

懐かしそつに聞く。食後は市街の案内だ。各民家の門口には建築の年号が小さい数字ながら明瞭に刻まれている。

「これは、千七百何年ですよ。あちらは千六百年代のものです」

マルブルクは城や立派な教会のある古い由緒のある都市であることを丁寧に解説する。

「先生はここで静かに余生を送られている

「ここは静けさで安らぎにふさわしい所だ。奥野はそう感じた。」

夕刻になった。

「駅までお送りします。」

「おみやげをもってどうじゃい。」

中にはクッキーなど多種類のおやつが入っていて、母親が可愛い子供に旅をさせる時に渡すようなやさしい心遣いだ。

教授室にノックがあった。

ドアが開いて、秘書が入ってきた。

我に返った。

「先生、コーヒードですが」

「うん、ありがとう」

秘書が今し方入れてくれたコーヒートを飲みながら忘れることのできない思い出に奥野は浸っていた。

あの別れ際のウィダーゼーエン（再会）を願っての言葉通り、再びお目にかかれることができればよいが、と思いながら車中の人となったのだった。

三

ドイツでは五月は最も美しい季節で、

《たえに麗しきバラの月》といわれる。

一九六七年、再びドイツにやってきた加納

くさん残っている。

「フィッツシャー先生をこ存じですか？カルシユ先生」

加納の所属する教室の教授の話が出た。

「よく存じ上げていますよ。戦後は、ドイツに帰られ、在日中は日本美術の愛好家、収集家であったことを知っています。」

「ドイツでは日本博物館を経営されておられます。経営が苦しいので、日本の企業の協力を願っています。」

そんなやりとりがフィッツとの間で行なわれた。対照的な性格であったが、両人とも熱烈な日本の愛好家であることは確かだ。

夫妻が各地で素晴らしい時を過ごすことができた。

六月になって二人でカルシユ宅を伺った。

するとエンメラが日本の古い羽織を着て応対してくれた。日本を去るとき友人から贈られたものだ。庭の珍しい草花などを一々丁寧に説明する。

先生の心からの歓待に、二人は大変な感激であった。四人でマールブルクの町中の石畳を散策し、それから城のふもとの見晴らしのよいレストランに赴いた。そこで一馳走になった。

郊外に出るとグリム童話を思わす情景がた

加納はそう思った。

四

この時期は、眼科学の第一人者として、増田は久留米大学教授を務め、日夜後進の指導で忙しい毎日であった。

この年久留米大病院院長に就任した。医療の要となる責任の大きな仕事だ。約三ヶ月にわたって、主な先進国との学術交流のための旅に出る任務を与えられた。

増田の胸が子供のようにときめく。

「もしかして、カルシユ先生に会える」

増田はかつての卒業生で一年生からカルシ

ユ先生に教わった人だ。

彼はこの機会を是非にと思って、懸命に旅行案内書を読んだ。入学したての頃に青いヒゲ剃り痕が印象的なカルシユ先生に対面したことを思い出した。大正十五年のことであった。

まず、ハンブルク経由でフランクフルトについた。ドイツの空の玄関、最大の空港だ。神聖ローマ帝国皇帝の戴冠式の伝統があり、ゲーテの生誕の街でもある。

レーマ広場には皇帝の大聖堂と呼ばれる大きな建造物がある。中央駅の近くのホテルに数日滞在する。

同行者とは別にフリッツの住むマールブル

クを一人で訪ねるつもりだ。したがって、

この日はみんな自由行動だ。

「しかし、心配だ」

ドイツで初めての汽車の旅だ。

「どうにも、心細い」

若い助手に教えられた通りに、

「ヒンウンントリックファールト ナーフ

マールブルク」

と窓口で云って、フランクフルト・マール

ブルク往復切符を手に入れた。

コンパートメントからなる客室の窓際に腰

を降ろす。窓外の平坦な田園の広がりが見

しい。景色が流れる。約一時間で目的地に

着いた。

この日は加納夫妻がカルシユ夫妻を訪ねて

きた翌日にあたった。全くの偶然であった。奇遇であった。

「やー、増田さん」

フリッツが晴れた空のもと、マールブルク

駅頭で自ら駅の改札口まで出迎えた。

二人は感激の握手を交わした。

「先生、お懐かしや、増田です」

七十二歳とは思えない。お元気だ。と増田

は医師の眼でそう判断した。

美しい古城の辺りを共に散歩し、昔の思い出を語り合った。宗教の聖地を象徴するエリザベート教会や大学の病院を外側から案内してくれた。

清楚なフリッツの住む家に着いた。昨日に引き続き、エンメラは羽織を着て増田を迎えに迎えた。

「そつそつ、加納さんを紹介しましょう」

「こんにちは、増田先生、加納です」

「初めまして、増田です。よろしく」

日本茶のもてなしを受けた。室内の飾り物が、すべて日本式であり、掛け軸などをかけて、細かいところまでの気配りに、増田は感縮した。

このとき、彼は遠く自分が九州帝大の医学士の頃に眼科学の権威のアクセンフェルト

教授が日本を訪れ、各地で興味深い、講演をしたことを思い出した。あの人こそ彼女の伯父であり、同行した息子のヘルムートは従兄であったのだ。

「実は、従妹のエディット²はピアノとチェンバレン奏者なのよ」

「日本人にもお弟子さんがいるのだが」

《何という、不思議な人の縁か。》

人の縁の不思議さを信じる増田はひたすら感涙にむせんだ。

団欒の後、みんなで一緒に、散歩がてら古城にふたたび登り、フリッツが若かったときによく行ったガストシュテッテで典型的なドイツ料理をご馳走になった。特製のシュニツェルとマッシュルームに舌鼓をうつ

た。しかし何といてもビールの味が格別であった。

「懐かしいな。日本、松江」

話の中で、先生が是非もう一度日本に行きたいという熱望をもっていることを増田は言葉の端に感じ取った。

夕方、四人の見送りを受けて、低いホームから乗車口の取っ手を掴んで列車に乗り込んだ。手を振るみんなに別れを告げ、無事フランクフルトのホテルに帰った。

疲れた身体をベッドのつえに横たえ、今日一日の出来事が快い響きをもって彼の

眼前に蘇る。

「よかった。本当によかった」

今日訪れた住まいの様子がカルシユ夫妻がどんなに日本を愛しているかを改めて識ることができた。

やがて、増田はやすらかな寝息をたてはじめた。

満足感でいっぱいであった。

ームだ。
ホームはハンシュタイン通りにある。その名はアルベルト・コルベ・ハイムである。百メートルほどの石畳を経て赤十字病院と小さな公園がある。二人は連れだってよくこの辺りに散歩にでる。

部屋は一階である。こじんまりとして、日当たりの良い部屋だ。ライフワークの東洋哲学史の研究に専念しようとした。彼の研究は哲学史と人の意識の進化に関することである。



1967年創立のカッセルの老人ホーム
(アルベルト・コルベ・ハイム)

年金生活

一

「先生が訪日を執望しておられる」
ある日、同じ製薬会社に勤務する松江高校出身の友人に加納が伝えた。そこから同窓生に話が広がった。みんなの賛同を得て、「ならば、何とかしよう」ということで、それが実現のきつかけとなったのであった。

一方、カルシウ宅を訪問中に、もう一度日本に行きたいとの執望を、言問に感じとった増田は、帰国するやいなや先ず松江高校

同窓会福岡支部と本部にはかり、同窓会誌にもその旨を載せて、全国的な運動に盛り上げた。
「先生を是非お迎えしよう」

その結果、同窓会理事で、島根県立図書館に勤める田村清二郎が中心となってこの運動を推進することになった。漸く軌道に乗った。そして、翌年の十月を期して、みんなで日本を迎えることに決めた。

すでに年金生活に入っていた彼はこの年にカッセルの老人ホームに移った。今年になってキリスト教共同体が造った夫婦でも共同空間に個人の部屋を持つ施設だ。介護の必要度に応じて費用も異なる介護付老人ホ

天気の良い午後のひととき、ちよつと遠いが一人で散歩がてらにヴィルヘルムスヘー工公園を訪れる。あまりにも巨大な敷地なので、ベンチに腰を下ろし遠くを眺める。ヘッセン王国の首都の栄華を今に伝える華麗な城が調和の美を呈している。

ヘッセン公カールによって十八世紀初頭に着工されたこの公園はヘラクレスの巨像と噴水や滝の水の流れが壮観だ。何百種類もの樹木が周りを包んでいる、その名が示すとおり大規模な丘陵公園になっている。

この一角でフリッツはゆつたりと一人思索に耽る。

彼はスイスのバーゼル²⁶に近いドルナッハの『ゲーテアナム』²⁷にときどき出かけて

そこで人智学の研究者と交流した。

彼は日本を離れるときに大事に持ち帰った古代の哲字から始まる一冊約四百頁余のフアイル三千七冊を眺めては、これまでに何かと書き加えてきた。彼の意図は有史以来人の思考の変化の追求であった。

彼が学んだ神道や仏教哲学へ想いを馳せた同時に、彼はシュタイナー哲学のカント哲学との関連を、これまでの自らの学問や内的修練と生涯を省みながらいまなお真剣に考察するのであった。

これより少し後の七月には、ボーデン湖畔に住んだヘルマン・ヘッセをこよなく愛し

自らも彼と親交のあつた藤野がフリッツの許を訪れた。

彼はあの宍道湖とボーデン湖²⁸をいつも重ね合わせて考えていたし、改めてその思いをフリッツに語りかけたかった。

カッセルに「晩宿泊し、かつて同僚だったフリッツと松江の想い出を語り合った。

「先生には、松江を去る時に、別れの言葉を翻訳していただきましたね」

「そうそう、そんなこともありましたね」

「あのころは、みんな何も知らなかった。知ることができなかった」

「ナチのことも、日本軍部のことも」

「もつ、遠い昔だ」

「なんだか、夢を見てるようです」

故国に帰っても、自分の力に見合った仕事に就けなかったことが感じられる。藤野はフリッツとの会話の中でそう感じた。

「生徒達が先生の日本招待のために、いろいろ準備していますよ」

「知っています。ありがたいとおもっています」

「きつと、つまぐいませますよ」

「そう願っています」

「かならず、また、松江でお会いしましょうね」

と互いに約束の言葉を交わした。

明けて、一九六八年二月の七十五才の誕生日に、フリッツは嬉しい日本への招待を受け取った。この上もない歓びであった。涙が溢れ、嬉しさに身体が震えた。

ツツはアメリカ在住の娘のメヒテルトを同伴している。妻のエンメラは健康が優れず、一緒に来れなかった。

東京 松江 岡山 広島 福岡 長崎 大阪 東京 軽井沢と廻り、十月末に日本を離れるまで、約一ヶ月間滞在の予定になっている。

来日と再会

—

明日には、日本で懐かしい人々に再びあえることになる。飛行機の中で、何度も仮眠をとった。フリ

東京についたカルシュー一行は、歓迎会の後で飛行機で松江を訪れた。この後は岡山の名所や広島原爆の痕など各地を訪ねることになっている。年齢を美しく重ねた一人の婦人がいつもフリッツの傍にあった。娘のメヒテルトだ。でももはやあの松江時代の子供ではない。

長いこと使ってなかった日本語が蘇る。二人は、何処に行っても目を見張るばかりの光景に感動した。

博士には講演が予定されていた。これに先立ってこの日の午前中、母衣町の松江赤十字病院を見学した。

「ここにちは施設や、職員の働き振りを興味深く眺めている。」

ふと、健康のすべれないエンメラのことを思い出した。彼女が来てくれていねばどんなに楽しかった。

《もう四十年以上も前のことになる。》
とフリッツはぼんやりと考えていた。

「お父さん、ほら患者さんが挨拶しているわよ。」
「あつ、失礼どうも！早く良くなってくださいね。」

午後一時過ぎになった。博士訪日の実現に奔走しながら、その実現を前に不慮の事故で亡くなった同窓会理事の田村の墓参をした。

「田村さん、ありがとうございます。あなたのお陰です。」

フリッツはメヒテルトとともに石橋町の市営北墓地で花束を捧げ彼の冥福を祈り、訪問実現の感謝の言葉を述べた。

「安らかに、静けさを、永遠に。」
そして、フリッツはついに、西川津町の思

い出深い地にやってきた。現在の島根大学
 になっている旧制松江高校を目にした。
 もつ、かつての学校の姿はない。
 「私の思い、私のすべてを懸けた日本との
 交わりの要であった」
 事務室として使われているかつての教官室
 に入った。懐かしさで胸が熱くなる。昔の
 姿をとどめる本館や中庭を散歩した。こら
 えていた涙が溢れる。

この講堂で『回顧と展望』と題した講演を
 行なった。

「ツエルストメヒテイッヒイーネンフ
 ユアイレアーレンベミューウンゲン
 ベダンケン、ダスイッヒアインゲラーデ
 ンウルデ」

「何よりもまず、こつして」招待いただいた
 た皆様の「苦勞に感謝いたします」
 メヒテルトの通訳によって講演が始まった。

約二十分の講演であった。講演が終わった。
 割れるような拍手であった。フリッツもメ
 ヒテルトもハンカチを取り出し、目頭にあ
 てがった。

講演のあとにはかつての生徒達と共に記念
 写真の撮影が待っていた。そして、記念祝
 賀のための席に戻って乾杯をした。

同時に同窓会の全国総会が開かれ、メヒテ
 ルトも『野バラ』を独唱して喝采を受けた。
 かつての生徒達も校章を染め抜いたはちま

きを締めて当時の学生歌『青春の歌』を合
 唱した。

目もほろほろと桃色の
 春のくも行く大空を
 仰ぎて立てる若人に
 青春清き花の影

あいの若く日はなる
 日々はゆるゆると
 永遠の空にほほく
 行方は知れず霞かな

いそよそ遠く畑は落ちて
 四方の山脈をわたる
 夕日空をみちみちの
 舟は海への思ひのつ

次の日のこと。楽しみにしていたのに、こ
 の日はあいにく雨模様だった。

先生の想い出深い枕木山にみんなで行く予
 定だった。これを変更して、カルシュ先生の
 の団欒を主にした歓迎会を料亭ですること
 にした。

「先生お疲れじゃありませんか」

「ちよつと疲れたかな」

少々疲れ気味の先生に、休憩を願おうとい
 うことになった。

広間に、先生とメリテルトの歓迎で旧知の関係者と、何かを期待している人々が集まった。

そのなかの一人で、枕木山麓のお百姓である安達は、この日の枕木山行き世話役をするはずだった人だ。家の天井にぶら下げて置いた山駕籠やまがしこを降ろして、丁寧に点検

先生を駕籠で寺まで担ぐと張り切っていた。

「残念だ」

と言いながら、二二に集まった。

「この椎茸とぎへんらげはおひの自家製だ。こげなも口に合うかのう」
「こげなも口に合うかのう」といって、食膳を賑わしてくれた。

それぞれ自己紹介がすむと、待っていたとばかり、この料亭のおかみさんの義太夫節である。

「東西、東西、ただ今より、お耳に入れまするは、三十二間堂棟木の由来、平太郎住家の段、木遣首頭、相勤めます……………」
拍子木を入れての口上だ。なかなかのものだ。

「テンテンテン」

と太鼓が響く

「早や東雲つゆの街道筋……………」

とはじまると、佳境に入り、そしていよいよ最後を迎える。三味の調子が派手におさまり終わりとなる。満座の拍手……………」

つづいて、三味の調子が突然変って、安来節になった。待っていたとばかり、かの安達が、声をほり上げてうたった。

おっしんおっしん

よばんたよばんた

やんまこたやんまこた

おんたよばんたおんたよばんた

ダンテダンテダンテ

お家芸の声明せいめいの節まわしが、「この字余りの安来節にびったりだ。声明は日本歌曲のいわば元祖だとみんなが思っている。

次に、目録節、しげさ節、関の五本松と、

この土地の民謡が続いた。

そのあとには誰やらが、自作の唄を歌う。

来し方をたはらばら草枕

旅をこに行けばやまな

つゆのうはまの花咲く

というこの唄の特異なメロディーはメリテルトの心を強く引いた。

「メリテルさん、唄を歌いませんか」

酒井は持って来た童話集を取り出して、頁をめくった。幼時のころ、きくと歌って覚

えているにちがいない。
果して、嬉しそつに話に乗って来た。
「ちよつと、酒井さんそれ見せて……」

「待つて。今さがすわ」
思い出の歌をさがしあてた。

てんてんちやうてんちやう
てんてんちやうてんてん
てんてんちやうてんてん
てんてんちやうてんてん
てんてんちやうてんてん
てんてんちやうてんてん
てんてんちやうてんてん
てんてんちやうてんてん

喝采だ。
ついで彼女は

「京の五条の橋の上、大の男の弁慶が
長いきなた振りかて……」

とを歌った。
そして、調子づいたように

「青目をしてたの、人形はアメリカ生まれ
のオナキ……
わたしが、いかにか……」
を続けて歌った。

この後、どいつは、はみか、二人を囲んで
の話が、ちやむずかしくなった。

「いや、いま若者の教育がどうもいただけ
ませんな。心をつくして努力をしないと」
と誰かが言った。最近の若者の風潮に批判
的なその座の人々が振り向いた。

「この頃の若者は、何でも知っているが、
本当のことがわかっていないようだ。ドイ
ツでもそうだ」
と、ついついフリッツが引き込まれる。

「これはアメリカでも同じですね。若者教
育のこれからの問題ですね」
とメヒテルトも同じ意見だ。

そのうち、根底は幼児教育からということ
になった。

そこで、島根大学の竹原教授が質問を発し
た。
「ヨーロッパの幼年教育では、芸術をどれ
くらい重視して取り入れてありますか」
人智子とシユタイナー、それに自由ワアル
ドルフ学校を念頭に置いた質問だ。

「今日は、むずかしい話はしない約束でし
た」
と誰かが笑いながら言った。

三

福岡支部の世話係は、十月十四日には博多
駅の近くに参集していた。増田らが一人を
出迎えた。夕方まではまだ時間の余裕があ

る。少し休んでみんなで町中を歩いた。
この地にあつてフリッツは遠く日本の文明の発祥と大陸との関係を想つた。出雲や北九州と中国との関係だ。

この地は十三世紀後半に、隣国の高麗から対馬、吉岐を経て、元(蒙古)のフビライが攻めようとした縁の地であると増田が傍で説明した。

これを聞いたフリッツはヨーロッパの大部分を支配した蒙古の襲来が日本をも国難に陥れたこと。

さらに、それに対応した若かりし、時の執権北条時宗が国論をまとめて、戦いに備え

たという鎌倉幕府の歴史を思い出した。そういえば、かつて学んだ鎌倉仏教がその頃隆盛を極めたのであつた。当時の社会不安のなかでの親鸞、道元、日蓮ら高僧の教義とその布教の様子が臉に浮かぶよつた。

万物に生命を感じ天地の自然に生きる。そうした生命の基礎に立つ神道の精神と仏教が融合した日本独自の神仏宗教の重みを哲学者のフリッツが思い返した。

自然と心が融合した美しい宗教は高邁な精神性を生み、生活を通して四季の花鳥風月を核とする日本の芸術を生んだのである。そうした風土の中で生きた豊かな心の祖先をずっと崇拜し続けたあつい宗教心をもつ

のが日本の人々なのか。

特定の教義や主張に囚われず自然を媒介とし、無心で道を求める心の宗教が大切なのだ。

遠く神代の時代からそして天平の時代や鎌倉の時代の高僧により、説かれた宗教の伝統が自然の中で生きた西行や良寛の心の中で芸術と融合したのだ。それにより究極的に人の心が美しくなるのだ。

その後、さらに世阿弥や漱石に受け継がれたこの芸術的宗教心の探求こそが、この国の生活の基本的な伝統なのだ。

フリッツはそう思いながら、街を歩いた。

《我が師のハルトマンの思想とも相通じた

普遍的哲学である》

改めてフリッツはそう思った。

それは取りも直さず、自分自身の生きる原点に通じるものだった。

これこそ、自分の心と生命エネルギーへのこだわりで生涯追い続けてきたことなのであつた。

回窓生は心からなる歓迎の意を示して福岡市帝国ホテルに、支部長以下約二十名が午後六時ごろから参っていた。

「先生、ようこそ」

「先生、一昨年会つた時と少しも変わりませんね」

「とても、七十五才とは思えない」

口々に語りかける。
元気な姿で、懐かしい昔語りにも時の移るのも忘れる有様であった。
メヒテルトの上手な日本語が印象的であった。

「もつ、わしらドイツ語はだめだ」
みんな、今となってはすっかり忘れたドイツ語で話す必要がなくて、大助かりだ。

長崎の鐘

—

翌日は長崎の訪問であった。

《老博士はるばるドイツから
教え子三千つれしい招待
全国巡り長崎に》

が地元新聞の歓迎記事のタイトルであった。
カルシュ博士はゆかりの地松江を振出しに
京都・大阪など関西、中国、北九州と回り、
十四日の夜、長崎市に着いたのだ。そう報
道されている。

市内に住んでいる十名余の教え子が揃って
長崎駅に迎えに出た。

「先生、おひさしぶりです」
と挨拶する。

終戦直後の混乱期に日本を去ったカルシ
ユ父娘にとって、現在の日本は何処に行っ
ても見違えるばかりだ。

「ここでも、
「わー。すごいわね。昔と全然違っわ。
みんなきれいにツクリ直されてるわ」
とメヒテルトが言うと、フリッツも、
「すべてきれいになりましたね」
と同じように感心の声を発する。

その夜、フリッツは、福岡にくる途中に訪
れた広島の写真とそこで交わした自分たち
の会話を思い出した。どつにも、それらが
頭から離れず、なかなか寝つけなかった。

「ずいぶん、きれいな街並みね」

世界ではじめて原爆の洗礼を受けたこの地
の復興はとても、と想像していたメヒテル
トが驚いている。
「ほんとうだ。まったく」
とフリッツが娘の方を見てうなずく。

縮景園ちくけい園を訪問する。茶人の上田宗箇せむしが中国
の西湖をモデルに幾多の景色を繙ありこみ
縮景したものと云われる。

名勝庭園である。深山幽谷、海浜の景観を
同時に展開した景色はフリッツにとっては
最も好きな光景のひとつである。池の中央
の跨虹橋かこうきょうを渡る。庭園の中央の数寄屋造り
の清風館、名月亭が印象的である。かつて
和歌の浦で見た不老橋と回遊式大名庭園の

養翠園ようすいえんを思い出した。

原爆によって壊滅したが、復興され不滅の美しさを見せている。何と静かな、安らぎの美しさであるつか。

広島城の威容を車窓から右手に見ながら、爆心地に出た。骨格の露わな原爆ドームは写真で何度も見たものである。

これを目の当たりにして、戦争の悲惨さを語るベルリンのヴィルヘルム皇帝記念教会を思い出した。同時に東京の瓦礫の山の光景を思い出した。

もちろん原爆の意味とは比較できることで

はないのだが。

それから元安橋を渡り、原爆の子の像の前に出た。その物語を聞いた。原爆で亡くなった少女の像は耐え難い悲しみを誘う。涙をこらえることができなかった。

平和公園を少し歩いて平和記念資料館に入った。解説が悲しい。展示品はまともな目を向けることができぬ遺品や写真はかりであった。

人の影の石を見た。

「長崎にも同じ様な原爆炸裂時の人影が壁に残っているのです」

と後に広島高等裁判所長官を務めた、かつ

ての生徒である矢崎がそう説明した。

そして、悲痛な声で

「ほら二人で先生を訪ねたあのとときの、若槻が原爆でなくなりました」

ぼつりと語った。

フリッツが大使館に勤務していたころ、ドイツに三年留学して帰った大蔵本省勤務の若槻が矢崎と訪ねてきた。ドイツの体験をいかにも嬉しそうに話ってくれた。それを思い出した。

何といつことであるつか。そうだったのか。フリッツは顔を曇らせた。

二

長崎に着いた翌日は朝から街中を見てまわ

った。

二人が街の様子を感想を聞かれて

「いたましい傷あとがまだ残っているものと思っていました。でも、そのような影はみじんも感じられませぬ」

「本当に日本の復興力はすばらしい」

しかし、それは街の様子に過ぎない。

フリッツは別のことを考えていた。

傍らにいた、かつての生徒が説明する。

「原爆の後遺症で、今でもベッドに横たわったまま毎日を送っている人々がたくさんいるのですよ」

心の傷と苦悶、肉体の痛みは街の様子とは

全く異なる。簡単に癒されるものではない。
 「そうですね。心が痛みます」
 とフリッツが言葉少なく言った。

やがて、爆心地に近い平和公園を訪れた。
 力強い巨大な平和記念像が空を指さしてい
 る。

ふと悲しそうにフリッツが口を開いた。
 「ところで永井君は、亡くなったそうですね。
 ね。医者になると言っていた永井君。白血
 病だったそうですね」

「カルシユ先生はご存知なのですよ。
 あの《長崎の鐘》の話」

と傍の者が言った。

「さきほど、浦上の天主堂で、あの鐘の音
 を聞きました。美しい、でも悲しい音色で
 した」

今日も、あの原爆の日と同じく、晴れた青
 空が印象的だ。でも、この日はあの日と違
 って気温も低くやや肌寒い。

彼がこの世にいない分だけフリッツにはさ
 びしく寒く感じられたのだ。

「永井君の過ごした如己堂（にがごどう）も見てきました。
 原爆をつけた人々のために最後まで尽くし
 て亡くなったとのことですね」

「……どっか、どっか安らかにお休みくだ
 さい」

江戸時代末期に來日し、医学に大きな貢献
 のあったドイツ人博物学者のシーボルトの
 鳴滝塾のあった屋敷跡を訪れた。古い鎖国
 の石垣を崩し、後の日本を導いたすぐれた
 弟子をたくさん育てた先人の偉業に思いを
 馳せた。フリッツは彼の足跡を記した展示
 に見入っていた。

夕方になると全員が揃って、市内の料亭に
 繰り出した。郷土料理を楽しみ、話が弾む。
 戻ることにない思い出話に花が咲いた。

夜が明けた。カルシユ父娘が福岡に帰って

「放射線医学を専門にしながらも、自分の
 身を省みることをなく」
 同窓生が言葉を継いだ。

「あの永井君、そのむかし、言葉のできな
 い私を散歩に率先して誘ってくれた。
 生徒との触れ合いの機会を上手につくって
 くれたっけ。……」

「本当に、純真で聡明でやさしかった隆く
 ん。忘れませぬ」

力なく、フリッツが言った。

「会いたかった。元気でいると思っていた
 のに」

くるので、増田は佐賀駅まで迎えに出た。
 「先生、お疲れさま。長崎は如何いかにでしたか？」

汽車に同乗して博多まで戻る。途中、増田の住む久留米市に立ち寄った。大学病院に立ち寄ったあと、昼過ぎに《神代くましよの渡し跡》に辿り着いた。

たくさんの小舟の上に載せた筑後川の《浮き橋》は蒙古からの敵を防ぐ南九州の御家人を動員するために急遽造られたとのことである。

この日本人の大きな知恵に感心した。海への防衛も含めて、この国はドイツとは異なる海洋国家なのだ。

少し休んで、福岡空港までゆっくりとした道中であった。のどかな一日で、無事に先生を案内できてホッしているところであった。空港に着いた。搭乗手続きを済ませた。

空港のゲートの中に消えるまで、カルシウ親娘は、振り返り、振り返り、手を振っていた。

いつの間にか増田の目は涙でかすんで、先生の姿もボンヤリとしか見えない。

先生もメヒテルトも空港ゲートに入る時涙をためていたようだった。

増田さん。お世話になりました。皆さん

にようしく」

この姿が増田の眼に焼きついて離れることがない。

大阪でも、先生とメヒテルトを囲む楽しい歓迎の会が多数の教え子と、その関係者を交えて盛大に行なわれた。

「白石さんですね」

「はい、先生」

「奥野さん、しばらく」

「先生、ドイツではたいへん御世話になりました」

「もとはと言えば、増田さんや奥野さんや

加納さんのお陰です」

「さあ、歓迎会だ、岡崎、君が司会だ」と宮田がまず言った。

「先生に習った、兵隊さんの歌でいこう」

「ヴェン イムフェルデブリッツェン
 ディングラナーテン、ヴァイネン
 ディメトヒエンウマイレンソルダーテン。」

(手榴弾が野原で炸裂する。兵隊さんを悼み涙を流す娘たち)

「ヴァールム？ アイダルムアイブロー
 スヴェーゲン チンドラッサ ブンドラッ
 サ……………」

「古い歌だね。私は忘れた」

と一寸先生がとぼけて見せた。忘れるはずがない。幾重にも思い出深い歌なのだ。

メヒテルトも童心に戻った。

久方振りに先生に会いたいと思っていたか
つての同僚や生徒は、滞在先のホテルに泊
つて、一緒にゆっくり遅くまで話ができた。

静けさとやすやすり

—

フリッツは、奥谷の万寿寺の門の石段に歩

み寄った。ここは、散歩でよく来た昔の懐
かしい思い出の地だ。

「ここに、大きな銀杏の木があったのです
よ」

一行は門をくぐって、懐かしそうにして、
左手の墓場へ行き、

「ああ、ここは……ここだった。あそこは…
同じだ」

と想いを重ね合わせている。

寺の玄関で、一行が来意を告げた。

「ドイツからの先生がご挨拶を！」

「ハイ、ちよつとお待ちください」

しばらくすると、本堂の縁側から、

「やあ、これは珍しい」

との声が聞こえた。

老僧が白袈束で立っている。

この老師は、カルシユ先生とメヒテルトと
旧知の仲だった。みんなは、それを知らな
かった。だから、一瞬みんながびっくりし
たよだった。

「お上がりください」

「遠慮なく」

靴をぬいでゆつくり縁側上がった。

メヒテルトが

「昔は、よく遊びに来たの。でも、境内だ
けよ」

ちよっぴり、わざわざ言い訳した。

みんなが微笑んでいる。

「さあ、奥にごうぞ」

二人の主賓をはじめ、みんなが奥に案内さ
れた。

山を背景にそこにとけ込んだ静かな庭に見
入っている。故郷に帰った人のように、心
の底から懐かしさを味わっている。

「茶を、あがりませんか」

と老師が言う。

「いただきます」

と静かにフリッツが同意した。

茶室へ案内され、老師の接待を受けること
になった。

フリッツはかじりまって身を固くしている。
「そんなにせんで、足は投げだして。さあ」

「そつですか。では、
気楽な茶室だ。そのうち、足がしびれて
「書院の明かり窓に腰掛けたい」
と言っ。

「ああ、ごうぞ」
と老師がさりげなく書物を片脇へ寄せた。
空いたところに腰を掛ける。これでも、茶
席が様になっているから不思議だ。添えら
れたそば煎餅がお茶にとても合う。

「この静けさの中でこそ、真実が考えられ
るのよ。」

フリッツのことは老師がつなずいた。
フリッツが、静けさを語り合える、会いた
い人が松江にいたのだ。

続いて、春日神社、桐岳寺、千手院と廻っ

たが、どこも懐かしい所だ。メヒテルトは
子供の頃を思い出してとても嬉しそうだっ
た。うわさを聞いて、昔親しく遊んでもら
った付近のおばさんが、そこかしこから顔
を揃えて、二人との再会を喜んだ。

二

出雲の入口、かつて杵築大社とよばれた出
雲大社は、何度も訪れたところだ。竹原の
世話で案内した。

みんなは松江から自動車で練りだし、昼頃
大社に着いた。

宿へつくると、ちよつと休憩する。慣れな
い肘掛け椅子にもたれたフリッツは庭に見

とれた。頭の芯まで澄んでくる鎮まりであ
る。軒先には、柿の実が鈴のように下がっ
ている。

静かなこの庭は、秋の日射しを受けて、
竹の先に停まった赤トンボの羽が微かに照
り返す。紅葉が美しい。

この日の光の影に座ったフリッツの心が静
かに深い思いに耽っている。みんなも憩い
のなかで沈思している。

やがて、近くから『出雲そば』が運ばれた。
「これ、これなのよ。」

といつメヒテルトのはしゃいだ声につられ
て、みんなが饒舌になる。音を立てておい
しそつに食べる。

「大社そばだ。いや、違った。懐かしの出

雲そばだ」
フリッツが思わず、酒井を見てこう言った。

大社の案内は、町役場観光課の水師だ。立
案した竹原の親類筋の今西禰宜は酒井の顔
見知りでもある。

これから、拝殿とお祈りだ。
先導されて参道を通って拝殿へ向かう。総
檜造りで高さが十三メートルもある。口を
すすぎ、手を洗い、お清めして大きな注連縄
の下の賽銭箱の前で拝礼する。

見ると、旅行者だ。流行を意識したスラ
ックス姿の娘さんが四、五人、何か願い事

を心に秘めて拍手あしこを打っている。
メヒテルトはそれを見て微笑んでいる。

フリッツは熱心に拝殿を見ている。

「大きな注連縄ですね」

「一ト半の重さですよ」

「巫女舞がはじまりますよ」

との合図があった。太鼓と笛の音が響く。

……これが神おろしである。

手に鈴を拝領する。西手に「わらわをかざり、
笛の音に合わせ、ゆるやかに巡る」

巫女の手は袖布の下から、鈴と櫛を握っている。袖先が上向いている。規則正しく鈴を鳴らす。

「神様が舞っているのです。その見るので
す」

その舞を見ていると参列者の心は微妙に変化する。

「この舞は、上古から伝わるものです」

「フーン」

と先生は感心する。まじろぎもせず、これをみつめている。

やがて舞が終わる。太鼓が激しく鳴って

「神様がもうお帰りになります。終わりで

大きな幣ぬまを振り、参列者の心を払い清める。

白衣に緋袴の巫女が、静かに立ちあがり神前に進む。拝礼し、神前から右手に櫛、左

す
と竹原が小声で言う。

三

拝殿脇の庭で、鳩がたわむれていた。ここ
で今西禰亘が建物の説明をする。みんな
古代出雲の文献に残る規模の壮大さに感銘
した。

近年、この建物の跡が発掘された。身を清
め、白衣を着て、いよいよ神前へ参拝する
ことになった。

これから本番だ。禰亘の先導で、八足門やっあしもん
へはいる。

白衣正装の官司くわじから、恭々しく、お抜いを
受ける。続いて参拝の儀である。

この一行、フリッツを代表として榎門の入り口まで行って拝礼する許可を特別にいただいている。

重層入母屋造りの門だ。

「玉串奉奠たまぐしほうだんですよ」

フリッツが前に進んで玉串を受けとった。
そのしぐさを見て、みんな一寸気をもんだ。
「うまくできるだろうか」

みんな一列に並んだ。何かあったら一大事

と違って、竹原がフリッツの後にびったりとついて行った。

「先生、落ち着いて」

「槽」のすぐ前、大社の偉容が眼前に迫った。これを境に、フリッツはひるまず、悠然と玉串を捧げ、くるりと枝をかえし、これをつつがなくやり遂げた。

一回ぼつとして、拝礼した。笏をもって見守る正装の宮司さんもぼつとしたようだ。

四

参拝を終えて、神様の話を聞いた。

「瑞垣みずかきの外の小さいお社は、禊社しじやとよんで

います。三つのお社は、大國主おおくにのみこと神様の御みまにお仕えする女神様のためのものです」

「ハアー……」

とメルテルの声。

「この東西両側の細長い建物は、八百万やっよろずの神々の宿舎です」

「ええ、そうですね。聞いて知っています」

神前をさがり、巫女さんからのお神酒をいただき、八咫門から退出した。かくして彼が念願の至聖の神々に対面が叶えられ、自らに下された天命を感謝することができた。

す。出雲は、旧暦十月は神在月かみあつしづきで、全国から、神様が集まるのでしょ」とフリッツが言った。

「御存じのよつですな、これを、東西しじょう十九社とよび、毎年十月になると、お祀りをするのよ、」

水師の説明……。

和やかな雰囲気の中かで、この一行が「巡めぐした、おみくじの紙がたくさんぶら下がっている杉の木の神々しさを脇目にみて、千家せんげ国造くにぞう家の宮司みやじの庭へお邪魔した。

「樹齢五百年の松があるのです」

との話だ。みな、緊張のために、疲れ気味だったので、あの庭で腰がおるせると期待した。

見ると、古いスタイルの庭だ。池の中の島の古い松がなるほど見事である。

「これが五百年か」

実によい枝振りだ。すぐ後ろにある濃緑の山を背景にして、一幅の絵画を形づくる。

この美しく整然とした老松が人工と自然の融合の極致をなしている。何だか大社の存在を象徴しているようなたまたままいだ。

「あの松の下の鶴は……」

「あれは、つくりものですよね」

「そうですね」

「あつ。動いた。生きてる亀だ」
亀もつくりものだと思つたら、そうじゃな
かった。亀が石の上でじつとている。時々
首をまわしたり、手足を動かす。甲羅干し
だ。

全く千古のたたずまいだ。動きがある。が、
全く静かだ。この庭で静かに憩々でいる。
と、いつのまにか、この息吹にまきこまれ
て一体化したフリッツは「永久の静けさ」
に浸っている。

神話の里

奉納山の展望台に立った。風が少し冷たい。
はてしない海と、弓なりの長浜を見ている
うち、井戸つた、国曳ぎの話を思いだし
た。
「向いづに見えるちよつと高い山が、古く
は佐比売山といった三瓶山です」
三瓶連峰と呼ばれる火山群は、やわらかな
女性的美しさをを見せてくれる。
西行法師が

知らでみば 富士とはいわむ

石見なる佐比売がだけの

雪のあけぼの

と詠んでいる。

「神様が、国をひっぱった綱の端をつない
だじいじいす」
と説明がある。

「長く連なる白い砂浜がその綱ですよ。園
の長浜です。それにこの浜は全国の神々が
上陸するじいじいす」

「今私たちが立っているこの杵築が崎を引

き寄せたといつのでしよう。知っているわ」
メヒテルトが言葉をついだ。
「そうですね。八束水臣津彦命が、この女の
胸すきとびして三つひりの綱打ちかけて
《国采》《国采》と引き給つたのです」
と酒井の口から得意の風土記の一節が流れ
た。

古代人が創った国曳ぎの物語の奇想天外で
大きな空想力にみな感心する。

つづいて、大社の巫女の出といわれる出雲

阿国の記念塔へ趣ぎ、日本人の心を引き込

んだ歌舞伎踊の先祖を偲びながら山を下りた。

フリッツが若き日に何度も訪れた日御崎^{ひのみさき}迄行つてはどうかとみんな思った。しかしフリッツにかつての強行軍は無理といつこ

とで、田舎の形の磯^{いそ}まで行つた。

「先生、加賀の詰坂の自転車での強行軍を思い出しますね」

「そうですね。酒井さん」

「若かったのですね」

「国ゆずりの談判の時、武蔵^{むさし}権神と

建御名方神^{たけのみかたのかみ}が石投げくらへ^{いしなげくらへ}をここに下さつたのです」

「その時投じた石が海上に白波を立て、点在する岩になったのです。」

それで、島つぶて岩といつのです」

と物理学者の竹原が微笑みながらもっともらしく説明をした。

夕日に映える海面に浮かぶ優美な小さな島と周りに点在する島々の姿が美しい。

「ここでも古代人の説話とそれを作り上げる、壮大な想像力が偲ばれる。何のための

この説話なのか。フリッツの頭にはこれまでに追求してきた深い思いと感嘆がよぎつた。

風景と古代人の想像の世界との壮大な一体化、そして仮象の世界との融合であることが、一回はその一体化の世界の神聖な美しさに心を打たれた。

「これこそ『永久の静けさとやすらぎ』か。哲学者のフリッツ・カルシュ博士がこれまでずっと求めてきたものだったのかも知れない。」

尽きぬ想い

案内をすべて終わり、後は旅館で、ゆっくり、いろいろお話でもしようといふことになった。

このときまで、きみえさんが大事に抱えて来た風呂敷包みの中から大変なものが出てきた。

「まあ、うれしい。おにぎり、わたし、これ大好き……」

「そうメヒテさんの大好物でしたな」

先生の家で、お手伝いをしていたこのきみえさんは、幼時のメヒテルのすみずみまでわかつている。

みんなも、馳走^{ちしう}の相伴^{さむらい}にあずかった。

掌^{てのひら}で握った、この塩味のいはんの塊の香りに、懐かしい子供の頃の思い出が蘇った。

「やっぱり日本の味ね」
「いや、おぶくろの味だ」

先生ともいよいよお別れだ。みんな先生の言葉に聞き入る。メヒテルトが折々解説する。

「お互いの思っていることを相手に通し、これをわからせるために、言葉があるはずだ」

「なのに、その言葉が二人の間で一つの言葉で同意しても、考えていることが必ずしも一致しない。人間同士の思い違いだ」

「これが混乱や争いのもとである。これを

無くして、一致させるよう努力してきたつもりだ。その方法があるのかどうかも含めて」

「父は、それをずっと追求してきたので、メヒテルト。」

《カルシュ先生が万寿寺で静けさとやすらぎを懐かしんだこと。大社で神々に接して、鎮まりの感に耽ったこと》を振り返って、

《おそらくこの境地にひたることが古代人もずっと悩んでいた互いの不一致を、一致に導こうとしたカルシュ先生の努力の証である》

と定年間近になった化学者の酒井教授は想像した。

このとき目を閉じたフリッツは、ハルトマンの深遠な概念にふれ、初めてシュタイナーと向き合い人智学を学んだころを思い出した。

そして、松江の地の神々のたたずまいと古代の人々の壮大な知恵を静かに黙考していた。

一九六八年の秋、十月、木の葉が音もなく散る静かな一日であった。

カッセルの落日

—

一ヶ月の滞在後にメヒテルトの住むチャタヌガに向かった。しばらく滞在し、孫たちと過ごした。かわいいものだ。毎日小学校と中学校に元気に通っている。

連合国との戦争を思った。二つに分けられたドイツの運命を思った。ドイツは歴史的に統一された時期は極めて短い。

戦前も戦後も、必ずしも自分の思い通りにドイツで過ごせたわけではなかった。

カッセルの老人ホームは二人には充分な空

間とやすらぎのあるところだ。
帰国した彼はその我が家で平穩な日々を送っていた。
フリッツは一緒に行けなかった妻エンメラに毎日のように、日本での体験を話す。写真もたくさんとってきた。

一九七〇年の六月、フランクフルトのホテルに泊まっていた酒井は、朝早く列車でカッセルに向かった。

「ようこそ酒井さん」

と大きな身体のカルシウ先生が、カッセル駅のホームに出て、列車から降りた酒井の手を握った。

酒井は嬉しくて、握手のまま、思わず深々

と日本式のお辞儀をしてしまった。

住居はこの町の老人ホームである。夫人を交えて松江の話だ。フリッツは三十年前の松江の思い出を語る。それに今の松江の話も酒井がつなぐ。

エンメラが番茶をいれる。話しの途中で、何杯も注ぐ松江流のもてなしだ。

平素あまり使い慣れない日本語をできるだけ無理して使う。話のなかで執意が酒井の胸に響く。

日本ではどつ口で伝えよつとしても伝えきれなかった、ヨーロッパの神髄を弟子が今の地に來たのを機会に、教え込もつというやさしい気持だ。酒井の心は無性に弾ん

だ。

唇はカッセル名物の魚料理を御馳走になる。そしてフリッツと中世風のレーヴェンブルグ古城内の博物館に行く。

ここで古代からのドイツの歴史、ヨーロッパの歴史をひと通り見て、次にルネッサンス当時の画家レンブラントとルーベンスなど巨匠の作品の収蔵されているドイツ屈指の美術館に足を踏み入れた。

「ここにはレンブラントの絵が多く展示されています」

故郷のアムステルダムにひけをとらないといふ。

「それはこの画家を特別に遇した土地の領主の縁故によるのです」

絵を一つ一つ眺めるたびに懇切な説明がある。

「この画家を理解して支えた領主が素晴らしい」

「ここにはライン中流東岸の広大な地域の農民の気風が見られるのです」

という、スケールの大きい話になった。ドイツ魂がフリッツの口から酒井の胸にひびく。夕刻カッセル駅で別れるまで、つきつきりでの話であった。まるで夢のようだった。

ヨーロッパ大陸へ足を踏み入れた最初の日のフリッツによるヨーロッパ入門の手ほどきであった。

「異国で、こんな幸せな思いの日が過せたとはい……」

と改めて感激した。

二

この年の七月十四日には、自分の生涯の運命を決定つけた長屋がカッセルの老人ホームを訪ねてきた。

「喜一、おひさね」

「フリッツ、じぼりへ」

ただ、懐かしさのあまり、無言で抱き合うだけであった。

「年をとったな」

「君もな」

「もつこを訪れることができないかもしれないな」

この日はフランス革命の記念日だ。盛んに関連番組のテレビ放送があって、時々二人はその画面を見つめた。

ラ・マルセイエーズが流れる。三色旗の説明がある。革命の経緯が映像とともに解説される。戦いと流血の歴史だ。

「そうか、遠い昔のことだな。百年以上前のことだ」

「わしらも歳をとって、やがて歴史の中に入るのだな。静かにな」

「でも、まだ、先の話や」

気休めに言う。

ついつい昔の思い出話になる。

エンメラと同じ年齢の長屋も勤め先の東京大学を退官して十五年ほどになる。

毎年禅の修行と公演でヨーロッパを訪れる

が、フリッツを訪ねる時間がなかなか取れなかった。

「最後になるかもしれないが」

「いいながら」

『日々是好日』を彼女の手渡すゲストブックに記した。

ページを過去に遡ってめくる。彼が何度かフリッツを訪れた記録が順に目に入る。

日独両国での数回の訪問の記録が二人の親交の深さを物語る。

八雲立つ 出雲の空や 此あした

雪深くして 風吹き 渉る

昭和二年一月二十四日 長屋

軽井澤に……

北欧の夏の 森を偲びぬ
みずすかる 信濃の空にはるばると
みつめれど 浅間は見えす

昭和八年八月十七日 長屋



浅間山 フリッツ自筆のパステル画

その昔 共に学びしこの町に
また訪ね来て 共に語りぬ

帰国前夜に四十数年前を回顧しつつ

昭和四十一年九月七日夜 長屋

ゲストブックを閉じた。長屋は静かに寝室へ向かった。なかなか眠りにつけなかった。

翌朝、三人一緒の食事が済んだ。別れの時がきた。喜一は永年の友のフリッツとエンメラに涙ながらに暇を乞った。

「さよつなら、フリッツ、エンメラ！」

「さよつなら。キイチ！」

もはや、声にならなかった。

長屋と別れたその年の十月三日、エンメラの七十五歳の誕生日に一人が寄り添うように笑顔で一緒に写真を撮った。苦楽を共に

した二人一緒の最後の写真である。



1971年10月カルシュ夫妻

それから三ヶ月後の年末に、二人は金婚式を祝った。長寿を願う長女メヒテルト夫妻と次女フリーデルンがかけてつけた。

みんなの話は、つい日本へ引きずられる。

「すばらしかった！」

「また、行きたい」

「私達も行きたかったわ」

とエンメラとフリーデルンが口を揃えて言う。

しかし、それから半年後、フリッツが突然頭痛を訴えた。

「どうも、疲れかららしい。たいしたことないわ」

診断がついた。脳腫瘍であった。

エンメラが医師から呼ばれた。末期の状態であった。そう告げられた。

メヒテルトがアメリカから呼び寄せられた。フリーデルンもだ。

ベッドで思い出を語る。すべてがなつかしい共通の思い出である。

「メヒテルト。メヒテルト」

フリッツの呼びかけにメヒテルトが手を休

める。

「日本は、いや松江のことは運命だったのだね」

「大山、隠岐、六道湖…… 軽井沢…… 私……私の……」

「あの大山とあの中海、永久の静けさの象徴をもつ見ることは決してないだろうな」

エンメラとフリーデルンが身の周りの世話をす。

三

今日は幾分気分が良い。フリッツは旧制松

江高校の関係者から招待を受け、その年の秋にかつての生徒たちと親しく過ごしたことを思い出していた。

ベッドの上で、その時のアルバムをひろげてみた。

この日本各地の再訪問が

《遠来の師への追慕の美談》

として新聞でも報道されたことに感涙を落とした。

幸せだった。フリッツは敗戦後の帰国時につぶやいた自らの次の言葉を思い出した。

《今はすべてを失ったよつだ。そう見えなくもない。でも、こんなに美しい体験を胸にして帰国するのだ。》

そして、今こうしていることの幸せを改めて思った。

あのドレスデンの国際博覧会での日本との出会いの光景を思い出した。誰も知らないひとから、あどきに手にした光輝くカフスボタンを想った。ずっと大切に使用していたものだ。それを自分の傍に持つてくるよつに、エンメラに眼で促した。

手にとったボタンの黄金の飾りの変わらぬ輝きを見つめた。

《遠い昔から自分の行く路を照らしてくれた、その光。》

その導きのとおり、心のうちが《天の恵みに満ち溢れた》光り輝く美しい人生であつた。

日本との関係は自分の宿命であり、そのすべての事象は天命によるものであった。

出雲大社で感謝の言葉を述べたときに、自分のすべてが整理され、そして終わったことを悟ったのだった。

自らの人生の終末に、周囲の者にその想いを静かに語った。

そして一九七一年十一月十八日、フリッツはあの湖水のほとりに生じたさざ波が消えるよつに静かに永久の眠りについた。

それから、七年後エンメラも静かに彼の後を追った。

た。

そしてその周囲はすべてをやさしく包む、あの湖畔で見た夕映えの美しさをそのものであった。

この天の栄光につつまれながら、自分は今その終着点に辿りつこうとしてゐるのだ。

《見たよのなみた大山の雲を何層もみた》

《幼時と夢見た同じ風景を出雲の地に自伝》

《の地と自らの故郷をいかに愛した》

《たまたまが日本人である理由》

これらは、永久の時の流れの静けさのなかで、自分と与えられた運命の輪によって結ばれて生じた数々の現象の根幹をなすものであった。

エピソード

時は流れた。カルシュ博士のことをもつだれも思い出すことがない。

松江でも限られた者以外にだれも興味をもたない。

一人の科学者がシュトゥットガルト⁶に立ち寄った。その彼が品のよい
初老の女性に偶然に出会った。カルシュ博士の次女フリーデルンであっ
た。軽い会話を交わした。思いがけない話を聞いた。彼女が別れ際に自
分の住所を紙切れに書いて手渡してくれた。

彼は、全く見も知らなかったカルシュ博士が実在の人としての確信を
得るために、松江からその足跡を調べ始めた。古い履歴書が残っていた。
長女のメヒテルトがアメリカにいた。彼は縁者をたぐり寄せていく。す
でに老いた、かつての生徒に会うことができた。懐かしい話を語って
くれた。カルシュ博士が見えてきた。やがて、その人柄に彼はのめり込ん
でいった。

フリッツ・カルシュ

解説

調査の進展とともに、あれこれとカルシュ博士の生活や思想に想いを馳せるようになった。

ふと、フリッツ・カルシュへの想いを彼が何の気なしに綴りはじめた。それが、この書の始まりであった。

カルシュ博士が亡くなった後も、縁のある人がカッセルの老人ホームに住んでいたカルシュ夫人を慰問した。夫人は大変喜んで涙を流されたということがある。日本がなつかしくて、部屋一杯に日本の色々な品が飾られていたとのことであった。

その夫人もとうに亡くなった。次女のフリーデルンは結婚せずに、自由ヴァルドルフ学校に一生を捧げ、やがて定年を迎えるという。あどときの少女メヒテルトも齢七十四歳。スーパー・マーケットを経営するセイント・ゴア氏と結婚した彼女は既に五人の孫がいる。黄泉の国から呼びかけ、数多くの偶然をこの一人の科字者に用意した父フリッツに代わって、自分の知り得る限りのことを彼女は懐かしみながら、彼に繰り返し語ってくれた。

人の縁の

えにし

この不思議さよ

時の流れの

静けさのなか

解説

カルシシュ氏の足跡と業績

フリッツ・カルシシュ



フリッツ・カルシシュは明治二十六年二月十九日ブラゼヴィッツで生まれ、昭和四十六年十一月十八日にカッセルで没した。父はヘルマン、母はルイーゼであった。姉にフリーデルがいた。

彼は大正十四年より十四年間にわたり旧制松江高等学校（現島根大学）で教育に力を注ぎ、多くの人材を育てた哲学者であった。また日本の哲学や宗教の研究者で、昭和十

五年から五年間にわたる知日家外交官でもあった。

彼の薫陶を受けた著名人には「長崎の鐘」で知られている元長崎医科大学教授の永井隆氏がいる。もちろん、彼の門下には高齢ではあるが健在の各異界著名人を多数見出すことができる。

直接に指導を受け多大の影響を受けた者として、政界では国務大臣など要職にあった人々、教育学界では著名な文学者、医学者などの科字者、法曹界の重鎮、大使などの外交官などが見られる。さらに数知れない実業界の指導者、芸術家、スポーツ界の功労者を挙げることができる。また当時、同様に指導を受けた、台湾と朝鮮からの生徒は戦後に故国で殆ど例外無く、要職に就いてその発展に貢献している。その他、直接

解説

に指導は受けなかったが、個人的接触や間接的な接触によって、影響を受けた人は政財界、教育界に枚挙に暇がない。

彼は明治四十四年ドレスデンにおける国際博覧会で「日本」と初めて遭遇した。故郷のギムナジウム学校を大正三年に終えた彼はドレスデン工科大学に入学した。約半年後、第一次世界大戦では志願兵として電信隊勤務であった。大正六年に予備少尉となり、大正八年には軍役を退いた。

その後マールブルク大学でニコライ・ハルトマン門下として哲学を学び、大正十一年に哲学博士の学位を取得した。さらに歩を進め人智学の研究組織に加わった。大正十四年日本との縁からドイツ語講師として運命の地の松江へ赴任することになった。同

年十月彼はブラーゲ氏の後任として旧制松江高等学校に着任した。その後何度かの傭継契約の後に、昭和六年四月～七月に一時帰国の間、ハーマヘル氏が教鞭を執ったが、同年九月再び採用され、昭和十四年三月契約満期に、シュヴァルベ氏と交代し帰国した。

この間、英語教師のウッドマン氏を隣人とし、松江市奥谷町官舎に住んだ。

この官舎は外国人教師宿舎として大正十三年十一月二十九日落成。昭和四十一年から宿泊施設八雲荘として使用された。昭和五十年以後は独身職員宿舎として使用されているが老朽化著しく、現在の居住性は極めて劣悪である。

フリッツと妻エンメラ（明治二十九年生）

との間には、長女メヒテルト（昭和三年生、次女フリーデルン（昭和十二年生））があり、余暇には愛する松江や周辺の田園を精密に描写した。彼の描いた宍道湖、嫁が島、袖師が浦、大山、山陰の農村の風景画などが保存されている。また当時の松江の貴重な写真を数多く残している。

エンメラは、父ゴットフリート・アクセンフェルト、母ベルタ・ホイザーの間に生まれた五人兄弟の長子であった。語学・古典文学・神学をボン大学とマールブルク大学で学んだ。とくにラテン語、ギリシャ語へブライ語を学んだ。

母方の伯父テオドル・アクセンフェルトは細菌学でも著名なフライブルク大学眼科学教授、その娘には世界的なピアニスト、

チェンバリストとして活躍した、エディット・ピヒト・アクセンフェルトがいる。兩人とも別々に来日しており、彼女には日本人の直接の弟子もいて、彼らは現在活躍中である。

後にカルシシュ夫妻の長女は自ら人智学の研究を行ない、次女は帰国後自由ワアルドルフ学校に通い、マールブルク大学で学び、同じ自由ワアルドルフ学校の教員になった。この学校の起源は一九一九年であるが、ヒトラーにより戦時中は禁止された。しかし戦後に復活し、一九八〇年代には世界各地に建設された。日本ではシュタイナー学校と呼ばれている。

博士に関しては、門下の酒井勝郎氏が「田

舎の大学から、「カルシシュ先生」（私家版、昭和四十四、五十五年）で記述し、同窓会誌「翠松」や旧制松江高校史の「嵩のふもとに」でその人柄を旧生徒が語っている。



カルシシュ夫妻と生後一週間で亡くなった長男ゴットフリートの眠るマールブルクの墓地

自身の学問に関してはトルナツハの「ゲータアム」に収録された彼の未刊行の原稿一万四千ページがある。これは解読困難であるが、後に家族の許に戻されて、現在解読整理中である。

カルシシュ氏と私の出会い

シュトゥットガルトのとある小さなホテルで一九九九年九月五日朝のこと、カルシシュ博士が偶然にも、私を導いてくれたのが彼との最初の出会いであった。

カルシシュという名前は私にとっては全く未知で、聞いたことも、見たこともない名前であった。

当時、私は、二十年来の親しい友人であるデュースブルグ大学のフランク教授が大会長を務めるカールスルーエでの第三回ヨーロッパ制御会議の国際プログラム委員として、また「呼吸循環制御」と「眼球運動制御」に関する発表と座長の任を無事に務めて、会議に別れを告げたところであった。

せつかく同行参加した同僚の張曉林博士と
 室蘭工業大学の高原健爾博士とも相談して
 同四日に週末休暇を利用して、私自身も未
 だ訪れたことのなかったこの街に足を踏み
 入れた。その日の宿を決めてなかった我々
 は中央駅のインフォメーションで二軒の安
 価な小さなホテルを紹介された。どちらに
 するか、ちょっと迷ったが、こちらと指し
 て、城内公園の近くに宿をとったのが、こ
 の運命の出会いの始まりであった。この日
 の三人でのガストシュテッテでの昼食はい
 ろいろと話題が弾み、とても楽しかったこ
 とを覚えていいる。街のあちこちを見物する
 前であった。この日は丁度、州知事の誕生
 祝いがあり、官邸の広場で楽隊の行進と演
 奏に幸運にも遭遇し、土地の人とも親しく
 語り合つこともできた。

さて、問題の翌朝は仕事の準備もあつて七
 時頃であつたらうか、階下のダイニングル
 ームで三人で朝食を摂っていた。すると、
 上品な婦人が私の左斜め向かいのコーナー
 に壁を背にして座つた。彼女が食事を始め
 たとき、私たちは丁度食事を終え、この日
 の予定を勿論日本語で語り合つていた。
 そのとき、彼女がふと私の方をみて微笑ん
 だ。私が気づいてそのわけを尋ねると、大
 部分は忘れた日本語の響きをととても懐かし
 く感じて、自然にそつなつたとのことであ
 った。

そのホテルの名は《ホテルアムフリーデ
 ンスブラッツ》で、フリーデルンさんと出

会つた場所が《フリーデンスブラッツ》で
 ある。その名称が不思議なことに一致して
 いた。また、彼女の日本名は『ひで・こ』、
 私の名前は『ひで・とし』である。
 ずっと後で気がついたことながら、ここにも
 やはり彼女の父フリッツの意志が感じら
 れた。何という偶然か。私とカルシシュ先
 生の出会いに幾重にも偶然が働いていたの
 だ。

彼女はマールブルクに在住の、地理学を専
 門とするフリーデルン・クリスタ・カルシ
 ュ博士であることがわかった。

彼女は懐かしい松江、横浜、東京、軽井沢
 でのかつての暮らしをかみしめるように語
 ってくれた。すぐに父が戦前、旧制松江校
 で教鞭を執っていたことへと話題が進



1999年9月5日シュトゥットガルト
 のホテルでフリーデルンさんと

展して行つた。残念ながら私たちの出発の
 時間も迫り、再会を期して写真を取り、住
 所を伺つて別れた。

帰国後、約束の写真を彼女に送つたところ、
 返事にカルシシュ博士の履歴の概略が届いた。
 戦中、戦後の混乱時に紛れて彼の業績が散
 逸し、日本では十分に時間がとれず、その
 後ドイツに戻る機会があつてもなおまとめ
 るに十分ではなかつたことが推察された。

話に興味をもった私は、松江市役所と島根県庁、島根大学に問い合わせたが、同博士に関する具体的情報は殆ど得られず、私も多忙で、ただ、関連する史実の確認と人名の確認を細々と行なっていた。

年が改まってからも私の周辺に種々事情が生じたために、その後十分に時間とれなかった。また、せっかくのフランスでの遠隔医療国際会議の時に、ドイツに立ち寄りお会いしようとしたが、やはり時間とれず断念というわけで、帰国後の四月にやっとこの件に本格的に取りかかることができた。

その後フリーデルンさんから紹介されたメヒテルトさんに電話と手紙で接することができ、これから得られた情報をもとにして、

が本当に松江で教鞭を執っていた客観的証拠を得ることができた。

増田氏の紹介もあって、竹原氏と奥谷町のお宅で面会することができたが、旧制松江高校の同窓会に関してまったく予備知識のない私には把握できないことばかりであった。カルシシュ氏の住んでいた奥谷町の洋館の前で竹原氏と写真をとった。縁者との最初の写真であった。

後になって、この洋館に個人的にたいへん興味をもっている人がいることやカルシシュ氏と周辺の外国人ウッドマン氏との関係がわかった。

同窓生の資料の提供や旧生徒との橋渡しは白石氏によるものであった。やがて、見も知らないひとから手紙や資料を受け取ることができた。また、同窓会長中村氏やカル

かつてのカルシシュ先生の生徒と縁者の何人かに接触した。メヒテルトさんを通じてあとでわかったことだが、一九六八年にカルシシュ氏が同窓会から招かれたことがある。

それ以来、彼女がずっと旧交を温めていた数人の住所をアルファベットの形で紹介してくれた。そのなかで国内のカルシシュ氏に縁のある最初のキーパーソンである酒井氏、増田氏、白石氏、遠藤氏、江上氏に連絡をとることができた。もちろん、住所もアルファベットなので、まず対応する日本語を調べ、さらに電話番号を調べ電話をしたのが実質的な調査の開始であった。この頃、

出雲に直接赴いて何を知ることが可能かを検討するようになった。そして、現在の島根大学の図書館を通じて、古い職員録を見出し、そのときはじめ、私はカルシシュ氏

シユ氏と関係の深い田島氏、松本氏などからも健在の生徒の経歴などの情報を得ることができた。

このころ、同時にメヒテルトさんからは次々と事実を明らかにする手がかりを得て彼女が提供するすべての資料を公開することを任された私は、カルシシュ先生顕彰発起人会設立と将来の計画立案のために白石

宮田、岡崎、奥野の四氏と互屋で準備した。これが発端であった。大正元年生まれの九期文科乙類卒業の白石磷氏が自らの身体の故障をおして、この事業の所要所を形造るための中心的役割と道順を指導して下さった。彼が七十余年前の、本書に出てくるあの『高等小使(クラス総代)』であったのは、私にとって幸運であったことを付け加えたい。

なお、この小説の主な登場人物はこれらの人々をモデルとし、事実に沿って描いてはいるが、フィクションであることはもちろんのことである。例えば、本文中のブルダーシャフトトリンケンである。当時は、現在と違って一般的ではなかったが、日本人との付き合いという事で敢えて採り上げてみた。

調査が進行していく中で、私は幾度となく『松江にとっては誇るべき、重要な重い石だったカルシシュ先生なのに、今では誰も振り向かない。まるで、路傍の軽石(Kar(u)stein)のよう¹に無視されている』と無念に思ったものだった。

大正の終わりに、火山の噴火のように突然日本という地上に現れた熱い、それこそ燃えさかる石だったカルシシュ先生。最初は周りに衝撃的に大きな影響を与えてくれたのに、時とともにだんだん冷えていまでは、本当に誰からも忘れられてしまっている。たまたま通りかかった私がそれを見つけた。そして、手にとって丁寧に汚れを払いのけ、昔の姿を偲んでいる。火山岩が冷えてできた軽石は素朴な姿で、もはや何の特徴もないように見える。でも今その手でこの軽石をそっと暖めると小さな穴に残った香りを取り囲む空気が膨らんで外に漏れ出てくる。そして、当時の情景が眼前に蘇ってくる。本文中にも軽石の話がある。やはり、先生は名前が Kar(u)stein でよかったのだ。と今は思っている。

ドイツの文化とそれを生んだ風土に若き日に触れる機会をドイツから与えられた私がドイツでの国際会議の時期に偶然にもカルシシュ博士の娘さんにお会いして、この仕事に携わることになったのは、私に賜った天命と考えた。

ここに、手記の提供や著書の一部の使用を快く許可いただいた関係者の方々に、カルシシュ家の人々と共にここより御礼申し上げます。

以下は、カルシシュ氏の生徒ではないが、子供の頃から彼を知り、別の角度からその家族や当時の暮らしを語る戦後の旧制松江高等学校出身の松本昭氏の言葉であり、同時に、同窓会および関係者の願いでもある。

現在の松江では、島根大学にも外人学生が珍しくないし、外国観光客も多い。一八九〇年に松江に入った異人さんのラフカディオ・ハーンは、近所の古老の言によれば、まわりの俗人にとっては異様な人、無気味な存在であった。そうした気持ちでの応対は、ハーンと家族に不愉快な思いをさすことも度々であったらしい。約三十年の後、この官舎の周りの市民には、はるかに余裕ができていたようだ。珍しい異国の客人を、居心地よくしてあげよつとの善意の人々が大部分であったと思う。

そして奥谷のあのあたりは、今もほとんど変わらない、まことに好ましい環境であった。豊かな森や竹やぶは、千手院や

具体的にはカルシシュ氏の永久記念のためにカルシシュ記念館（ハウス）を創設したいと思っている。その場所としてカルシシュ氏が十四年間生活した松江市奥谷町の公務員宿舎（官舎）を提案し、国または地方公共団体の管理のもとにありたいと念じている。



カルシシュ一家の住んだ松江市奥谷町の官舎

この官舎を数少ない歴史的価値のある洋館のひとつとして、カルシシュ氏関連の資料とともに保存されることを心から願って筆を置きたいと思う。

平成十二年八月二日 著者

春日神社などの神社をかこんで、光影のすてきな、適度に明るくい木立が美しい。子供の足で一周りするのに丁度手頃で安全な環境である。幼年時代を日本の幼なじみとここで過ごしたメヒテルトやエレーナがとくになつかしい思いを強くもっているようだ。

毎日、午後のお客さんのカラスが何時頃に現れるかまで、精確に観察して記憶しているのには感心する。

八雲が発見した神々の国の残像とは別にこの娘たちや家族が、落ち着いた生活のなかでとらえた昭和初期の松江、山陰の姿は、地方の歴史の中には非記録しておきたい、大切なものと思われる。そのためのおよすがとして、あの山陰にたつた一軒の異人館が一日でも長く記憶とともに

残ってほしい思いでいる。

以上、松江に生まれこの地で高等学校まで過ごして、今もこの地を定期的に訪れる松本昭氏の言葉である。

なお、本書を出版するにあたって旧制松江高等学校の同窓会員に協力を呼びかけていただいた、瀧合健二氏をはじめとする同窓会員の骨身を惜しまぬ、尽力に感謝の意を表したい。

今後は、旧制松江高等学校の同窓生とともに日本人研究者による、カルシシュ氏の研究の呼びかけを行なうだけでなく、関連資料の永久保存に関係者に提言するつもりでいる。

- 一九三九 松江高校退任・ドイツ帰国
- 一九四〇 ドイツ大使館勤務 副武官
- 一九四五 終戦
- 一九四七 ドイツ強制送還
- 一九四七 メヒテルト結婚
- 一九五四 メヒテルト離婚
- メヒテルト、ヘルベルトと再婚
- 一九五四 エドワード誕生
- 一九五七 フリッツの米国チャタヌーガ訪問
- 一九五七 エリザベート誕生
- 一九六〇 日本訪問中に三笠宮崇仁殿下主催のパーティに招待される(マールブルク) 年余生活にはいる
- 一九六七 アルベルト・コルベ(老人ホーム)入居
- 一九六八 日本訪問
- (旧制松江高等学校同窓会の招待による)
- 一九七一 フリッツ、カッセルで死
- 一九七八 エンメラ死
- 一九八九 著者とフリーデルンと偶然の出会い
- 二〇〇一 著者とメヒテルト夫妻との面会

薫陶を受けた著名人

旧制松江高等学校でカルシュ氏が職中に薫陶を受

発に従事した元島根大学教授・元琉球大学教授の酒井勝郎(五期理之卒)、元北海道大学印度言語学教授、僧侶で鈴木大拙後継者の古田紹欽(十期文之)、元滋賀大学国文学教授で雑俳史研究家の宮田正信(九期文之)、元大阪大学教授微生物研究所長で紫綬褒章を受章したウィルス分離研究の奥野良臣(十四期理之)がいる。

芸術界・出版界では元カリフォルニア州立ララントン大学教授でドイツ留学後欧米で活躍した舞踏家の邦正美(朴永仁)(八期文甲)、著しの手帖社設立、編集長を務めた花森安治(十期文甲)、岸田国士の劇作同人、大映グランプリ羅生門のプロデュース・放送作家の辻久一(九期文之)など、校卒に暇がない。

著名なエンメラの縁者

テオドール アクセンフェルト(伯父)
 フライブルク大学教授 一九三二年日本眼科字總會に招待され、来日日本各地を巡回講演。眼科字の世界的権威、モラー・アクセンフェルト園(モラクセラ・ラクターナ)を発見。

エディット アクセンフェルト(従妹)

けた者に

政界では衆議院議員で自治相を務めた赤澤正道(昭和一年卒業の四期文之)、元衆議院議員の樫橋勇(六期文之)、高田富之(九期文之)、元衆議院議員・労働大臣の山手満男(十一期文之)、衆議院議員 国務大臣十回、衆議院議長を歴任した福永健司(七期文甲)、衆議院議員で自民党総務会長、行政管理・防衛庁長官、運輸大臣を歴任した細田吉蔵(九期文甲)や元島根県知事の伊達慎一郎(五期文之)がいる。

外交官としては元イラン・インド・中華民国・ブラジル大使歴任の宇山厚(九期理甲)、海外移住事業団理事、ウルグアイ大使を歴任した 笹塚宝章(大城音敏)(十期文甲)がいる。

法曹界では、大阪弁護士会会長、日弁連会長を務めた和島石吉(五期文之)、元福岡高等裁判所長官で国士館大学学長を務めた綿引紳郎(十五期文之)、元広島高等裁判所長官の松本冬樹(八期理甲)と同じく元広島高等裁判所長官矢崎憲正(十期文之)が挙げられる。

学術界では元長崎医科大学放射線医学教授で、長崎の鐘で知られる永井隆(五期理之)、レーダ開

フライブルク国立音楽大学教授 多数の日本人ピアノリストを弟子にもつ、世界的ピアノリスト、チェンバリスト。草津アカデミーには一九八一年(第二回)から参加、講師として生徒を指導するとともに数多くの名演を残した。十一回目の参加となった一九九六年(第十七回)の来日を最後に演奏活動から身を引いていた。

聖エリザベート

石棺の装飾に記録チューリッゲン出身、エリザベート教会が彼女に因んで命名。エンメラの約七百年前の祖先

ヘルベルト セイント・ゴア

メヒテルトの夫で戦時中は米兵として従軍。ドイツシュピーゲル紙にヒットラーがパリ滞在中のカラ―記録映画を公開、売却 セイント・ゴア氏の出身地はライン川流域の古都市。この記事が縁で、二〇〇二年九月にセイント・ゴア市長より招待された。

- 『』を讀む。二〇〇一年七月三十一日
- 十三 東京新聞 著者に聞く「偶然の出会いで調査にのめり込む」湖畔の夕映えにカルシュ博士と松江」の若松素俊さん(二〇〇一年八月四日)
- 十四 山陰中央新報「松江での足跡たどり偉大な業績に再び光り」(二〇〇一年八月十六日)
- 十五 山陰中央新報 石川明「日独文化交流とカルシュ博士」(二〇〇一年十一月十一日)

ドイツ都市略図 ドレスデン マールブルク



マールブルクでのカルシュ夫妻の住所

Fritz als Student an der Liebigstraße neben Café Klingelstraße, (Ermelia als Studentin: Schlossrepp 1 am Obemarkt gegenüber dem Rathaus); 1921-1925 Weibenburgstr.32 (Heute:Schückingstr.32); 1948-1960: Barfüßerstr.4; 1960-1967: Barfüßerstr.5 vor dem ehemaligen Stadtor Grab von Dr. Karsch und Frau mit Sohn, Friedhof an der Ockerhäuser Allee bei der Kapelle

カルシュ顕彰に関する最近の報道記事

- 一 東京新聞 夕刊心のフマイル「忘れられた日本の恩師 エイン哲学者」(二〇〇〇年十月四日)。
- 二 日本経済新聞 文化欄「遠来の師々な追慕」(二〇〇〇年十一月十日)。
- 三 産経新聞 聞取版文化欄「独人哲学者 フリッツ・カルシュ氏 日本を愛し 偉大な足跡を残す」(二〇〇一年一月十日)。
- 四 産経新聞 聞取版文化欄「第二の故郷 日本を愛して あらエイン哲学者のこと」(二〇〇一年一月八日)。

- 五 読売新聞 島根版「カルシュ先生のことが知って、旧制松江高で十四年間教壇」(二〇〇一年二月一日)。
- 六 山陰中央新報「カルシュ博士の情懷提供を」
第二のハーン顕彰「東京の大学教授呼び掛け」(二〇〇一年四月六日)。
- 七 日独協会機関誌「かけ橋 Die Brücke」カルシュ一家が住んでいた邸宅 Die ehemalige Wohnung der Familie Karsch. 一〇〇一年五月出版
- 八 日独協会機関誌「かけ橋 Die Brücke」日独文化交流を支えた人々第一回 旧制松江高華学校教員フンツ・カレン博士 Förderer des japanisch-deutschen Kulturustausches (1) Lektor an der Meise Kotoyoko Dr.Pil Fritz Karsch (1893-1971) | 一〇〇一年九月 七八頁。
- 九 読売新聞 島根版「カルシュ博士と学生の交流小説に」旧制松江高で十四年間教壇へ 松江での功績知って 東京産科大若松教授が出版(二〇〇一年七月十八日)
- 十 山陰中央新報「明窓」(二〇〇一年七月十八日)
- 十一 致知「第二のラフカディオ・ハーン」(二〇〇一年八月) 八十七-八十八頁
- 十二 山陰中央新報 江角比郎 文化 残した足跡明らか 若松素俊著 湖畔の夕映えにカルシュ博士と松江

松江周辺図 松江市略図

著者略歴 若松秀俊 昭和二十一年福島県生まれ。昭和四十七年横浜国立大学薬学大学院修了後、東京医科歯科大医用器材研究所助手、足利工大助教授、福井大工学部教授を経て、平成四年より東京医科歯科大医学部教授。現在同大学院教授。専門は生体機能支援システム工学。昭和四十八年～五十年ドイツ学術交流会奨励学生としてエルランゲン・ニュルンベルグ大学医学部ハイオサイバネティクス研究所研究員、米国オレゴン州立大学、中国首都医科大学、韓国釜山国立大学などの客員教授・研究員兼任。工学博士（東京大学）。

注釈

¹ ドレスデン Osterザクセン州首都。バロック様式の古都。十九世紀まではドイツ圏でバイエルン王国と並んで最も裕福な地方であった。

² エルベ河 Die Elbe チエコの山岳地帯を水源としプラハ・ドレスデン、ライプツィヒ、ヘルリン、ハンブルクを経て北海に注ぐドイツ有数の河川。

³ フレンツェ Freize メンテチ家の保護のもとに発展したイタリヤ北部のルネッサンス発祥の都。街中が美術館の様相の芸術都。

⁴ ブリュールシュ・テラス Brühlsche Terrasse ゲーテが絶賛したエルベ河畔のプロムナード。「ヨーロッパのテラス」と呼んだ。

⁵ ヴェト von Goethe, Johann Wolfgang (一七四九～一八三三) 十八～十九世紀のドイツを代表する文豪。『若きヴェテルの悩み』、『ファウスト』などの著書あり。色彩豊かな自然科の字でも著述を残している。ヴァイマル公国の宰相として活躍。

⁶ アルベルティナム Albertinum テラスに面したルネサンス式の建造物。武器庫として使われた。現在はザクセン王家の財宝博物館。

⁷ ザクセン家 Familie Sachsen 神聖ローマ帝国皇帝を輩出したドイツ王家。ドレスデンを中心とした地域に栄えた。

⁸ ブラゼウィッツ Blasewitz ドレスデン東に位置するエルベ河沿岸沿いの町。

⁹ エッリヒェルフ Eichdorf ドレスデン東南に位置する町。町の近くの小さな村。園芸が盛んになった。

¹⁰ ロンテウイッツェン Loschwitz ブラゼウィッツとロンテウイッツェン橋で結ばれた現在ドレスデンの一部。エルベ河東岸の町。

¹¹ クリューガー Krüger, Hans (一八五二～一九二二) ドイツの建築家でロシエマン・エルベ橋の設計者。

¹² ケルナープラッツ Kornplatz シロスナラッツェンとブラゼウイッツェン間の路面電車が橋を超えて延長された終点広場。

¹³ ノイシュタット Neustadt ドレスデンの比較的新しい広場。

都市中心部

¹⁴ ギムナジウム Gymnasium 人文系、自然科学系の九年制の学校。主として大学進学のための学校。

¹⁵ ハーン Hahn, Adolf 小泉八雲一八五〇—一九〇四 アイランド生まれ、日本に帰化。松江に一年余り滞在。松江中学で教鞭。松江を去って、熊本、五高、東京帝大で西洋文学教授。日本を本格的に世界に紹介した文豪。
¹⁶ クライスト von Kleist, Heinrich (一七七七—一八一二) ドイツロマン主義劇作家。シラー以後の天才詩人といわれた。
¹⁷ ホフマン Hoffmann, Josef (一八七六—一九五七) ポーランド生まれ。二十世紀最大のリアリストの一人。十一歳のときに米田メトロポリタン歌劇場での演奏会で世界的名声を得る。後にドレスデンでルビンスクタインとタルヘールの下で学んだ。「音楽史上最も完成した天才少年」といわれた。親友のフランクに「対照的」と、彼の音楽は自由で自然な流れを特徴とした。

¹⁸ アウグスト二世 August II ドイツ王家ザクセン侯。俗にアウグスト・シュタルクとよばれる。このとき、現在の

ドレスデンの基礎が創られた。

¹⁹ マックスウェル Maxwell, James Clerk (一八三一—一八七九) ケンブリッジ大学教授。物理学者で電磁現象を動力学的に統一的に説明し、理論的に電磁波の存在を予言した。

²⁰ ヘルムホルツ von Helmholtz, Hermann Ludwig Ferdinand (一八一二—一八九四) 物理学者としてエネルギー保存則、熱力学、電気力学、光学に業績あり、生理学者として聴覚生理の基礎を築いた。ヘルリン大学教授時代にヘルツの才能を見いだした師。電磁誘導に関する研究でヘルツ学位論文指導。

²¹ ヘルム Hertz, Heinrich Rudolf (一八五七—一九四) ヘルムホルツの提案により、電磁波の空中伝播を実験的に証明した。ヘルツはスパークを飛ばし、同じ形の装置でスパークが飛び出たことを確認。即ち電波を受信した。

²² マルコーニ Marconi, Guglielmo (一八七四—一九三七) イタリアの電気技術者で、一八九九年英仏海峡、一九〇一年大西洋の無線通信を行った。一九一九年ノーベル賞受賞。

²³ ツヴィンガー 歌劇 Zwinger Schloß 建築家ヘッヘルマンと彫刻家ヘルダーザの作になる回廊の要所に様閣を配したバロック建築。ツヴィンガーは大守閣の意味。

²⁴ ゼンパー オペラ劇場 Semper Oper ゼンパーの設計になるイタリアル・ネッサンス様式。一八四二年に完成したザクセン宮廷劇場の通称である。シュッツェ、ウクナー、ワグナーらが歴代の指揮者を務めた。

²⁵ ウクナー von Weber, Carl Maria (一七八六—一八一二) ドイツロマン派オペラの先駆者。代表的な歌劇『魔弾の射手』。

²⁶ メンデルスゾーン Mendelssohn, Felix Jacob Ludwig (一八〇九—一八四七) ハンブルク出身。作曲家、指揮者として活躍。ライプツィヒ音楽院創設。オペラ、劇音楽、宗教音楽、交響、管弦楽曲、協奏曲など作品多数。

²⁷ ワグナー Wagner, Richard (一八一三—一八八三) 総合芸術としての楽劇創始。後世の歌劇に大きな影響を及ぼす。バイエルン国王の庇護のもとにバイロイトに歌劇場を設立し、今日のバイロイト音楽祭の発端を創った。『さまよえるオランダ人』、『トリスタンとイゾルデ』、『ニルン

ベルクのマイスタージンガー』など多くの歌劇作品を残す。
²⁸ タンホイザー 実在した吟遊詩人を主人公に中世と中世伝説を組み合わせて、一つの物語としてワグナーがまとめた歌劇である。初演は一八四五年ドレスデン宮廷劇場でワグナーの指揮によった。

²⁹ ヴィルヘルム二世 Wilhelm II (一八五九—一九四二) ドイツ皇帝在位(一八八八—一九一八) ヴィルヘルム二世の孫、独裁者として植民地獲得、軍備の拡大、産業保護など帝国主義政策によるドイツの強大化を図る。第一次大戦後に退位してオランダに亡命。

³⁰ サフイェヴォ事件 Sarajewo オーストリア・ハンガリー帝国の皇太子がボスニアの首都サライェヴォでセルビア青年に暗殺された。第一次大戦の引き金になった。

³¹ マールブルク Marburg ドイツ 随一の宗教都市。ドイツ最古のシニック教会がある。グリム兄弟の学んだ大学街でドイツ四大大学の一つ。

³² フライブルク Freiburg 十五世紀からの大学がある学園都市。長くハプスブルク家の支配にあった。黒い森からの疎水が流れる環境保全都市として知られている。

³³ フッサール *Fusserel, Edmund* (一八五九―一九二八) ドイツの哲学者。超意識論の現象学者でハイデッガーの師。人間の存在のなかに哲学的知を求めた美証的事実に基づいた認識を主張。

³⁴ ハイデッガー *Heidegger, Martin* (一八八九―一九七六) ドイツの哲学者。フッサールの現象学を継承。存在論的現象学。実存主義に移る。第一次大戦後ドイツの流行哲学となる。ナチスを支持。フライブルク大学総長。主著、存在と時間。

³⁵ パルティリ *Partii, Cristoph Ottfried* (一七六一―一八〇八) フリッツ・カルシュは『ドイツ理想主義の時代の理性的リアリズムの代表的人物 クリストフ・ゴットフリート・パルティリ』をハルトマンの指導でまとめ、哲学生博士の学位を取得した。

³⁶ ハルトマン *Hartmann, Nikolai* (一八八七―一九五〇) 東プロシエン(現ポーランド)のリガに生まれ、ベルブルク大学で医学、古典文献学、哲学を学んだ後、マルブルク大学で、ヘルマン・コーエン、ポール・ナトルフに師事する。マルブルク大学教授。ポール・ナトルフおよびビルドルフ・オットーらと共に同大学哲学科の三大スタ

ーといわれた。後、ケルン大学、ベルリン大学、ゲッティンゲン大学で教授を務めた。

³⁷ アーネストベルク *Ernst Berlekamp*

³⁸ 人智学 *Anthroposophie* エーレンに起こった通常の感覚では捉えられない世界の認識を目標とする思考上の実践を重視した学問体系。人間が、身体、魂、精神から構成されていること、一生を通して精神は次第に成熟して自らの真の姿を認識する。魂は自己認識と感覚の乗り物で、それを手段に精神が自分の周囲の身体と世界を認識・経験する。

³⁹ シュタイナー *Steiner, Rudolf* (一八六一―一九一七) 人智学を体系化し実際に自由ワルドルフ学校として理念を戦前に実現したがヒトラーに禁止された。戦後復活。日本ではシュタイナー学校として知られている。

⁴⁰ アクマン *Akman, Herold, K. Theodor* (一八六七―一九二〇) 細菌学者でも著名なフライブルク大学眼科科学教授。眼科臨床医の世界的権威。エンスマの父の養兄。

⁴¹ ウェネチア *Venezia* 五世紀中頃にイタリア・アドリア海の浅瀬に建設された水の都。九世紀頃から共和国として発展し、十六世紀には豊かで強力な国になった。

⁴² ニース *Nice* 南フランスコート・ダジュールにある有

名な避暑地で「天使の湾」があり、この地で行われるでカーニバルが知られている。

⁴³ プラーゲ *Plage, Wilhelm* 松江高等学校でのカルシュ氏の前任者。ヨーロッパ著作権の代表権を日本に持ち込み、音楽著作権などの知的所有権を主張し、日本政府ともわたりあい、国内で著作権料を請求した。プラーゲ旋風で知られている。

⁴⁴ カント *Kant, Immanuel* (一七二四―一八〇四) ニュートンの影響をもとに、批判的に合理論と経験論を総合した「純粹理性批判」の中で経験的現象に限定して、認識範囲を論じた。また人格と意志の自由を基礎づけた。「実践理性批判」や「判断力批判」の著を残した。ドイツの近代哲学の創始者。

⁴⁵ ジェノヴァ *Genova* 共和国として十一―十四世紀まで栄えた。「ロコンブスの故郷」。イタリアをきつての港町で工業都市である。

⁴⁶ シンバルタル *Gibraltar* 地中海と大西洋を隔てるスペインとアフリカの間の海峡。

⁴⁷ ハンブルク *Hamburg* ドイツ最大の国際貿易都市。河川

港で都市国家としての独自の歴史を誇るでハンザ同盟の一員である。現在市そのものがブレーメンなどと同様に一州を構成。

⁴⁸ ミラノ *Milano* ポー川流域のロンバルディアに位置するイタリア経済の中心地。長い歴史を誇る建築のオペラの殿堂スカラ座やダヴィンチの『最後の晩餐』の絵画などがある。

⁴⁹ ハーヴェン *Haven* *Gerhard* ヘルギー国産のドイツ語圏の生まれ。松江殿町在住。カトリック教会の神父。一九六八年カルシュ一行と再会。東京都千代田区の聖イグナチオ教会との交流があった。

⁵⁰ ローレンツ *Die Lorelei*ライン河の流れの速くなる場所にある大きな岩に座する美女が舟人を魅了し、舟人を沈める伝説の物語。歌が有名である。

⁵¹ リンデンバウム *Der Lindenbaum* 菩提樹の幹に愛の言葉を刻む。シューベルト歌曲『冬の旅』のなかの曲。

⁵² ハインレーズライン *Das Heidensteinlein* ゲーテの野バラの詩にシューベルトが作曲した有名な曲。

⁵³ ソルター *Solter* *Der Soldatenlied* 日本の軍歌に相

当時のドイツの兵隊の歌。
⁵⁴ マルクス Marx, Kai (一八八〇-一八八三)ヘーゲルの影響を受けたドイツの科学の社会主義者・革命家。一八四八年「共産党宣言」を起草。「経済学批判」「資本論」の著者。
⁵⁵ ニーチェ Nietzsche, Friedrich (一八四四-一九〇〇)《ツァラトゥストラはかく語りき》でキリスト教を鋭く攻撃。超人と永劫回帰の思想による独自の形而上学を樹立した哲学者。

⁵⁶ シンクラー Spengler, Oswald (一八〇九-一九三六)ドイツ人、パンゲンブルク出身。「ヨーロッパの没落: Der Untergang des Abendlandes」を著し、現在の混乱を予測している。一九一八年出版したこの著作は、一九五〇年までに四〇版を重ねた。彼はインド、ギリシア、ローマ、アラビア、西洋、エジプト、中国などの文明について著書し、文明が一つの生命体として四つの歴史の段階を経て最終的没落の運命をたどる、これによろしく、八〇〇年カール大帝の治世にローンバ統 時を起す。この西洋文明は、二十一世紀に没落・滅亡の運命をたどる。
⁵⁷ シンクラー Hermann (一八七九-一九六三)マルバッハの近くのカルトに牧師の子として生まれた。「車輪の下」は神学校時代の体験をもとに書いた。一九四六年「ヘルムツォグ」。

⁵⁸ ベーリング・ヴェルケ社 Berling Werke ドイツの製菓会社で曲線筆を製造している。
⁵⁹ アグファ社 AGFA ドイツの代表的なフィルムや撮影装置の会社。
⁶⁰ ゲーテインスティテュート Goethe Institut 外国人を対象にドイツ語教育を施す。世界各地に設置されている。
⁶¹ ローテンブルク Rothenburg ロンテック街道のほぼ北の起点。正式にはローテンブルク オフ デア タウバー。戦災に遭わなかった中世風の土曜。
⁶² ハインデルベルク Heidelberg ゲーテの戯曲「アルト・ハインデルベルク」の舞台になった中世の城と紅葉が美しい。ドイツ最古の名門大学があり、ノーベル賞受賞者を数多く排出している。
⁶³ ヒルヴェット Picht-Axenfeld, Edith (一九一四-二〇〇一)フライブルク国立音楽大学教授。一九三七年にシヨパン・コンクールでシヨパン賞受賞。世界的なピアニスト、チェンバリスト。テオドル・アクセンフェルトの未婚、エンヌラの母方の従妹。

⁶⁴ バーゼル Basel ドイツ・フランス・スイスの国境近くの国際都市。ライン河の起地。
⁶⁵ ゲーテアナム Getheum Drach スイスのドルナッハ

⁶⁶ ウルム Ulm シュバールン地方の中心都市。ドナウ河の起地。大聖堂で有名。

⁶⁷ ドロースティック Drossig 森の美しいチューリンゲンの小さな村。

⁶⁸ カッセル Kassel ヘッセン州の首都。欧州随一の丘陵庭園がある。クリムホルストの地メルヘンを取捨した。

⁶⁹ メムリンゲン Memmingen リン河の近くの町。
⁷⁰ バートシャッペン Bad Schachen ボーデン湖周辺の小さな村。

⁷¹ ケーグスフェルト Königsfeld in Schwarzwald 黒い森の中の小さな村。

⁷² ブレーメン Bremen ドイツ最古の貿易都市。河川港でハンザ同盟の一員。十七世紀より帝国自由都市として栄えてきた。ハンブルクと同様に一州を構成。

⁷³ ハンザ同盟 Hansa 十二世紀リューベックを盟主としてハンブルク、ブレーメン、ヘルリン、ケルン、タンツィトなどが自由貿易のため結成した都市同盟。商業の安全のため、貨幣、度量衡を共通し、共同の陸海軍をかけた。

⁷⁴ 自由カールト学校 Freie Waldorfschulen もの教育の根本に「精神」と「魂」を据え、子供が健全に「身」を、成人に成長し「真」の姿、の認識に向けての発達を誘導するシュタイナーの教育思想を掲げた十二年制の学校。

にある入留字の資料の保存館。
⁷⁵ ボーデン湖 Bodensee ドイツ・スイス・オーストリア国境にある湖。保養地・観光地として有名。
⁷⁶ 大國王帝 建築須佐之尊命即ち櫛田比売の六代目の子孫で出雲王朝の創始者。『国分抄』の神話に登場する神。皇孫の禰尊命に国を譲り、出雲(杵築宮(出雲大社))に身を隠した。

⁷⁷ 八束水田建彦 国引老伝説に登場する神。
⁷⁸ 石投げくらす 武甕槌神と建御名方神が石の投げくらすをしたという神話。
⁷⁹ シュトゥットガルト Stuttgart バーデン・ヴュルテンブルク州の首都。ドイツを代表する自動車メーカーのボルシエの本社がある。